

# HP Operations Smart Plug-in for BEA WebLogic Server

for HP Operations Manager for UNIX®

ソフトウェア バージョン : 7.00

---

## インストールおよび設定ガイド

ドキュメント リリース : 2009 年 12 月

ソフトウェア リリース : 2009 年 12 月



## ご注意

### 保証

HP 製品、またはサービスの保証は、当該製品、およびサービスに付随する明示的な保証文によってのみ規定されるものとします。ここでの記載で追加保証を意図するものは一切ありません。ここに含まれる技術的、編集上の誤り、または欠如について、HP はいかなる責任も負いません。

ここに記載する情報は、予告なしに変更されることがあります。

### 権利の制限

機密性のあるコンピュータ ソフトウェアです。これらを所有、使用、または複製するには、HP からの有効な使用許諾が必要です。商用コンピュータ ソフトウェア、コンピュータ ソフトウェアに関する文書類、および商用アイテムの技術データは、FAR12.211 および 12.212 の規定に従い、ベンダーの標準商用ライセンスに基づいて米国政府に使用許諾が付与されます。

### 著作権について

© Copyright 2002-2006, 2008-2009 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

### 商標について

UNIX® は、The Open Group の登録商標です。

Windows® は、米国における Intel Corporation の登録商標です。

Java™ は、Sun Microsystems, Inc. の米国内での登録商標です。

Oracle は、Oracle Corporation とその子会社の登録商標です。

## ドキュメントの更新情報

このマニュアルの表紙には、以下の識別情報が記載されています。

- ソフトウェアのバージョン番号は、ソフトウェアのバージョンを示します。
- ドキュメント リリース日は、ドキュメントが更新されるたびに変更されます。
- ソフトウェア リリース日は、このバージョンのソフトウェアのリリース期日を表します。

最新の更新のチェック、またはご使用のドキュメントが最新版かどうかの確認には、次のサイトをご利用ください。

**<http://h20230.www2.hp.com/selfsolve/manuals>**

このサイトを利用するには、HP パスポートへの登録とサインインが必要です。HP パスポート ID の取得登録は、次の Web サイトから行なうことができます。

**<http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html>**

または、HP パスポートのログイン ページの **[New users - please register]** リンクをクリックします。

適切な製品サポート サービスをお申し込みいただいたお客様は、最新版をご入手いただけます。詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。

## サポート

次の HP ソフトウェアサポート オンライン Web サイト を参照してください。

**<http://www.hp.com/go/hpsoftwaresupport>**

HP ソフトウェアが提供する製品、サービス、サポートに関する詳細情報をご覧ください。

HP ソフトウェア サポート オンラインではセルフソルブ機能を提供しています。お客様の業務の管理に必要な対話型の技術支援ツールに素早く効率的にアクセスいただけます。HP ソフトウェアサポート Web サイトのサポート範囲は次のとおりです。

- 関心のある技術情報の検索
- サポート ケースとエンハンスメント要求の登録とトラッキング
- ソフトウェア パッチのダウンロード
- サポート契約の管理
- HP サポート窓口の検索
- 利用可能なサービスに関する情報の閲覧
- 他のソフトウェア カスタマとの意見交換
- ソフトウェア トレーニングの検索と登録

一部を除き、サポートのご利用には、HP パスポート ユーザーとしてご登録の上、ログインしていただく必要があります。また、多くのサポートのご利用には、サポート契約が必要です。

アクセス レベルに関する詳細は、以下の Web サイトを参照してください。

**[http://h20230.www2.hp.com/new\\_access\\_levels.jsp](http://h20230.www2.hp.com/new_access_levels.jsp)**

HP パスポート ID を登録するには、以下の Web サイトにアクセスしてください。

**<http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html>**

# 目次

<b>第 1 章 HP Operations Smart Plug-in for BEA WebLogic Server の概要</b> .....	13
WebLogic SPI について.....	13
Smart Plug-in のデータ.....	13
Smart Plug-in の使用とカスタマイズ.....	14
WebLogic SPI のコンポーネント.....	14
ポリシー.....	14
ツール.....	15
レポート.....	15
グラフ.....	15
WebLogic SPI の機能.....	15
サーバーのパフォーマンスおよび可用性の情報の収集と解釈.....	15
情報の表示.....	16
HP Reporter を使用したレポートの生成.....	18
HP Performance Manager によるデータのグラフ作成.....	18
ポリシーおよびメトリックのカスタマイズ.....	19
<b>第 2 章 WebLogic SPI のインストールおよびアップグレード</b> .....	21
パッケージのインストール.....	24
グラフ作成パッケージ.....	24
レポート パッケージ.....	24
インストール環境.....	24
HPOM サーバーへの SPI コンポーネントの標準インストール.....	24
HPOM クラスタ環境での標準インストール.....	24
スタンドアロンの HP Performance Manager.....	24
前提条件.....	25
ハードウェア要件.....	25
ソフトウェア要件.....	25
WebLogic SPI のインストール.....	26
ローカル管理サーバー.....	26
HP-UX での DVD マウント.....	26
Solaris での DVD マウント.....	26
WebLogic SPI のインストール.....	26
HPOM クラスタ環境.....	27
クラスタ対応管理サーバーでの SPI インストール.....	27
インストールの確認.....	27
WebLogic SPI のアップグレード.....	27
制限事項.....	28
HPOM 8.xx から HPOM 9.0x への管理サーバーのアップグレード.....	29
HPOM 8.xx から HPOM 9.0x への WebLogic SPI 6.00 の移行.....	29
システム間の HPOM の移行.....	29

HPOM 9.0x での WebLogic SPI 6.00 の WebLogic SPI 7.00 へのアップグレード .....	30
HP Operations Smart Plug-in Upgrade Toolkit を使用した WebLogic SPI のアップグレード .....	30
HPOM コンソールによるスタンドアロン HPOM 9.0x サーバー上の WebLogic SPI のアップグレード .....	30
<b>第 3 章 WebLogic SPI の設定 .....</b>	<b>33</b>
前提条件 .....	33
オペレータ作業範囲をオペレータに割り当てる .....	33
オペレータへのツールの割り当て .....	34
アプリケーション サーバーのステータスを確認する .....	36
WebLogic ログイン情報を収集する .....	37
WebLogic Server バージョン 9.x 以上 .....	37
管理サーバーからの WebLogic SPI の設定 .....	38
ノードを WebLogic ノード グループに追加する .....	38
管理対象ノードへのカテゴリの割り当て .....	40
インストルメンテーションポリシーの管理ノードへの配布 .....	41
検出の実行 .....	42
追加のプロパティを設定する .....	43
追加のプロパティの設定 .....	43
検出プロセスを確認する .....	44
ポリシーの管理ノードへの割り当て .....	45
WebLogic SPI ポリシーを配布する .....	45
設定の実行 .....	46
WebLogic SPI 設定を確認する .....	47
追加設定 .....	48
条件付きのプロパティ .....	48
条件付きプロパティの設定 .....	48
UNIX 管理対象ノードでの非 root HTTPS エージェントの設定 .....	48
高可用性環境の設定 .....	50
前提条件 .....	50
高可用性環境での WebLogic SPI の設定 .....	50
WebLogic SPI 監視機能の設定ファイルを作成する .....	50
クラスタ化されたアプリケーションの設定ファイルを作成する .....	51
WebLogic SPI を設定する .....	52
検出と設定のシナリオ .....	53
事例 1: 管理ポートがオンになっている (HTTPS モードで WebLogic Server を実行している) .....	53
事例 2: 管理ポートがオンになっていない (WebLogic Application Server を仮想 IP で実行している) .....	54
CODA との統合 .....	55
<b>第 4 章 ツールの使用 .....</b>	<b>57</b>
概要 .....	57
SPI Admin ツールグループ .....	57
Discover or Configure WLSSPI .....	59
Init Non-Root .....	59
Self-Healing Info .....	59
Start/Stop Monitoring .....	60
Start/Stop Tracing .....	60
Verify .....	61

View Error File .....	61
View Graphs .....	61
WebLogic Admin ツールグループ .....	61
Check WebLogic .....	62
Start WLS Console .....	63
Start/Stop WebLogic .....	63
View Deployed Apps .....	64
View WebLogic Log .....	64
View WebLogic Servers .....	64
View Application Activation Status .....	65
View Application Timeout .....	66
メトリック レポート .....	67
JMX Metric Builder ツール .....	67
ツールの起動 .....	68
Discover or Configure WLSSPI ツールの起動 .....	68
すべてのツールの起動 .....	68
<b>第 5 章 WebLogic SPI ポリシーのカスタマイズ .....</b>	<b>69</b>
概要 .....	69
ポリシーの基本的なカスタマイズ .....	72
メトリック ポリシーの変更 .....	72
警告通知生成の変更 .....	74
ポリシーの高度なカスタマイズ .....	75
カスタマイズするメトリックの選択 .....	75
パラメータ付きの WebLogic SPI コレクタ/アナライザ コマンドの使用 .....	76
WebLogic Server コマンド パラメータの使用法 .....	76
JMX コマンド パラメータの使用法 .....	78
監視されたすべてのメトリックの収集間隔の変更 .....	80
選択したメトリックの収集間隔の変更 .....	81
個々のアプリケーション、EJB、サーブレット、または JDBC のしきい値のカスタマイズ .....	82
例 .....	82
タグ付きのカスタム ポリシーの作成 .....	83
新しいポリシー グループを作成するには .....	83
ポリシー変数 .....	84
デフォルトの WebLogic SPI ポリシーの復元 .....	84
テキスト ベース レポートの表示 .....	85
自動アクション レポート .....	85
自動アクション レポートを表示するには .....	86
登録ツール レポート .....	86
手動でレポートを生成するには .....	86
サポートされていないプラットフォーム上の WebLogic を監視する方法 .....	88
リモート ノード (WebLogic SPI がサポートしていないプラットフォーム上で動作) を	
監視するための要件 .....	88
概要 .....	88
リモート監視 .....	88
リモート システムの監視の設定 .....	89
ローカル ノードの検出 .....	89
リモートの WebLogic Server を設定する .....	90

HP Performance Agent を統合する (オプション).....	91
ローカル ノードを WebLogic ノード グループに割り当てる .....	91
ログファイル用のリモート監視の設定 (オプション) .....	91
リモート ログファイルのログファイル ポリシーの設定 .....	92
リモート監視の制限 .....	92
ライセンス数に対する WebLogic SPI ノードの確認.....	93
<b>第 6 章 HP のレポート作成およびグラフ作成ソリューションと WebLogic SPI との統合 .....</b>	<b>95</b>
HP Reporter との統合 .....	95
HP Performance Manager との統合.....	98
警告通知条件を示すグラフの表示 .....	99
過去/現在の状態を示すグラフの表示 .....	99
グラフを生成するオペレータ アクションを用いた Web ページ表示の起動.....	100
日付の範囲の指定.....	100
統合の例.....	100
<b>第 7 章 トラブルシューティング.....</b>	<b>111</b>
Self-Healing Info ツール.....	111
ログ記録.....	112
管理サーバー .....	112
管理対象ノード.....	112
検出プロセスのトラブルシューティング.....	113
Java ホーム ディレクトリの確認.....	115
設定のトラブルシューティング.....	117
収集のトラブルシューティング .....	117
ツールのトラブルシューティング .....	118
エラー メッセージ .....	119
<b>第 8 章 WebLogic SPI の削除 .....</b>	<b>121</b>
SPI コンポーネントの削除 .....	121
管理サーバーから WebLogic SPI ソフトウェアを削除する .....	121
WebLogic SPI メッセージ グループを削除する .....	121
WebLogic SPI ユーザー プロファイルを削除する.....	122
レポート パッケージを削除する (オプション) .....	122
グラフ作成パッケージを削除する (オプション).....	122
クラスタ環境からの WebLogic SPI の削除.....	123
<b>A ファイルの位置.....</b>	<b>125</b>
HPOM 管理サーバーのファイルの位置.....	125
管理対象ノードのファイルの位置.....	125
非 Root HTTPS エージェント環境 .....	126
<b>B 設定.....</b>	<b>127</b>
構造 .....	127
グローバル プロパティ.....	127
GROUP ブロック.....	127

NODE ブロック	128
サーバー固有のプロパティ	128
プロパティ優先順位	128
設定エディタ	129
Configuration Editor: ツリー	129
Configuration Editor: ボタン	131
Configuration Editor: アクション	131
Add Application Server	132
Add Group	133
Add Node	133
Remove Application Server/Remove ALL App Servers	134
Remove Group/Remove ALL Groups	134
Remove Node/Remove ALL Nodes	135
[Set Configuration Properties] タブ	135
[View Current Configuration] タブ	136
設定プロパティ	138
プロパティの定義	139
サンプル設定	149
例 1: 単一のノード /2 つのサーバー	149
例 2: 複数のノード/繰り返されるプロパティ	150
例 3: 複数の WebLogic Server バージョン	151
例 4: 仮想 IP アドレスを持つ WebLogic Server	151
例 5: デフォルト以外の WebLogic Server の起動場所	152
<b>C エラー メッセージ</b>	153
WASSPI-1	154
WASSPI-2	154
WASSPI-3	155
WASSPI-4	155
WASSPI-5	156
WASSPI-6	156
WASSPI-7	157
WASSPI-8	157
WASSPI-9	158
WASSPI-10	158
WASSPI-11	159
WASSPI-12	159
WASSPI-13	159
WASSPI-14	160
WASSPI-15	160
WASSPI-16	161
WASSPI-17	161
WASSPI-18	162
WASSPI-19	162
WASSPI-20	162
WASSPI-21	163
WASSPI-23	163
WASSPI-24	163

WASSPI-26	164
WASSPI-27	164
WASSPI-28	164
WASSPI-29	164
WASSPI-30	165
WASSPI-31	165
WASSPI-32	165
WASSPI-33	165
WASSPI-34	166
WASSPI-35	166
WASSPI-36	166
WASSPI-37	167
WASSPI-38	167
WASSPI-39	167
WASSPI-40	168
WASSPI-41	168
WASSPI-42	168
WASSPI-43	169
WASSPI-201	169
WASSPI-202	169
WASSPI-203	170
WASSPI-204	170
WASSPI-205	170
WASSPI-206	171
WASSPI-207	171
WASSPI-208	171
WASSPI-209	172
WASSPI-210	172
WASSPI-211	172
WASSPI-212	173
WASSPI-213	173
WASSPI-214	173
WASSPI-215	174
WASSPI-216	174
WASSPI-218	174
WASSPI-219	175
WASSPI-221	175
WASSPI-222	175
WASSPI-223	176
WASSPI-224	176
WASSPI-225	176
WASSPI-226	177
WASSPI-227	177
WASSPI-228	177
WASSPI-229	178
WASSPI-230	178
WASSPI-231	178

WASSPI-232 .....	179
WASSPI-233 .....	179
WASSPI-234 .....	179
WASSPI-235 .....	180
WASSPI-236 .....	180
WASSPI-237 .....	180
WASSPI-238 .....	180
WASSPI-241 .....	181
WASSPI-244 .....	181
WASSPI-245 .....	181
WASSPI-247 .....	182
WASSPI-248 .....	182
WASSPI-249 .....	182
WASSPI-254 .....	183
その他のすべてのエラー .....	183

用語集 .....	185
-----------	-----

索引 .....	191
----------	-----



# 第1章 HP Operations Smart Plug-in for BEA WebLogic Server の概要

HP Operations Smart Plug-in for BEA WebLogic Server (WebLogic SPI) を使用すると、HP Operations Manager (HPOM) for UNIX コンソールから WebLogic Server を管理できます。WebLogic SPI には、HPOM にはない監視機能があります。詳細については、『*HP Operations Manager for UNIX コンセプト ガイド*』を参照してください。

## WebLogic SPI について

WebLogic SPI を HPOM と共に使用することにより、WebLogic Server を使用するシステムを一元的に監視して管理できるアプリケーションが提供されます。HPOM コンソールから HPOM パフォーマンスおよび問題管理プロセスを適用し、WebLogic Server を使用してシステムを監視できます。WebLogic SPI メトリックは自動的に HP Operations エージェントに送信されます。このメトリックでは、警告通知を生成するほか、サーバーの用途、可用性、およびパフォーマンスの傾向を分析するためにレポートやグラフをまとめることができます。また、WebLogic SPI を HP Reporter および HP Performance Manager (いずれの製品も別途購入する必要があります) に統合すると、レポートとグラフをより柔軟に作成できるようになり、機能も拡大します。WebLogic SPI と他の HP 製品との統合については、第6章「[HP のレポート作成およびグラフ作成ソリューションと WebLogic SPI との統合](#)」を参照してください。

## Smart Plug-in のデータ

WebLogic SPI では、以下の領域に関する、データを収集する複数のサーバー関連のメトリックを利用できます。

- サーバーの可用性
- サーバーのパフォーマンス
- メモリの使用率
- トランザクション率
- サーブレットの実行時間、タイムアウト、要求率
- JDBC の接続状況
- Web アプリケーションの処理
- Java メッセージ サービス処理
- クラスタ処理
- 予定された WLS アクションの例外数

## Smart Plug-in の使用とカスタマイズ

WebLogic Server の管理者は、WebLogic SPI ポリシーを変更して、WebLogic Server の運用上重要なメトリックを選択できます。ポリシーには、着信データを事前定義済みのルールに照らして評価するための設定が含まれています。このルールにより、有益な情報を含むメッセージが生成されます。メッセージは、重要度レベルで色分けされて表示されます。これらのメッセージを調べて、問題の分析と解決に役立てることができます。また、特定のイベントやしきい値の違反に対し、修復アクションが事前に定義されています。この修復アクションは、自動的に実行されるか、またはオペレータにより開始されます。メッセージをダブルクリックすると、**[指示文]** タブの下に修復アクションが表示され、[メッセージのプロパティ] ウィンドウの **[注釈]** タブの下に、自動で生成されたメトリックレポートが表示されます。

## WebLogic SPI のコンポーネント

WebLogic SPI には、次に示す 4 つの主要コンポーネントがあります。

- ポリシー
- ツール (レポートを含む)
- レポート
- グラフ

ツールとポリシーを使用して、データをメッセージ、注釈、メトリックレポートの形式で設定および受信できます。これらのメッセージ (メッセージ ブラウザに表示)、注釈 (メッセージ プロパティで使用可能)、およびメトリックレポート (ツールまたはメッセージの詳細で使用可能) は、特定の管理対象ノード上で実行されているサーバーの現在の状態についての情報を提供します。

WebLogic SPI 設定ツールを使用すると、特定の管理対象ノード上の選択済みサーバー インスタンスに対する管理サーバーの接続を設定できます。接続の設定完了後、ノードにポリシーを割り当てることができます。管理対象ノードで **HP Operations** エージェント ソフトウェアが実行されている場合、WebLogic SPI のレポート アプリケーションを使用してメトリックレポートを生成できます。さらに、WebLogic SPI のデータを示すグラフも生成できます (メッセージ プロパティで作成可能)。

## ポリシー

WebLogic SPI は、WebLogic Server を監視するポリシーで構成されます。ポリシーには、着信データを事前定義済みのルールに照らして評価するための設定が含まれています。このルールにより、有益な情報を含むメッセージが生成されます。メッセージは、重要度レベルで色分けされて表示されます。これらのメッセージを調べて、問題の分析と解決に役立てることができます。また、特定のイベントやしきい値の違反に対し、修復アクションが事前に定義されています。この修復アクションは、自動的に実行されるか、またはオペレータにより開始されます。メッセージ テキストをダブルクリックすると、**[指示文]** タブの下に修復アクションが表示され、**[注釈]** タブの下に、自動で生成されたメトリックレポートが表示されます。監視機能は、ツールのクリティカルなイベントに関する警告機能と、アプリケーション サーバーの重要なパフォーマンス メトリックのログ機能で構成されています。ログに記録されたメトリックは、グラフの作成に使用できます。ポリシーについての詳細は、[概要 \(69 ページ\)](#) を参照してください。

## ツール

WebLogic SPI ツールには、設定、トラブルシューティング、レポート生成ユーティリティがあります。[Tool Bank] ウィンドウで、WebLogic SPI ツールは以下のツール グループで構成されます。

- WebLogic Admin (WLSSPI:ADMIN)
- Metric Reports (WLSSPI:REPORTS)
- SPI Admin (WLSSPI:SPI\_ADMIN)
- **JMX Metric Builder:** このツール グループは、SPIJMB ソフトウェアをインストールしている場合にのみ利用できます。

ツールの詳細は、第 4 章「ツールの使用」を参照してください。

## レポート

SPI パッケージには、SPI で提供されるデフォルトのレポート作成ポリシーが含まれています。レポートは、WebLogic SPI データを使用して Reporter によって生成されます。レポートでは、統合された履歴データが管理用のプレゼンテーション形式で Web ページとして生成されるので、一定期間の WebLogic Server のパフォーマンスを分析できます。WebLogic SPI と HP Reporter を統合して統合されたレポートを取得する詳細は、HP Reporter との統合 (95 ページ) を参照してください。

## グラフ

SPI パッケージには、SPI で提供されるデフォルトのグラフ作成ポリシーが含まれています。グラフは、SPI によって作成されたデータソースで収集されたメトリックから描画されます。これらのグラフは、サーバーの用途、可用性、およびパフォーマンスの傾向を分析するために使用されます。WebLogic SPI と HP Performance Manager を統合して統合されたグラフを取得する詳細は、第 6 章「HP のレポート作成およびグラフ作成ソリューションと WebLogic SPI との統合」を参照してください。

# WebLogic SPI の機能

WebLogic SPI のメッセージ生成、レポート作成、アクション実行の各機能は、HPOM のポリシーの概念に基づいています。詳細については、『*HP Operations Manager for UNIX コンセプト ガイド*』を参照してください。このツール内の設定により、WebLogic Server 内のさまざまな条件が定義され、HPOM 管理サーバーに情報が送り返されます。この情報を利用して、潜在的または既存の問題に未然に対処し、Web トランザクション処理に深刻な悪影響が出ないようにすることができます。WebLogic SPI は、以下のセクションで説明される機能を備えています。

## サーバーのパフォーマンスおよび可用性の情報の収集と解釈

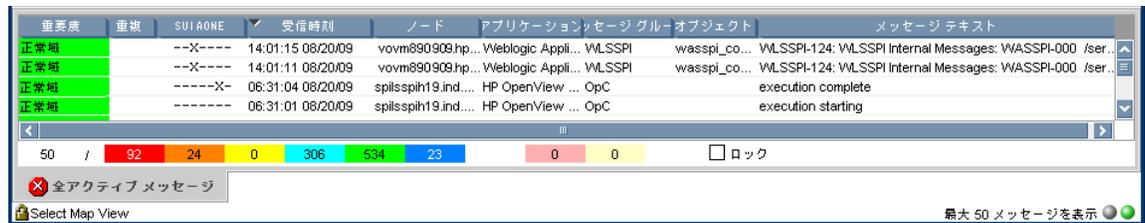
WebLogic SPI を設定し、ポリシーを管理対象のノードに配布すると、SPI はサーバー パフォーマンスと可用性データの収集を開始します。このデータは配布されたポリシー内の設定と比較されます。これらのポリシーは、キューのスループット率、キャッシュの使用の割合、タイムアウト率、平均トランザクション時間など、WebLogic Server 内で発生する条件を定義します。ポリシーでは、デフォルトのしきい値と比較してこれらの条件が監視され、しきい値を超えるとメッセージが生成されます。

## 情報の表示

しきい値を超えると、WebLogic SPI ポリシーはメッセージを生成します。このメッセージは、以下のように表示されます。

**メッセージ ブラウザのメッセージ:** HP Operations エージェント ソフトウェアは、WebLogic Server パフォーマンスおよび可用性のために収集された値をそれらの特定領域に関連するモニタ ポリシー設定と比較します。適切なメッセージを HPOM コンソールに転送します。これらのメッセージは、HPOM メッセージ ブラウザでは重要度レベルで色分けされて表示されます。メッセージ ブラウザを表示するには、管理 UI から [Integrations] → [HPOM for Unix Operational UI] を選択します。

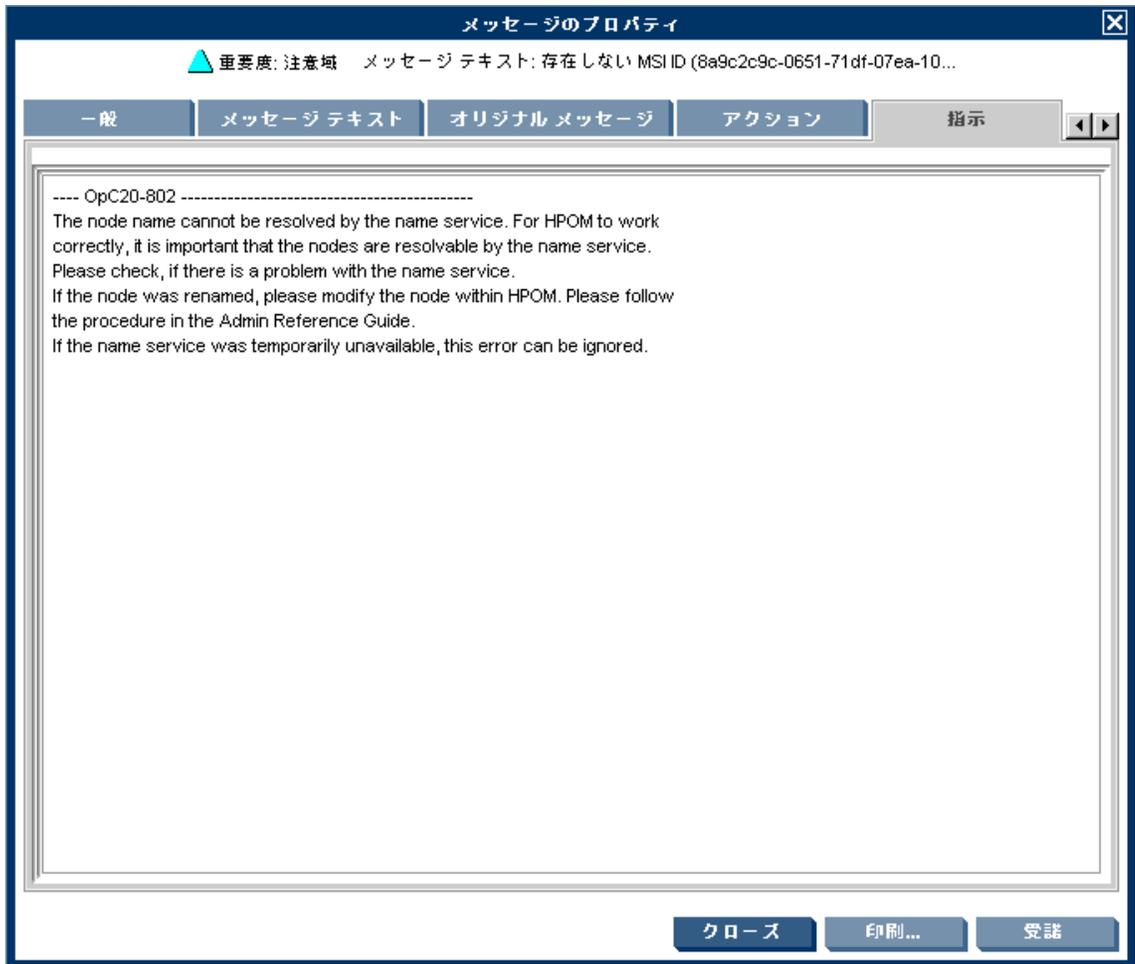
図1 メッセージ ブラウザ



**指示文:** WebLogic DB SPI プログラムが生成したメッセージには、問題を分析し、解決するのに役立つ指示文が含まれています。イベントに割り当てられている修復アクションを手動で実行するか、自動で開始できます。

指示文は、[メッセージのプロパティ] ウィンドウにあります。メッセージ テキストをダブルクリックします。[メッセージのプロパティ] ウィンドウが表示されます。指示文を表示するには、**指示文** タブをクリックします。指示文は、『*HP Operations Smart Plug-in for BEA WebLogic Server リファレンスガイド*』にも記載されています。

図2 指示文



**ASCII テキスト レポート:** 指示文の他にも、自動アクション レポートを生成するメッセージがあります。このレポートには、特定の **WebLogic Server** インスタンスの状態が表示されます。レポートを使用できる場合、[メッセージのプロパティ] ウィンドウの **[注釈]** タブをクリックすると、表示できます。

図3 ASCII テキスト レポート



## HP Reporter を使用したレポートの生成

WebLogic SPI を HP Reporter と統合し、管理用の Web ベースのレポートを生成できます。WebLogic SPI レポート パッケージには、これらのレポート生成のポリシーが含まれています。レポート パッケージは、Reporter の Windows システムにインストール可能です。

製品のインストールと基本設定を完了すると、Reporter により、要約および統合されたデータのレポートが毎晩生成されます。このレポートを参考にして、一定期間の WebLogic Server のパフォーマンスを評価できます。

Reporter は WebLogic SPI データを使用して、サブレットの要求率、トランザクションのスループット率、平均トランザクション実行時間などを示すレポートを生成します。

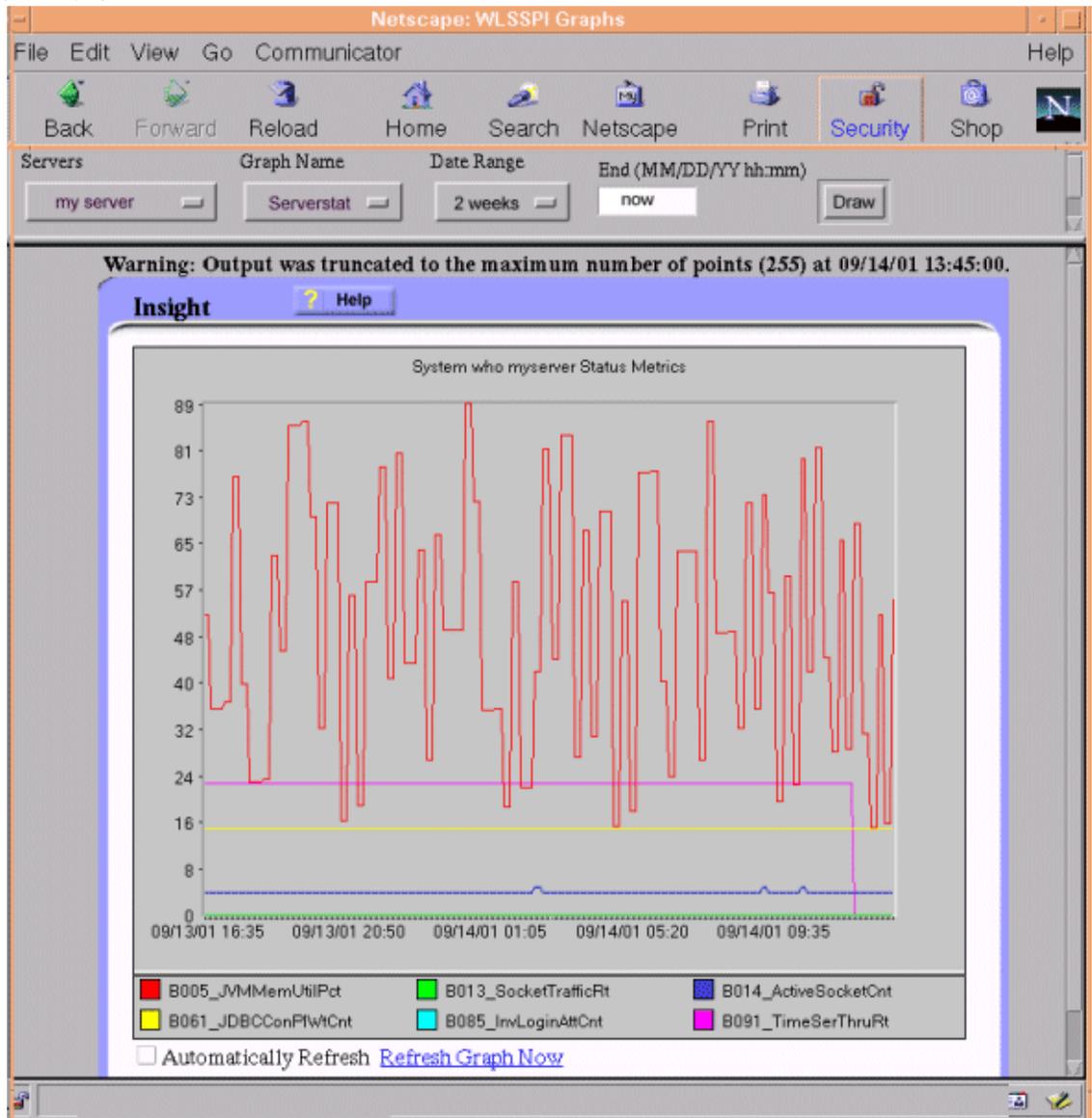
## HP Performance Manager によるデータのグラフ作成

WebLogic SPI により収集されたメトリックはグラフ化できます。値を表示してトレンドの分析に使用できます。

WebLogic SPI を HP Performance Manager に統合し、グラフを生成して表示できます。(WLSSPI Admin ツールグループから **View Graphs** ツールを使用してグラフを表示します)。これらのグラフは、WebLogic SPI により収集されたメトリック値を示します。[アクション] をクリックすると、ほとんどの WebLogic SPI 警告

通知メッセージからのデータをグラフ化して表示できます。**[Perform]** は、[メッセージのプロパティ] ウィンドウの [アクション] タブ内にあります。このアクションにより Web ブラウザが起動され、そのメッセージを生成したメトリックと関連メトリックの値を示すグラフを選択できます。以下はグラフのサンプルです。

図4 グラフのサンプル



## ポリシーおよびメトリックのカスタマイズ

WebLogic SPI ポリシーはカスタマイズせずに使用することも、使用する環境に応じて変更することもできます。実行可能な変更とカスタマイズの一部を以下に示します。

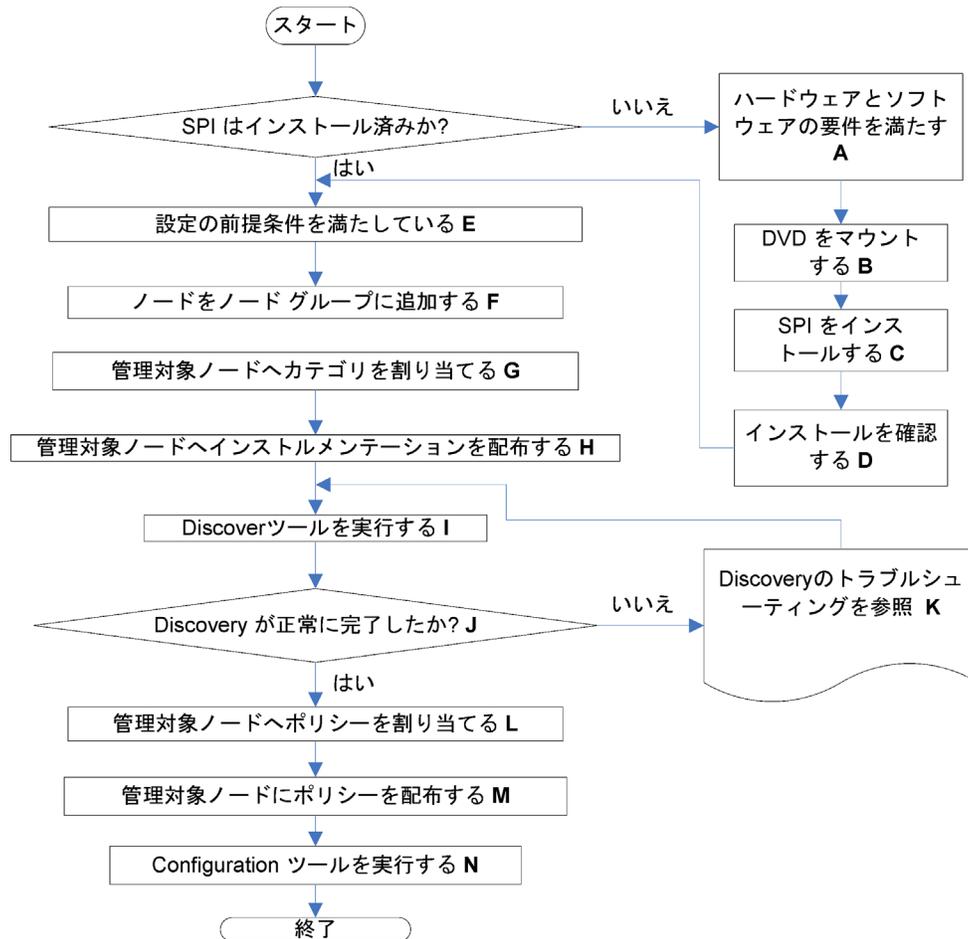
- デフォルト ポリシーの変更: ポリシー内で、以下のデフォルト設定を変更できます。
  - 収集間隔
  - しきい値
  - メッセージ テキスト
  - 期間

- 条件の重要度レベル
- 条件に割り当てられたアクション (自動またはオペレータによる)
- カスタム ポリシー グループの作成: デフォルト ポリシーを基本としてカスタム ポリシー グループを作成できます。詳細については、第 5 章「[WebLogic SPI ポリシーのカスタマイズ](#)」を参照してください。
- カスタム メトリックの作成: 独自のメトリックまたはユーザー定義メトリック (UDM) を定義し、WebLogic SPI の監視機能を拡張できます。UDM の詳細は、『*HP Operations Smart Plug-in User Defined Metrics User Guide*』を参照してください。

## 第2章 WebLogic SPI のインストールおよびアップグレード

この章では、さまざまな環境での WebLogic SPI のインストールについて説明します。WebLogic SPI のインストールについて、必要なすべての前提条件、指示、および手順を記述します。以下のフローチャートでは、WebLogic SPI をインストールおよび設定する手順の概要を示します。

図5 SPI をインストールおよび設定する手順のフローチャート



詳細については、以下のハイパーリンクをクリックしてください。

表1 フローチャートの凡例参照

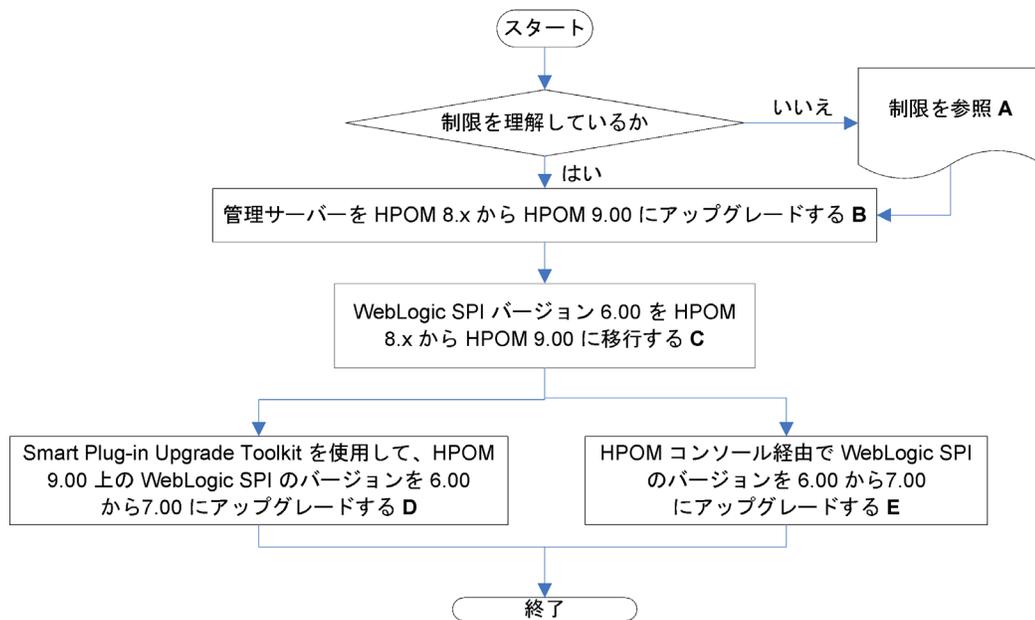
A	前提条件 (25 ページ)
B	HP-UX での DVD マウント (26 ページ) および Solaris での DVD マウント (26 ページ)
C	WebLogic SPI のインストール (26 ページ)
D	インストールの確認 (27 ページ)

表 1 フローチャートの凡例参照

<b>E</b>	前提条件 (33 ページ)
<b>F</b>	ノードを WebLogic ノード グループに追加する (38 ページ)
<b>G</b>	管理対象ノードへのカテゴリの割り当て (40 ページ)
<b>H</b>	インストールメンテーションポリシーの管理ノードへの配布 (41 ページ)
<b>I</b>	検出の実行 (42 ページ)
<b>J</b>	検出プロセスを確認する (44 ページ)
<b>K</b>	検出プロセスのトラブルシューティング (113 ページ)
<b>L</b>	ポリシーの管理ノードへの割り当て (45 ページ)
<b>M</b>	WebLogic SPI ポリシーを配布する (45 ページ)
<b>N</b>	設定の実行 (46 ページ)

以下のフローチャートでは、WebLogic SPI をアップグレードする手順の概要を示します。

図 6 SPI をアップグレードする手順のフローチャート



詳細については、以下のハイパーリンクをクリックしてください。

表 2 フローチャートの凡例参照

<b>A</b>	制限事項 (28 ページ)
<b>B</b>	HPOM 8.xx から HPOM 9.0x への管理サーバーのアップグレード (29 ページ)

表 2 フローチャートの凡例参照

<b>C</b>	HPOM 8.xx から HPOM 9.0x への WebLogic SPI 6.00 の移行 (29 ページ)
<b>D</b>	HP Operations Smart Plug-in Upgrade Toolkit を使用した WebLogic SPI のアップグレード (30 ページ)
<b>E</b>	HPOM コンソールによるスタンドアロン HPOM 9.0x サーバー上の WebLogic SPI のアップグレード (30 ページ)

# パッケージのインストール

## グラフ作成パッケージ

このパッケージには、SPI で提供されるデフォルトのグラフ作成ポリシーが含まれています。グラフは、SPI によって作成されたデータソースで収集されたメトリックから描画されます。グラフ作成パッケージの名前と場所を以下に示します。

- UNIX の場合: `/HPUX/HP_Operations_Smart_Plug-ins_HPUX.depot WLSSPI-GRAPHS`
- Windows の場合: `\WINDOWS\OV_PM\WEBLOGIC_SPI\WLSSPI-OVPM.msi`
- Solaris の場合: `/SOLARIS/HP_Operations_Smart_Plug-ins_SOLARIS.sparc HPOvSpiWlsG`

## レポート パッケージ

このパッケージには、SPI で提供されるデフォルトのレポート作成ポリシーが含まれています。これらのテンプレートは、静的であり、変更するには、Crystal Reports 10.0 以降をインストールする必要があります。Reporter は、SPI によって管理されているノードからのデータを HPOM サーバー経由で収集し、ローカルのデータベースに保存して、デフォルトの SPI レポート ポリシーに基づいて .html レポートを作成します。レポート作成パッケージの名前と場所を以下に示します。

`\WINDOWS\OV_REPORTER\WEBLOGIC_SPI\WLSSPI-Reporter.msi`

# インストール環境

## HPOM サーバーへの SPI コンポーネントの標準インストール

HPOM 9.0x サーバーに HP Performance Manager のフル バージョンをインストールできます。HP Operations Smart Plug-Ins DVD によってグラフ作成パッケージではなく SPI パッケージのみをインストールすることを選択できます。ただし、同じマシンに Performance Manager のフル バージョンがインストールされている場合は、対応するパッケージのインストールまたはアンインストールを HPOM 9.0x サーバーで行うことができます。

## HPOM クラスタ環境での標準インストール

HPOM クラスタ環境では、クラスタ内の各システム上に HPOM 9.0x サーバーをインストールしておく必要があります。クラスタ環境の各ノード上に SPI をインストールできます。

## スタンドアロンの HP Performance Manager

スタンドアロンの HP Reporter または HP Performance Manager がインストールされているシステムでは、HP Operations Smart Plug-Ins DVD の SPI の対応するパッケージだけが有効になり、使用することができます。たとえば、HP Performance Manager だけがインストールされているシステムには、WebLogic SPI のグラフ パッケージをインストールできます。

## 前提条件

SPI をインストールする前に、ハードウェアおよびソフトウェア要件を満たします。WebLogic SPI をインストールする前に、HPOM サーバーと検出パッケージをインストールします。WebLogic SPI のインストールを始める前に HPOM セッションを停止する必要はありません。

### ハードウェア要件

管理サーバーのハードウェア要件については、*HP Operations Manager for UNIX* のドキュメントを参照してください。管理対象ノードのハードウェア要件については、<http://support.openview.hp.com/selfsolve/document/KM323488> を参照してください。

### ソフトウェア要件

WebLogic SPI をインストールする前に、以下のソフトウェア要件を満たしていることを確認する必要があります。

管理サーバー上：

- HP Operations Manager for UNIX: 9.0x
- WebLogic Application Server バージョン: 9.x、10.x
- HP Performance Manager (HP-UX、Solaris、Windows): 8.20 (グラフを生成する場合に必要)
- HP Reporter: 3.80 (Web ベースのレポートを生成する場合に必要)
- HP Operations SPI Data Collector (DSI2DDF): 2.40
- HP SPI Self-Healing Services (SPI-SHS-OVO): 3.00
- JMX Component (JMXSPI): 7.00

DSI2DDF、SPI-SHS-OVO、および JMXSPI は、HP-UX 管理サーバーに初めて SPI をインストールするときに自動的にインストールされます。Solaris 管理サーバーに初めて SPI をインストールするときには、これらのコンポーネントを選択する必要があります。

管理対象ノードの場合：

- HP Performance Agent: 5.00 (データ記録に HP Performance Agent を使用する場合に必要)
- HP Operations Agent (バージョン 8.60) のインストールおよび設定が必要

HP Operations Manager、アプリケーション サーバー、HP Performance Agent、HP Performance Manager、および HP Reporter のサポート対象バージョンの詳細は、サポート マトリックス (SUMA) <http://support.openview.hp.com/selfsolve/document/KM323488> を参照してください。

# WebLogic SPI のインストール

## ローカル管理サーバー

WebLogi SPI をインストールする前に、HP Operations Manager (HPOM) 管理サーバーおよび検出パッケージをインストールする必要があります。WebLogic SPI のインストールを始める前に HPOM セッションを停止する必要はありません。検出パッケージと WebLogic SPI は「HP Operations Smart Plug-ins」DVD に収録されています。

## HP-UX での DVD マウント

- 1 ユーザー `root` でログオンします。
- 2 以下を入力して、ユーザー `root` の `umask` を設定します。  
`umask 027`
- 3 DVD をマウントするディレクトリを作成します。  
`mkdir /<mount_point>`  
例: `mkdir /dvdrom`
- 4 ディスクドライブに DVD を挿入し、以下を入力してユーザー `root` でマウントします。  
`mount /dev/<dvdrom_drive_name> /<mount_point>`  
たとえば、ローカル DVD の場合、以下のように入力します。  
`mount /dev/dsk/c0t2d0 /dvdrom`  
SAM を実行して、[Disks and File Systems] ウィンドウで DVD を特定パスにマウントすることもできます。

## Solaris での DVD マウント

DVD ドライブに DVD を挿入します。DVD が Sun Solaris システムで自動的にマウント (マウント解除) されます。

検出パッケージと WebLogic SPI は「HP Operations Smart Plug-ins」DVD に収録されています。

<mount\_point>/HPUX/ ディレクトリ下の `HP_Operations_Smart_Plug-ins_HPUX.depot` ファイルは、HP-UX 管理サーバー上で WebLogic SPI をインストールするために使用されます。<mount\_point>/SOLARIS/ ディレクトリ下の `HP_Operations_Smart_Plug-ins_SOLARIS.sparc` ファイルは、Solaris 管理サーバー上で WebLogic SPI をインストールするために使用されます。

## WebLogic SPI のインストール



以降の手順では、`swinstall` のコマンド行での使用法について説明します。HP-UX システムではグラフィカル ユーザー インタフェース (GUI) も使用できます。

HP-UX 11.31 管理サーバーの場合、以下のコマンドを入力します。

```
swinstall -s /dvdrom/HPUX/HP_Operations_Smart_Plug-ins_HPUX.depot WLSSPI  
または
```

```
swinstall -s /dvdrom/HPUX/HP_Operations_Smart_Plug-ins_HPUX.depot  
を実行して、SPI または依存コンポーネントを選択してインストールします。
```

Solaris 管理サーバーの場合、以下を入力します。

```
pkgadd -d /dvdrom/SOLARIS/HP_Operations_Smart_Plug-ins_SOLARIS.sparc
HPOvSpiWls
```



UDM を作成する場合は、SPIJMB ソフトウェアをインストールします。このソフトウェアの詳細は、『*HP Operations Smart Plug-in for User Defined Metrics User Guide*』を参照してください。

## HPOM クラスタ環境

最初に、クラスタ内の各システムに HPOM 管理サーバーをインストールする必要があります。管理サーバー クラスタ インストールが完了後、WebLogic SPI のインストールをセットアップする準備ができました。



開始する前に、インストール対象の WebLogic をインストールするための十分なディスクの空き容量 (500 MB) が各管理サーバーにあることを確認してください。インストール中にインストールをキャンセルすると、一部のコンポーネントだけがインストールされ、それらのインストール済みのコンポーネントを手動で削除する必要がある場合があります。

HPOM 管理サーバーのインストール後に、以下を続けて行います。

初回インストール (ノード A) とクラスタ内の残りすべてのインストールの場合: 標準インストール手順に従って、製品を選択するか、インストールする SPI コンポーネントの名前を選択します。ノード A 上へのインストールが完了後、次のノードに進みます。クラスタ内の各ノード上で SPI のインストールが完了するまで、別のノードに進みながら同一手順を繰り返します。

### クラスタ対応管理サーバーでの SPI インストール

セクション **ローカル管理サーバー (26 ページ)** ですべてのタスクを完了してから、クラスタ内の全管理サーバーへのインストールが済むまで、次の管理サーバーに進みます。



HPOM コンソールは、クラスタ内のすべてのノードでインストールが完了するまで、正常に機能しません。

## インストールの確認

コマンド `swlist` を入力して、管理サーバーでの WebLogic SPI のインストールを確認します。

## WebLogic SPI のアップグレード

SPI DVD 2008 から WebLogic SPI 6.00 がインストールされている HPOM 9.0x に SPI DVD 2009 から WebLogic SPI 7.00 をインストールすることを計画する場合は、次の制限事項に注意してください。

## 制限事項

以下は、HPOM for UNIX 9.0x での WebLogic SPI 6.00 サポートの制限事項です。

- WebLogic SPI をバージョン 7.00 にアップグレードする前に、HPOM 8.xx から HPOM 9.0x に移行プロセスを完了する必要があります。WebLogic SPI 7.00 をインストールした後は、HPOM 8.xx からの移行はサポートされません。
- WebLogic SPI バージョン 6.00 (HPOM 8.xx から移行済み) と WebLogic SPI バージョン 7.00 (SPI DVD 2009 から新規インストール済み) が HPOM 9.0x 上にあることは中間モードであり、すべての管理対象ノードを直ちに WebLogic SPI バージョン 7.00 に移行する必要があります。
- 複数の SPI を管理対象ノード上に配布した場合、ノードの監視は SPI DVD 2008 SPI または SPI DVD 2009 SPI のいずれかによって実行できます。SPI DVD 2008 と SPI DVD 2009 の SPI を組み合わせてノードを監視することは、サポートされません。
- WebLogic SPI 6.00 もある HPOM 9.0x システムに WebLogic SPI 7.00 をインストールした場合、以下の項目が当てはまります。
  - WebLogic SPI 7.00 を使用して新規に追加された管理対象ノードを設定する必要があります。
  - WebLogic SPI 6.00 によって監視される既存管理対象ノードまたは旧管理対象ノードでは、設定を行うことができません。

これは、WebLogic SPI 6.00 設定ツールが WebLogic SPI 7.00 ツールによって上書きされ、これらのツールは互換性がないことが理由です。

- HPOM 移行プロセスを開始する前に、WebLogic SPI バージョン 6.00 のパッチをインストールする必要があります。WebLogic SPI バージョン 7.00 がインストールされた後は、WebLogic SPI バージョン 6.00 に関するパッチまたはホット フィックスを HPOM サーバーにインストールすることはできません。
- WebLogic SPI 7.00 に関連付けられた GUI を起動するには、HPOM for UNIX 9.0x サーバー オペレータ GUI の起動元になるマシン上に X-windows クライアント ソフトウェアをインストールする必要があります。
- WebLogic SPI バージョン 6.00 用に今後リリースされるパッチをインストールすることは、移行後の HPOM for UNIX 9.0x ではサポートされません。ただし、パッチは HPOM for UNIX 8.xx サーバー上にインストールして HPOM for UNIX 9.0x 環境に移行することができます。
- Java Metric Builder (JMB) の HPOM for UNIX 9.0x サーバーへの移行はサポートされません。
- グラフ テンプレートは、警告の 自動アクション または オペレータ起動アクションから起動することができません。
- HPOM 8.xx から HPOM 9.0x に移行した後で、HPOM 9.0x からライセンス レポート処理ツールを実行する場合、以下のエラーがレポートされます。これは正しい動作です。このエラーは無視してかまいません。

```
ERROR: (oprel-407) License status for 'SPI Name' is:('SPI Name' のライセンス ステータス:) エラー
      Can't check license status because of missing ID mapping file.(ID マッピング ファ
      イルがないため、ライセンス ステータスを確認できません。)
```

```
      Please install the missing component and make sure that a sufficient number of
      licenses is installed.(不足しているコンポーネントをインストールして、インストールされたライセンス
      の数が十分であることを確認してください。)
```

```
      エラー: '(oprel-130) ID mapping file does not exist:(ID マッピング ファイルが
      存在しません) (oprel-129) Can't find ID mapping file '/opt/OV/misc/EL/registration/
      <SPIname>.xml' for plug-in '<SPIname>'。(プラグイン '<SPIname>' の ID マッピング ファ
      イル '/opt/OV/misc/EL/registration/<SPIname>.xml' for plug-in が見つかりません。)
```

ERROR: (oprel-407) License status for 'SPI Name remote' is:('SPI Name remote' のライセンス ステータス:) エラー

Can't check license status because of missing ID mapping file.(ID マッピング ファイルがないため、ライセンス ステータスを確認できません。)

Please install the missing component and make sure that a sufficient number of licenses is installed.(不足しているコンポーネントをインストールして、インストールされたライセンスの数が十分であることを確認してください。)

エラー: '(oprel-130) ID mapping file does not exist:(ID マッピング ファイルが存在しません) (oprel-129) Can't find ID mapping file '/opt/OV/misc/EL/registration/<SPIname>.xml' for plug-in '<SPIname>'。(プラグイン '<SPIname>' の ID マッピング ファイル '/opt/OV/misc/EL/registration/<SPIname>.xml' for plug-in が見つかりません。)'



複数の Smart Plug-ins for Web Application Server (例: WebLogic SPI、WebSphere SPI、Oracle AS SPI) をインストールした場合、Smart Plug-ins for Web Application Server でこれらの SPI 間の共通コンポーネントを共有しているために管理サーバー上で SPI が同時にアップグレードされることを確認します。

このバージョンの WebLogic SPI は、HPOM for UNIX 9.0x をサポートします。以前のバージョンの WebLogic SPI を WebLogic SPI 7.00 にアップグレードするには、以下のタスクを実行します。

- HPOM 8.xx から HPOM 9.0x への管理サーバーのアップグレード
- HPOM 8.xx から HPOM 9.0x への WebLogic SPI 6.00 の移行
- HPOM 9.0x での WebLogic SPI 6.00 の WebLogic SPI 7.00 へのアップグレード

## HPOM 8.xx から HPOM 9.0x への管理サーバーのアップグレード

UNIX 8.xx から HPOM for UNIX 9.0x への移行またはアップグレードについては、『*HP Operations Manager for UNIX 9.00 インストールガイド*』に記載された手順を読んで、それに従ってください。

## HPOM 8.xx から HPOM 9.0x への WebLogic SPI 6.00 の移行

インストールメンテーション ファイルとその他の SPI 固有データは、WebLogic SPI 6.00 がインストールされた HPOM for UNIX 8.xx サーバーの移行またはアップグレード時に HPOM for UNIX 9.0x に移行されます。ただし、一部の SPI 固有データは手動で移行する必要があります。

### システム間の HPOM の移行

新しいシステムに HPOM for UNIX 9.0x をインストールします。システム間で移行を実施するには、以下の手順を行います。

- 1 HPOM for UNIX 8.xx の HPOM for UNIX 9.0x への移行が完了後、ターゲットの HPOM for UNIX 9.0x サーバーに以下のディレクトリを作成します。

```
/var/opt/OV/wasspi/wls/  
/opt/OV/SPISvcDisc/conf/WLSSPI/  
/opt/OV/wasspi/wls/  
/var/opt/OV/share/conf/SPISvcDisc/WLSSPI/
```

- 2 ステップ 1 で作成したフォルダ内にあるファイルを HPOM for UNIX 8.xx から HPOM for UNIX 9.0x サーバーにそれぞれのフォルダでコピーします。

- 3 以下のファイルを HPOM for UNIX 8.xx から HPOM for UNIX 9.0x サーバーにそれぞれのフォルダでコピーします。

```
/opt/OV/SPISvcDisc/conf/wasspi_wls_DiscConfig.sh  
/opt/OV/newconfig/inventory/HP0vSpiWls.xml
```

## HPOM 9.0x での WebLogic SPI 6.00 の WebLogic SPI 7.00 へのアップグレード

HP Operations Smart Plug-in Upgrade Toolkit (SPI Upgrade Toolkit) を使用するか、HPOM for UNIX コンソールによって、WebLogic SPI をアップグレードできます。

### HP Operations Smart Plug-in Upgrade Toolkit を使用した WebLogic SPI のアップグレード

HP Operations Smart Plug-in Upgrade Toolkit (SPI Upgrade Toolkit) バージョン 2.0 を使用すると、ポリシーに対して行われたカスタマイズを保持しながら WebLogic SPI を上位バージョンにアップグレードできます。WebLogic SPI アップグレード処理中に、SPI Upgrade Toolkit によって、ポリシーのカスタマイズバージョンに対して行われた変更を保存できます。特定のポリシーに対して、SPI Upgrade Toolkit はベース、カスタマ、ファクトリという 3 バージョンを分析および比較し、ユーザーが要件に応じてポリシーのベース、カスタマ、ファクトリ バージョンの設定を選択できるようにします。SPI Upgrade Toolkit を使用して WebLogic SPI をアップグレードするには、『*HP Operations Smart Plug-in Upgrade Toolkit UNIX User Guide(HP Operations Smart Plug-in Upgrade Toolkit UNIX ユーザー ガイド)*』に定義された指示に従います。

### HPOM コンソールによるスタンドアロン HPOM 9.0x サーバー上の WebLogic SPI のアップグレード

スタンドアロン HPOM 9.0x サーバー上で WebLogic SPI をアップグレードするには、以下のタスクを完了します。

- 1 WebLogic SPI のポリシーおよびツール グループの名前を *SPI for WebLogic Server* から *SPI for WebLogic Server\_OLD* に変更します。名前とラベルの両方を変更します (例: *WLSSPI:TOOLS* から *WLSSPI:TOOLS\_OLD* に変更します)。
- 2 ノードに割り当てられたポリシーまたはポリシー グループを割り当て解除します。
- 3 ノード上の旧ポリシー、インストールメンテーション、およびデータソースを手動で削除します。既存のデータは削除されます。この理由で、既存のデータのバックアップを取得してください。



既存の WebLogic SPI データソースは、SPI をアップグレードするときに手動で削除する必要があります。たとえば、`ddfutl /var/opt/OV/wasspi/wls/datalog/graph.log -rm all` を実行します。新しいデータソースが作成され、既存のデータは失われます。CODA または HP Performance Agent のいずれを使用している場合でも、データソースが削除されます。以前のバージョンからアップグレードしても、設定エントリはすべて保存されます。

- 4 WebLogic SPI のインストール (26 ページ) の手順を実行することによって、WebLogic SPI をインストールします。
- 5 第 3 章「WebLogic SPI の設定」の手順を実行することによって、SPI を設定します。

#### 新しいレポート パッケージのインストール (オプション)

旧バージョンの WebLogic SPI レポート パッケージを HP Reporter を実行する Windows システムから削除し、新しい WebLogic SPI レポート パッケージをインストールします。新しいレポート パッケージをインストールするには、以下の手順を実行します。

- 1 HP Reporter を実行している Windows システムでは、[設定] → [コントロール パネル] → [プログラムの追加と削除] を選択します。
- 2 WebLogic SPI レポート パッケージを選択し、[削除] をクリックします。
- 3 WebLogic SPI レポート パッケージをインストールするには、HP Reporter との統合 (95 ページ) の手順に従います。

## 新しいグラフ作成パッケージのインストール (オプション)

- HP Performance Manager が Windows システムで実行されている場合は、旧バージョンの WebLogic SPI グラフ作成パッケージを削除し、新しい WebLogic SPI グラフ作成パッケージをインストールします。新しいグラフ作成パッケージをインストールするには、以下の手順を実行します。
  - a [設定] → [コントロール パネル] → [プログラムの追加と削除] を選択します。
  - b WebLogic SPI グラフ作成パッケージ (HP Operations SPI for WebLogic Server - Graphing Component Integration) を選択し、[削除] をクリックします。
  - c WebLogic SPI グラフ作成パッケージをインストールするには、[HP Performance Manager との統合 \(98 ページ\)](#) の手順に従います。
- HP Performance Manager が HP-UX システム (HPOM 管理サーバーではないシステム) で実行されている場合は、以下の手順を実行します。
  - ▶ HPOM 管理サーバーに HP Performance Manager がインストールされている場合、SPI ソフトウェアのインストール時にファイルが自動的に更新されます。
    - a `swlist | grep WLSSPI-GRAPHS` を実行し、グラフ作成パッケージがインストールされていることを確認します。
    - b グラフ作成パッケージがインストールされている場合、`swremove WLSSPI-GRAPHS` を実行します。
    - c WebLogic SPI グラフ作成パッケージをインストールするには、[HP Performance Manager との統合 \(98 ページ\)](#) の手順に従います。
- HP Performance Manager が Solaris システム (HPOM 管理サーバーではないシステム) で実行されている場合は、以下の手順を実行します。
  - ▶ HPOM 管理サーバーに HP Performance Manager がインストールされている場合、SPI ソフトウェアのインストール時にファイルが自動的に更新されます。
    - a `/usr/bin/pkginfo HPOvSpiWlsG` を実行し、グラフ作成パッケージがインストールされていることを確認します。
    - b グラフ作成パッケージがインストールされている場合、`/usr/sbin/pkgrm HPOvSpiWlsG` を実行します。
    - c WebLogic SPI グラフ作成パッケージをインストールするには、セクション [HP Performance Manager との統合 \(98 ページ\)](#) の手順に従います。



## 第3章 WebLogic SPI の設定

WebLogic SPI を設定するには、前提条件となるすべての設定、管理対象ノードおよび管理サーバーでの WebLogic SPI の設定、およびユーザー自身の環境に基づいたその他の設定を完了する必要があります。

### 前提条件

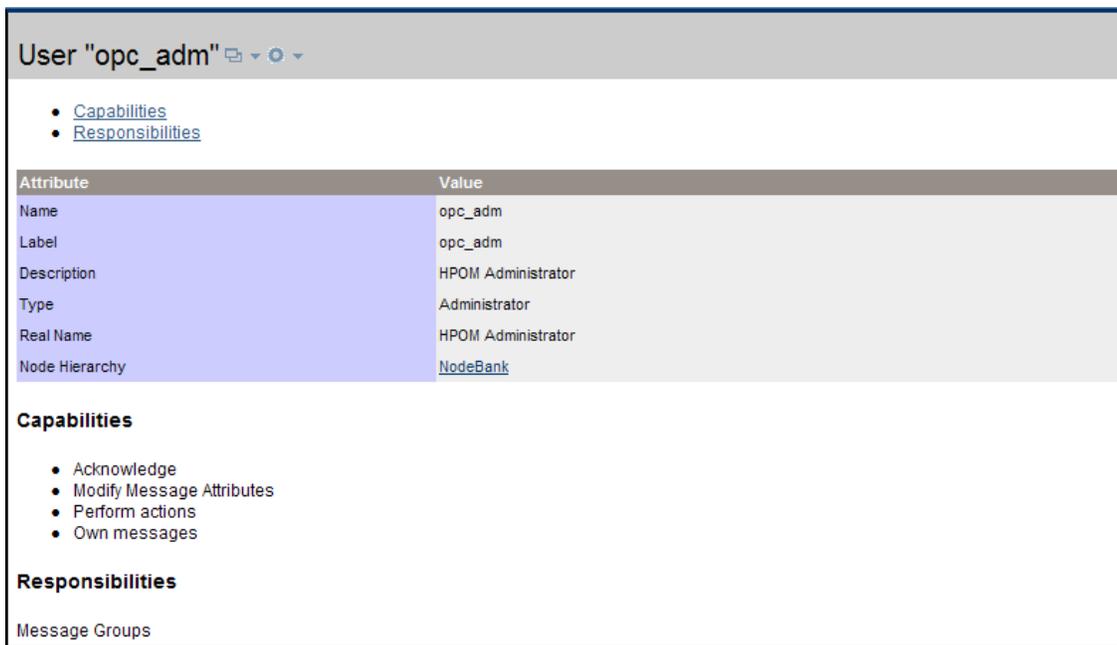
管理者として HPOM にログインします。管理ウィンドウが表示されます。WebLogic SPI を設定する前に、以下のタスクを実行します。

- オペレータ作業範囲をオペレータに割り当てる
- オペレータへのツールの割り当て
- アプリケーション サーバーのステータスを確認する
- WebLogic ログイン情報を収集する

### オペレータ作業範囲をオペレータに割り当てる

- 1 HPOM に(たとえば、管理者 **opc\_adm** として) ログインします。
- 2 **[All Users]** → **[opc\_adm]** を選択します。

[User "opc\_adm"]ウィンドウが表示されます。



User "opc\_adm"   

- [Capabilities](#)
- [Responsibilities](#)

Attribute	Value
Name	opc_adm
Label	opc_adm
Description	HPOM Administrator
Type	Administrator
Real Name	HPOM Administrator
Node Hierarchy	<a href="#">NodeBank</a>

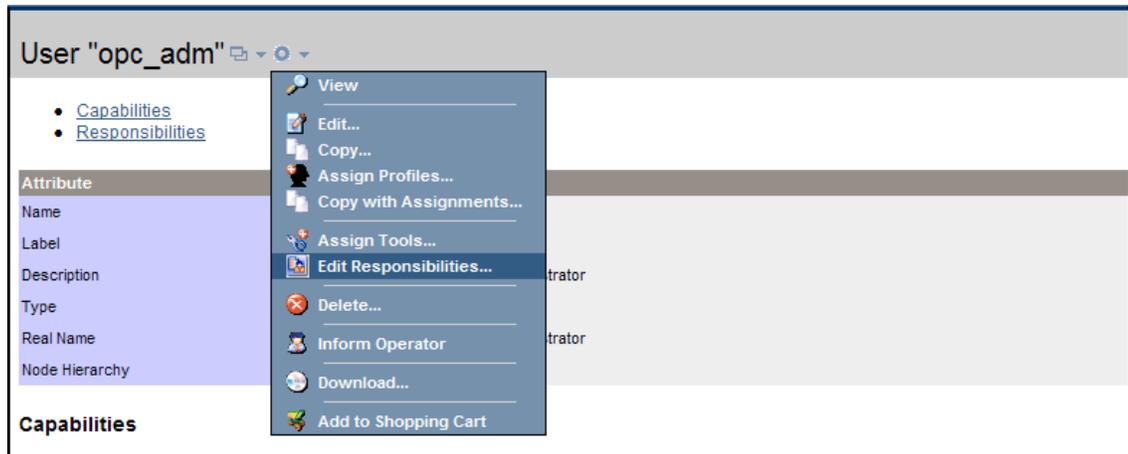
**Capabilities**

- Acknowledge
- Modify Message Attributes
- Perform actions
- Own messages

**Responsibilities**

Message Groups

- 3 ユーザーの作業範囲を変更するには、以下の図に示すドロップダウンリストから **[Edit Responsibilities...]** を選択します。



- 4 [WLSSPI] および [WebLogic] メッセージ グループについて、すべてのチェックボックスがオンになっていることを確認します。
- 5 [WLSSPI] ノードまたはメッセージ グループを他の適切なオペレータに割り当てます。
- 6 **[Close]** をクリックします。

## オペレータへのツールの割り当て

- 1 [Tool Bank] ウィンドウを開いて、[SPI for WebLogic Server] ツール グループを選択します。
- 2 **[Choose an Action]** ドロップダウン リストから **[Assign to User/Profile...]** を選択し、 をクリックして実行します。

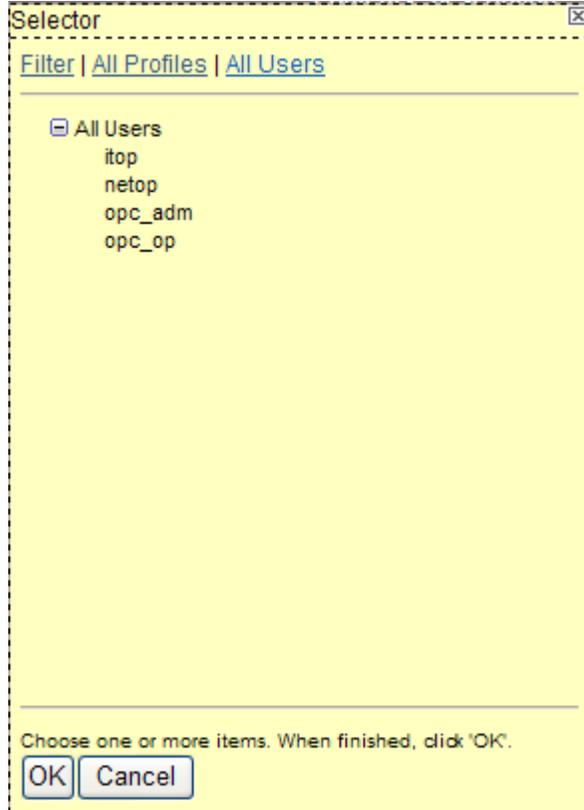
[Selector] ウィンドウが表示されます。

The screenshot shows the 'Tool Bank' interface. At the top, there is a 'Filter' dropdown and a status bar indicating 'Showing 21 - 36 of 36 (Show all)'. Below this is a grid of tools with columns for 'Type', 'Label', and 'Name'. The tool 'SPI for WebLogic Server' is selected, indicated by a green checkmark. A 'Selector' dialog box is overlaid on the right side of the tool list. The dialog has tabs for 'Filter', 'All Profiles', and 'All Users'. The 'All Users' tab is active. It contains a 'Locate' dropdown set to 'Users', and two search fields for 'Name' and 'Label', both with 'contains' as the operator. A 'Filter' button is below these fields. The main area of the dialog is yellow and contains the text 'Filtered User Profiles' and 'No matches. Please change filter.' At the bottom of the dialog, there is a prompt 'Choose one or more items. When finished, click 'OK'.' and 'OK' and 'Cancel' buttons. At the bottom of the Tool Bank window, there is an 'Assign to User/Profile...' dropdown and a right-pointing arrow button.

Type	Label	Name
<input type="checkbox"/>	SSP Tools	SSP Tools
<input type="checkbox"/>	UNIX Tools	UNIX Tools
<input type="checkbox"/>	Upgrade Policies	Upgrade Tools
<input type="checkbox"/>	SPI for WebSphere	WBSSPI:TOOLS
<input checked="" type="checkbox"/>	SPI for WebLogic Server	WLSSPI:TOOLS
<input type="checkbox"/>	Workspaces	Workspaces
<input type="checkbox"/>	X-OVw	X-OVw
<input type="checkbox"/>	Broadcast	Broadcast
<input type="checkbox"/>	Configure SIS2OM Adapter	Configure SIS2OM Adapter
<input type="checkbox"/>	Configure SiteScope Directory	Configure SiteScope Direct
<input type="checkbox"/>	HPOM Status	HPOM Status
<input type="checkbox"/>	Launch SiteScope Monitor Group Dashboard	Launch SiteScope Monitor Dashboard
<input type="checkbox"/>	Launch SiteScope Monitor Dashboard	SiS Launch SiteScope Mon Dashboard
<input type="checkbox"/>	Start SiteScope	Start SiteScope
<input type="checkbox"/>	Stop SiteScope	Stop SiteScope
<input type="checkbox"/>	Unconfigure SIS2OM Adapter	Unconfigure SIS2OM Adap

3 [All Users] をクリックします。

4 ツールを割り当てるオペレータを選択します。



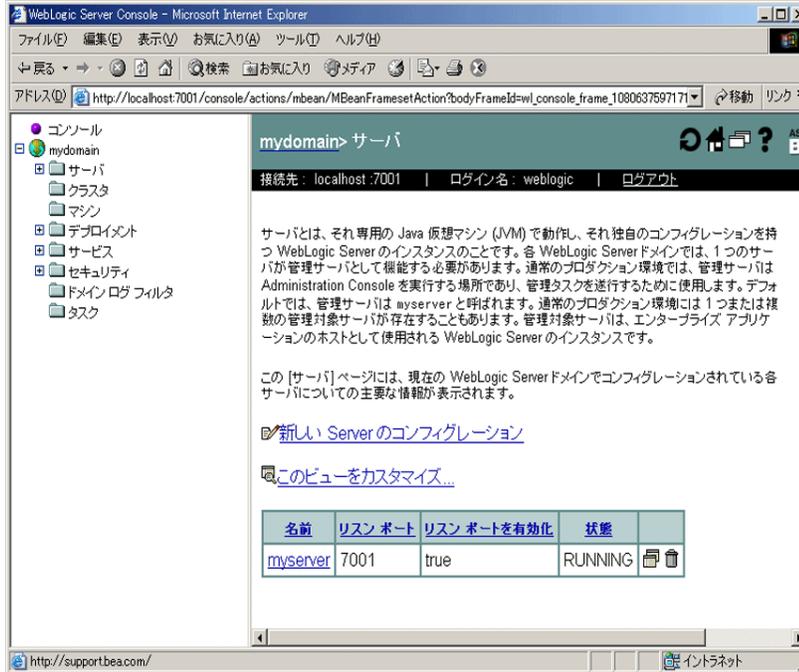
5 **[OK]** をクリックします。

WebLogic SPI ツールがオペレータに割り当てられます。

## アプリケーション サーバーのステータスを確認する

WebLogic Administration Console で WebLogic Server のステータスを確認し、アプリケーション サーバーが実行されていることを確かめます。

図7 WebLogic Admin Server コンソール



## WebLogic ログイン情報を収集する

各 WebLogic Administration Server の WebLogic ログインとパスワードを収集します。既存のログインとパスワードを使用しない場合は、新しいログインとパスワードを作成します。ログインとパスワードは、WebLogic SPI 検出プロセスが基本設定情報を収集するため、および WebLogic SPI データ コレクタがメトリックを収集するために使用します。



WebLogic Server と WebLogic Administration Server のログインとパスワードを双方同じにしておくと、WebLogic SPI の設定が簡単になります。

## WebLogic Server バージョン 9.x 以上

WebLogic Server バージョン 9.0 以上では、WebLogic Server のインストール時に設定した管理ユーザーとしてログオンすることも、WebLogic Administrators または Monitors グループに属するユーザーとしてログオンすることもできます。

Administrators または Monitors グループに所属するユーザーを設定するには、WebLogic Administration Console を使用する必要があります。ユーザーの作成方法およびユーザーをグループに割り当てる方法の詳細は、『WebLogic リソースのセキュリティ』の「ユーザとグループ」を参照してください

([http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wls/docs70/secwlrres/usr\\_s\\_grps.html#199302](http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wls/docs70/secwlrres/usr_s_grps.html#199302) または [http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wls/docs81/secwlrres/usr\\_s\\_grps.html#1213764](http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wls/docs81/secwlrres/usr_s_grps.html#1213764))。



Monitors グループに属するユーザーは、HPOM コンソールから Start WebLogic または Stop WebLogic ツールを使用して WebLogic Server を起動または停止することはできません。また、このユーザーは、UDM を作成しているならば指定の属性に値を割り当てる JMX アクションを実装する場合に、JMX 呼び出し 'set' を実行することができません。JMX アクションの詳細は、『HP Operations Smart Plug-in User Defined Metrics for UNIX User Guide』の Appendix E を参照してください。

# 管理サーバーからの WebLogic SPI の設定

管理サーバーから、以下のタスクを実行します。

- 1 ノードを **WebLogic** ノード グループに追加する
- 2 管理対象ノードへのカテゴリの割り当て
- 3 インストルメンテーションポリシーの管理ノードへの配布
- 4 検出の実行
- 5 追加のプロパティを設定する
- 6 検出プロセスを確認する
- 7 ポリシーの管理ノードへの割り当て
- 8 **WebLogic SPI** ポリシーを配布する
- 9 設定の実行
- 10 **WebLogic SPI** 設定を確認する

## ノードを WebLogic ノード グループに追加する

**WebLogic SPI** は、事前に設定されたポリシー グループを使用して、自動で **WebLogic** ノード グループを作成します。**WebLogic Server** を実行するノードをすべてこのノード グループに配置するには、以下の手順を実行します。

- 1 **[All Node Groups]** ウィンドウを開いて、**[WebLogic Node Group]** を選択します。
- 2 **[Choose an Action]** ドロップダウン リストから **[Assign Nodes...]** を選択し、 をクリックして実行します。

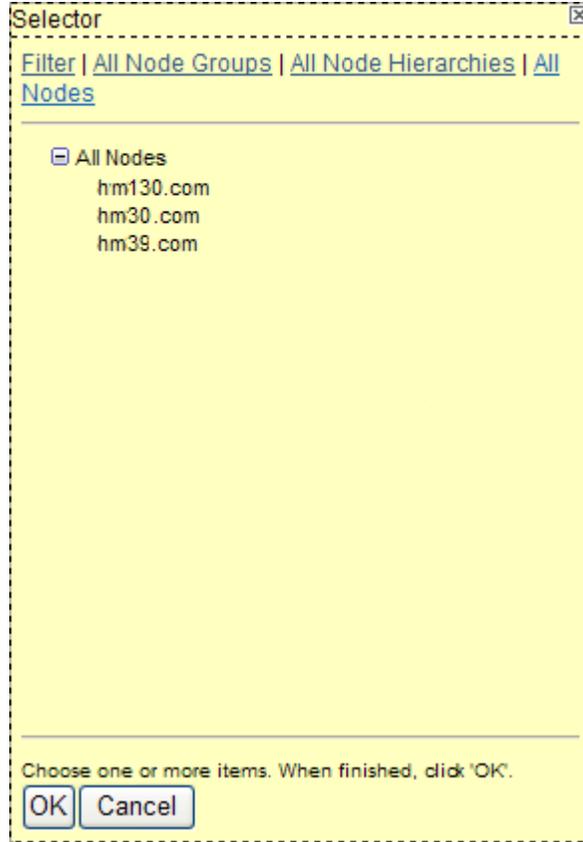
[Selector] ウィンドウが表示されます。

The screenshot shows the 'All Node Groups' window with a list of nodes. The 'Selector' dialog is open, showing search criteria for 'Nodes'. The dialog has a breadcrumb trail: Filter | All Node Groups | All Node Hierarchies | All Nodes. It includes fields for 'Locate' (set to 'Nodes'), 'Name' (set to 'contains'), and 'Label' (set to 'contains'). A 'Filter' button is present. Below the search fields, a message states: 'Filtered Nodes: No matches. Please change filter.' At the bottom of the dialog, there are 'OK' and 'Cancel' buttons, and a prompt: 'Choose one or more items. When finished, click 'OK'.'

Label	Name
<input type="checkbox"/>	hp_ux
<input type="checkbox"/>	OMU Administration midas_servers UI Servers
<input type="checkbox"/>	OMU Administration midas_webapps UI WebApps
<input type="checkbox"/>	net_devices
<input type="checkbox"/>	SiteScope
<input checked="" type="checkbox"/>	WebLogic
<input type="checkbox"/>	WebSphere High
<input type="checkbox"/>	WebSphere Low
<input type="checkbox"/>	WebSphere Medium
<input type="checkbox"/>	WSSPI-Discovery

- 3 [All Nodes] をクリックします。

- 4 WebLogic Server を実行しているノードを選択します。

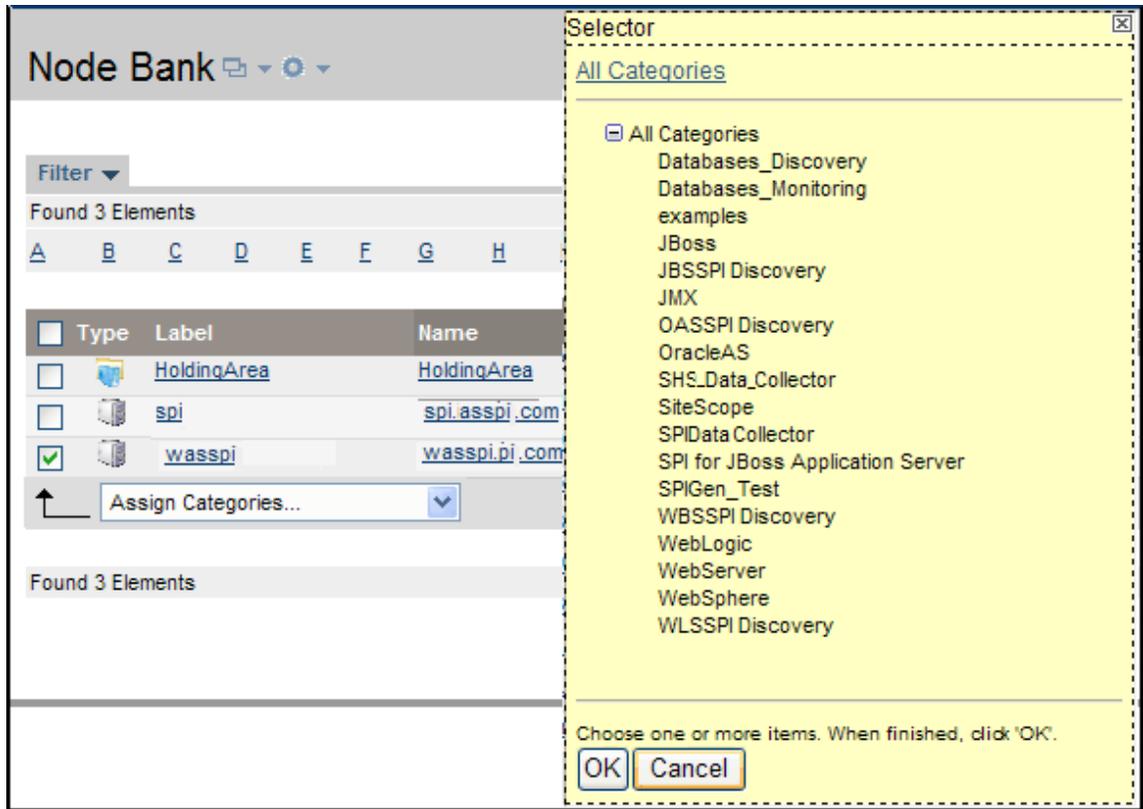


- 5 [OK] をクリックします。

## 管理対象ノードへのカテゴリの割り当て

- 1 [Node Bank] ウィンドウを開き、管理対象ノードを選択します。
- 2 [Choose an Action] ドロップダウン リストから [Assign Categories...] を選択し、 をクリックして実行します。

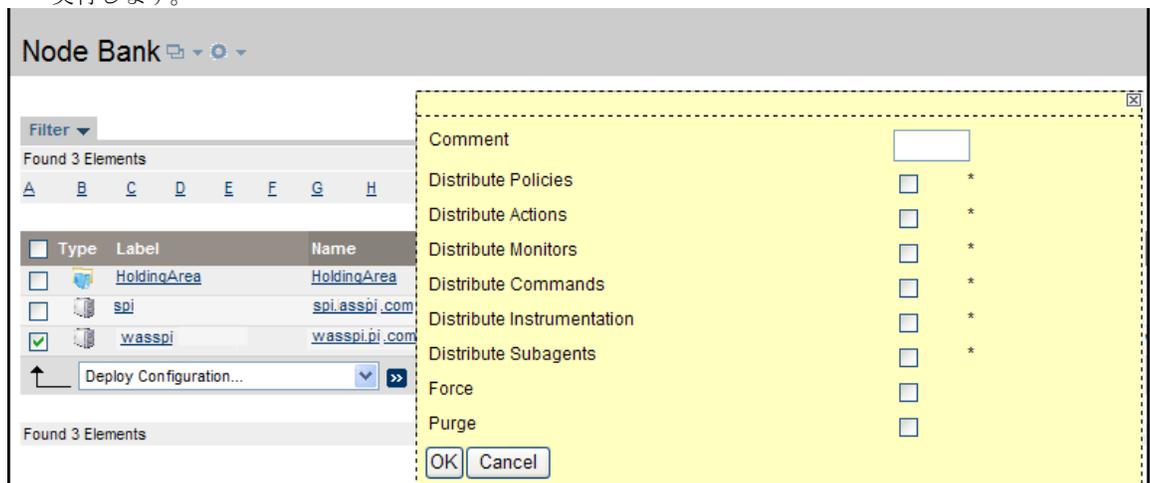
[Selector] ウィンドウが表示されます。



- 3 **[WebLogic]**、**[WLSSPI Discovery]**(オプション)、**[JMX]**、**[SHS\_Data\_Collector]**、および **[SPIDataCollector]** カテゴリを選択します。
- 4 **[OK]** をクリックします。

## インストレーションポリシーの管理ノードへの配布

- 1 **[Node Bank]** ウィンドウを開き、管理対象ノードを選択します。
- 2 **[Choose an Action]** ドロップダウン リストから **[Deploy Configuration...]** を選択し、 をクリックして実行します。



- 3 対応するチェック ボックスを選択することによって、**[Distribute Instrumentation]** を選択します。

- 4 **[OK]** をクリックします。

## 検出の実行

- 1 HPOM コンソールで、**[Integrations]** → **[HPOM for Unix Operational UI]** を選択します。
- 2 **Discover or Configure WLSSPI** ツールを起動する 1 つまたは複数のノードを選択します。WebLogic GUI を起動するには、**重要!** (68ページ) を参照してください。
- 3 ノードを右クリックして、**[Start]** → **[SPI for WebLogic]** → **[SPI Admin]** → **[Discover or Configure WLSSPI]** を選択します。

[Tool Selector] ウィンドウが表示されます。

- 4 **[Launch Discover Tool]** ラジオ ボタンを選択して、**[OK]** をクリックします。デフォルトで、**[Launch Configure Tool]** ラジオ ボタンが選択されます。

[Introduction] ウィンドウが表示されます。

- 5 **[Next]** をクリックします。

Configuration Editor が開きます。

- 6 LOGIN、PASSWORD、HOME または BEA\_HOME\_LIST、および JAVA\_HOME プロパティを既に設定している場合は、ステップ 7 に進んでください。

LOGIN、PASSWORD、HOME または BEA\_HOME\_LIST、および JAVA\_HOME プロパティを設定していない場合は、これらの必須プロパティを設定するために、次のステップを実行します。

- ▶ これらは必須プロパティであるため、LOGIN、PASSWORD、HOME または BEA\_HOME\_LIST、および JAVA\_HOME プロパティが設定されていることを確認します。旧バージョンの SPI では、LOGIN および PASSWORD のみが必要なプロパティでした。

- a **[Select a Property to Set]** ドロップダウン リストで、**[Login]** または **[Password]** を選択します。

[Set Access Info for Default Properties] ウィンドウが表示されます。



[WebLogic ログイン情報を収集する \(37 ページ\)](#) で収集したユーザー名とパスワードを入力します。LOGIN および PASSWORD プロパティにこの情報が設定されます。

このウィンドウで設定した LOGIN および PASSWORD のプロパティは、デフォルトの WebLogic Admin Server のログインとパスワードとして使用されます (これらはグローバル プロパティのレベルで設定されます)。つまり、NODE レベルやサーバー固有の LOGIN および PASSWORD のプロパティが設定されていない場合、WebLogic SPI はすべての WebLogic Administration Server にアクセスするために、この WebLogic のログインとパスワードを使用するということです。設定構造の詳細は、[構造 \(127ページ\)](#) を参照してください。

**WebLogic Admin Server ログインおよびパスワードがすべての HPOM 管理対象ノードの WebLogic サーバーで同じ場合、[Set Access Info for Default Properties] ウィンドウで LOGIN および PASSWORD プロパティを設定して、[OK] をクリックします。**

**WebLogic Admin Server のログインとパスワードが WebLogic の各インスタンスで異なる場合は、LOGIN と PASSWORD プロパティをノードまたはサーバー固有のレベルで設定し、WebLogic SPI 設定をカスタマイズする必要があります (設定構造の詳細は、[構造 \(127ページ\)](#) を参照してください)。** [OK] をクリックします。

- b **[Select a Property to Set...]** ドロップダウン リストから [HOME] または [BEA\_HOME\_LIST] を選択して、**[Set Property]** をクリックします。HOME または BEA\_HOME\_LIST の値を設定します。
  - c **[Select a Property to Set...]** ドロップダウン リストで、[JAVA\_HOME] を選択して、**[Set Property]** をクリックします。JAVA\_HOME の値を設定します。
- 7 **[Next]** をクリックしてあらゆる変更を保存し、エディタを終了します。
  - 8 **[Confirm Operation]** ウィンドウが表示されます。操作が実行されるノードを確認します。**[OK]** をクリックします。

 **[Cancel]** をクリックして、設定に変更を加えた場合には、それらの変更は管理サーバー上の設定に残ります。選択した管理対象ノードの設定への変更を行うには、それらのノードを選択し、**Discover or Configure WLSSPI** ツールを起動し、**Discover** ツールを起動し、設定エディタから **[Next]** をクリックしてから、**[OK]** をクリックします。

 次のタスクに進む前に、検出プロセスが完了するまで待ちます。検出プロセスが完了するまでに数分かかる場合があります。

## 追加のプロパティを設定する

LOGIN、PASSWORD、HOME または BEA\_HOME\_LIST、JAVA\_HOME プロパティは、検出プロセスに必要な基本のプロパティです。その他にも、使用環境に応じて情報を追加設定する必要があります。

設定プロパティ (138ページ) に記載された設定プロパティを設定できます。

### 追加のプロパティの設定

- 1 設定エディタで、プロパティを設定します。設定エディタを使用したプロパティの設定については、[設定の実行 \(46ページ\)](#) を参照してください。
- 2 **[Next]** をクリックして、変更を保存し、エディタを終了します。  
**[Confirm Operation]** ウィンドウが表示されます。
- 3 操作が実行されるノードを確認し、**[OK]** をクリックします。

 次のタスクに進む前に、検出プロセスが完了するまで待ちます。検出プロセスが完了するまでに数分かかる場合があります。

## 検出プロセスを確認する

環境内の管理対象ノードの数によっては、確認が完了するまで数分かかります。

- 1 各管理対象ノードのメッセージブラウザに以下のメッセージが表示されることを確認します。

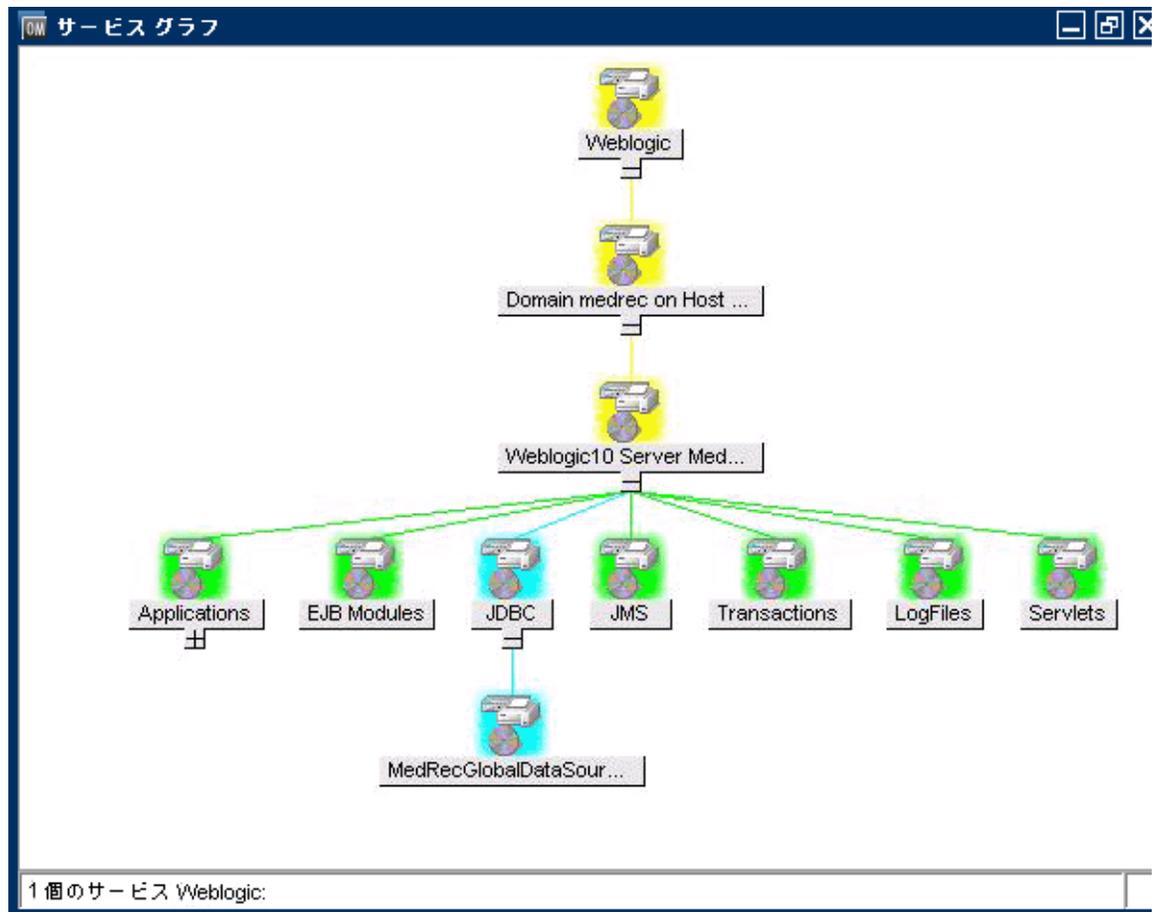
WASSPI-302: WLSSPI Discovery is Successful

環境内の管理対象ノードの数によっては、すべての管理対象ノードについてこれらのメッセージが表示されるのに数分を要します。

- 2 【ファイル】 → 【設定の再ロード】 を選択します。 サービス ツリーで、[Application] ノードを開き、WebLogic サービスを探します。

図8 は、検出プロセスが正常に終了した後に表示されるサービス マップのスナップ ショットです。サービス マップを使用して、問題のあるツールを特定できます(問題が存在する場合)。サービス マップ内の線は、重要度のレベルによって色分けされています。たとえば、赤い線は、アプリケーションに重大な問題が発生していることを示します。

図8 サービス マップ



サービス マップが Operational UI に表示されない場合、次のコマンドを入力して、オペレータにサービスを割り当てます。

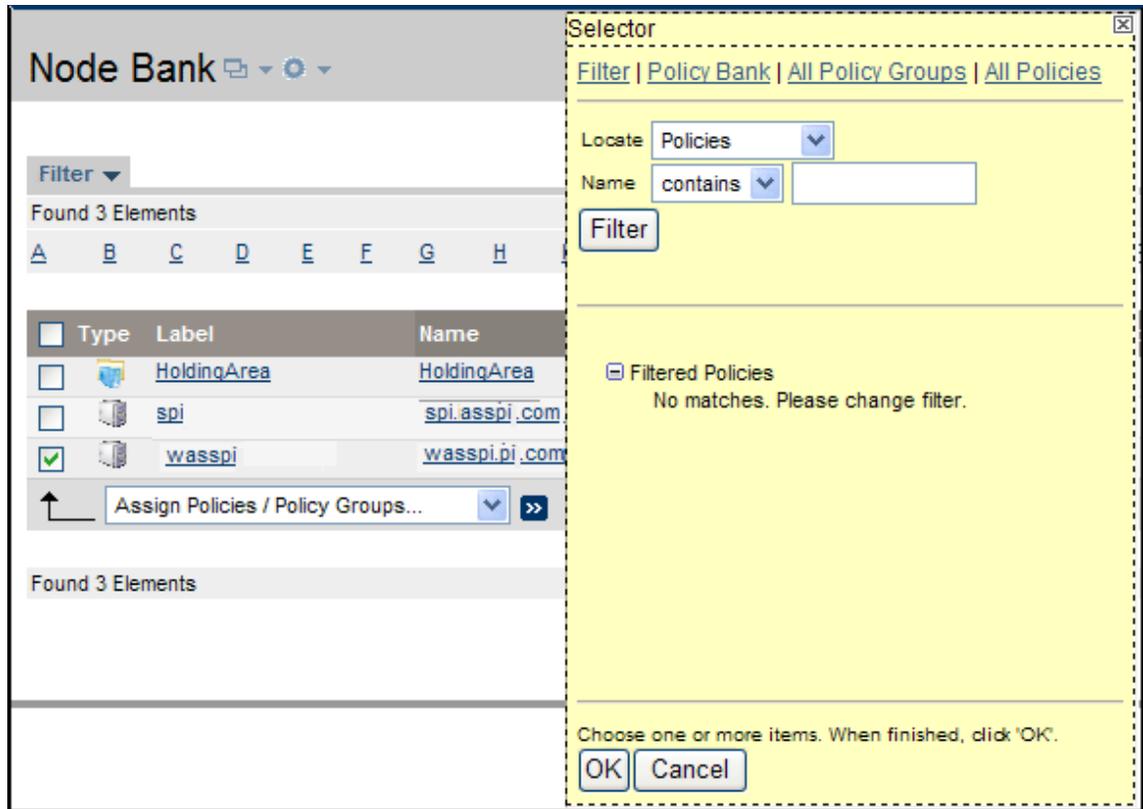
```
opcservice -assign <operator> <service>
```

例: **opcservice -assign opc\_adm <service>**

- 3 **Discover or Configure WLSSPI** ツールを起動して、検出プロセスにより設定されたプロパティを確認します。設定エディタの詳細は、[設定の実行 \(46 ページ\)](#) を参照してください。

## ポリシーの管理ノードへの割り当て

- 1 [Node Bank] ウィンドウを開き、管理対象ノードを選択します。
- 2 **[Choose an Action]** ドロップダウン リストから **[Assign Policies / Policy Groups...]** を選択し、 をクリックして実行します。  
[Selector] ウィンドウが表示されます。

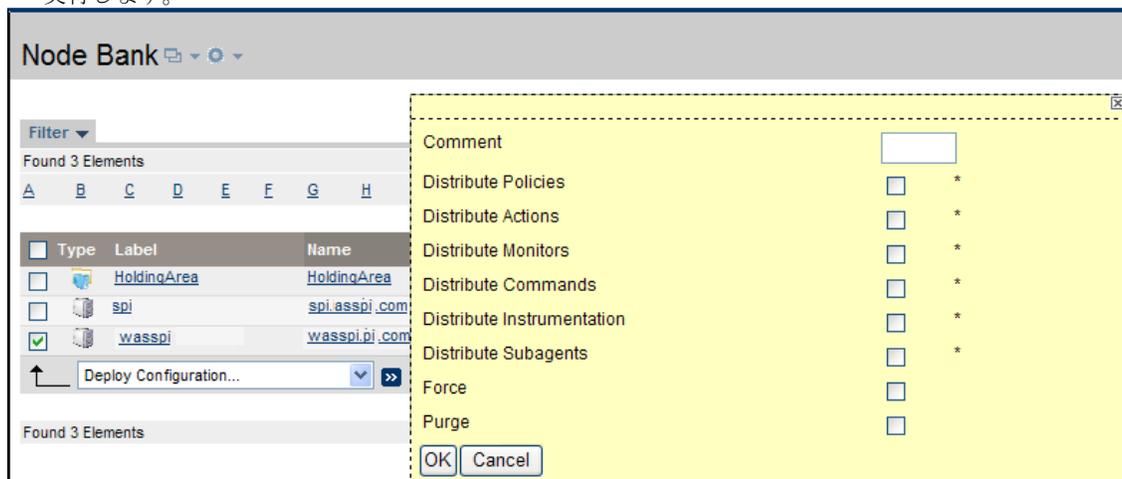


- 3 **[Policy Bank]** をクリックします。
- 4 **SPI for WebLogic Server** ポリシー グループから管理対象ノードに割り当てるポリシーを選択します。
- 5 **[OK]** をクリックします。

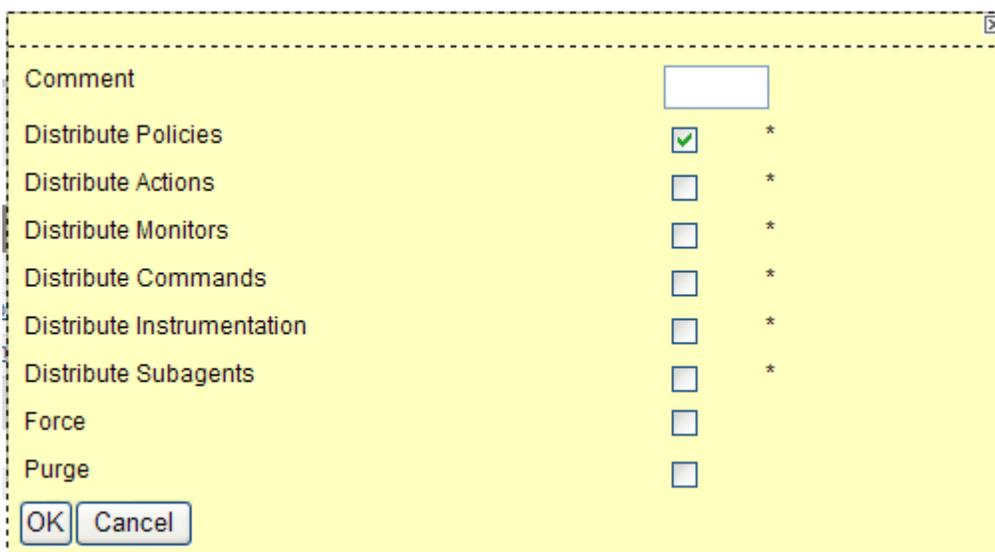
## WebLogic SPI ポリシーを配布する

- 1 [Node Bank] ウィンドウを開き、管理対象ノードを選択します。

- 2 **[Choose an Action]** ドロップダウン リストから **[Deploy Configuration...]** を選択し、 をクリックして実行します。



- 3 対応するチェック ボックスを選択することによって、**[Distribute Policies]** を選択します。



- 4 **[OK]** をクリックします。

ポリシーが配布されると、モニタは特定の収集間隔に従って実行を開始できます。



WebLogic SPI を Reporter に統合し、情報を整理して表示する WebLogic Server のレポートを生成する方法については、第 6 章「HP のレポート作成およびグラフ作成ソリューションと WebLogic SPI との統合」を参照してください。

## 設定の実行

- 1 HPOM コンソールで、**[Integrations]** → **[HPOM for Unix Operational UI]** を選択します。
- 2 Discover or Configure WLSSPI ツールを起動する 1 つまたは複数のノードを選択します。WebLogic GUI を起動するには、**重要!** (68 ページ) を参照してください。
- 3 ノードを右クリックして、**[スタート]** → **[SPI for WebLogic]** → **[SPI Admin]** → **[Discover or Configure WLSSPI]** を選択します。

[Tool Selector] ウィンドウが表示されます。

- 4 **[OK]** をクリックします。デフォルトで、**[Launch Configure Tool]** ラジオ ボタンが選択されます。

[Introduction] ウィンドウが表示されます。

- 5 **[Next]** をクリックします。

Configuration Editor が開きます。

▶ **LOGIN、PASSWORD、HOME** または **BEA\_HOME\_LIST**、および **JAVA\_HOME** プロパティが設定されていることを確認します。必要なプロパティを設定しないと、次のウィンドウに進むことはできません。プロパティを設定する方法の詳細は、**ステップ 6** を参照してください。

- 6 グローバルまたはサーバー固有レベルで設定プロパティをセットするには、**[Select a Property to Set...]** ドロップダウン リストからプロパティを選択して **[Set Property]** をクリックし、プロパティの値を設定します。設定エディタの使用の詳細は、**付録 B「設定」** を参照してください。

- 7 **[Save]** をクリックし、設定に加えた変更を保存します。変更を保存すると、変更を自動的に元に戻すことはできません。

- 8 **[Finish]** をクリックしてエディタを終了し、管理対象ノードで **WebLogic SPI** の設定を開始します。

▶ **[Cancel]** をクリックする場合、行った変更が選択した管理対象ノードの設定に保存されず、管理サーバーの設定に残ります。

設定構造の詳細は、**構造 (127 ページ)** を参照してください。

## WebLogic SPI 設定を確認する

Verify ツールを起動して、SPI の機能に必要なファイル (インストールメンテーション、設定、ライブラリ ファイルなど) が正しく配布されることを確認します。Verify ツールの詳細は、**Verify (61 ページ)** を参照してください。

- 1 HPOM コンソールで、**[Integrations]** → **[HPOM for Unix Operational UI]** を選択します。
- 2 Verify ツールを起動するノードを選択します。
- 3 このノードを右クリックします。
- 4 **[スタート]** → **[SPI for WebLogic Server]** → **[SPI Admin]** → **[Verify]** を選択します。

[Verify Output] ウィンドウが開きます。

## 追加設定

WebLogic Server の設定とアプリケーションの要件に基づき、他の設定プロパティの設定、および他のコンポーネントのインストールと設定を実行して、WebLogic SPI の設定を完了する必要があります。

### 条件付きのプロパティ

以下の条件付きプロパティを 1 つ以上設定することが必要な場合があります (これらのプロパティは、検出プロセスによる自動検出の対象外です)。これらのプロパティの詳細は、[設定プロパティ \(138 ページ\)](#) を参照してください。

### 条件付きプロパティの設定

条件付きプロパティを設定するには、[設定の実行 \(46 ページ\)](#) の手順に従います。

## UNIX 管理対象ノードでの非 root HTTPS エージェントの設定



OS に対応した Sudo ソフトウェア パッケージを UNIX 管理対象ノードにインストールする必要があります。Sudo は、<http://www.sudo.ws> で入手可能な無償ソフトウェアです。各 OS に対応したソフトウェア パッケージは、[ダウンロード ページ \(http://www.sudo.ws/sudo/download.html\)](http://www.sudo.ws/sudo/download.html) の下部から入手できます。Sudo のインストールの詳細は、リリース ノートを参照してください。

- 1 HTTPS エージェントを非 root ユーザーに切り替えます。詳細については、『*HP Operations HTTPS Agent Concepts and Configuration Guide for the HP-UX and Sun Solaris Management Server Operating Systems*』を参照してください。
- 2 管理対象ノードで、OV\_SUDO 変数を設定し、root または HP Operations エージェント ユーザーとしてログオンします。以下の手順を実行します。

- a 以下のコマンドで、すべての HP Operations エージェントを停止します。

```
opcagt -kill
```

- b 以下のコマンドで、OV\_SUDO 変数を設定します。

```
ovconfchg -ns ctrl.sudo -set OV_SUDO <sudo_program>
```

<sudo\_program> は、絶対パス名を含む sudo のインストール先 (/usr/local/bin/sudo など) です。

- c 以下のコマンドで、HP Operations エージェントを開始します。

```
opcagt -start
```

- d 以下のコマンドで、OV\_SUDO が設定されていることを確認します。

```
ovdeploy -cmd set | grep SUDO
```

以下のメッセージが表示されます。

```
OV_SUDO=<sudo_program>
```

- 3 管理対象ノードを設定します。非 root HTTPS エージェント環境で SPI を正常に実行するには、以下の手順を実行する必要があります。

- a HPOM 管理サーバーから、管理対象ノードにアクション、コマンド、およびモニタを配布します。
- b HPOM コンソールで、**[Integrations]** → **[HPOM for Unix Operational UI]** を選択します。
- c **Init Non-Root** ツールを起動するノードを選択します。
- d ノードを右クリックして、**[スタート]** → **[SPI for WebLogic Server]** → **[SPI Admin]** → **[Init Non-Root]** を選択します。

[Init Non-Root Output] ウィンドウが開きます。

- 4 **sudo** とともにインストールされる **visudo** エディタを使用して `/etc/sudoers` ファイルを編集します。

- a 管理対象ノードで、**root** としてログオンします。

- b `/<SPI_Config_DIR>/wasspi_sudoers` ファイルを開きます。

`<SPI_Config_DIR>` は、管理対象ノードでの **SPI** 設定ファイルの場所です。詳細については、[管理対象ノードのファイルの位置 \(125 ページ\)](#) を参照してください。

- c 別のウィンドウで、**visudo** コマンドを実行します (たとえば、`/usr/local/sbin/visudo` と入力します)。

- d `wasspi_sudoers` ファイルの以下の行をコピーし、`sudoers` ファイルに追加します。

```

Cmdnd_Alias WLSSPI_ADMN = /opt/OV/nonOV/perl/a/bin/perl -S wasspi_admin *
Cmdnd_Alias WLSSPI_COLL = /opt/OV/nonOV/perl/a/bin/perl -S wasspi_ca *
Cmdnd_Alias WLSSPI_DISC = /opt/OV/nonOV/perl/a/bin/perl wasspi_wls_discovery.pl
Cmdnd_Alias WLSSPI_LFEN = /opt/OV/nonOV/perl/a/bin/perl -S wasspi_wls_le *
Cmdnd_Alias WLSSPI_SHSC = /opt/OV/nonOV/perl/a/bin/perl -S shs_collector.pl *

```

```

Cmdnd_Alias WLSSPI_ADMNP = /opt/OV/nonOV/perl/a/bin/perl -S \
/var/opt/OV/bin/instrumentation/wasspi_admin *
Cmdnd_Alias WLSSPI_COLLP = /opt/OV/nonOV/perl/a/bin/perl -S \
/var/opt/OV/bin/instrumentation/wasspi_ca *
Cmdnd_Alias WLSSPI_DISCP = /opt/OV/nonOV/perl/a/bin/perl \
/var/opt/OV/bin/instrumentation/wasspi_wls_discovery.pl
Cmdnd_Alias WLSSPI_LFENP = /opt/OV/nonOV/perl/a/bin/perl -S \
/var/opt/OV/bin/instrumentation/wasspi_wls_le *
Cmdnd_Alias WLSSPI_SHSCP = /opt/OV/nonOV/perl/a/bin/perl -S \
/var/opt/OV/bin/instrumentation/shs_collector.pl *
<OV_Agent_username> <nodename> = NOPASSWD: WLSSPI_ADMN, WLSSPI_COLL, \
WLSSPI_DISC, WLSSPI_LFEN, WLSSPI_SHSC, WLSSPI_ADMNP, WLSSPI_COLLP, \
WLSSPI_DISCP, WLSSPI_LFENP, WLSSPI_SHSCP

```

`<OV_Agent_username>` は **HP Operations** エージェント ユーザー アカウントであり、`<nodename>` は管理対象ノードの名前です。

- e **wq** と入力して、ファイルを保存し **visudo** エディタを終了します。



エージェント ユーザーを切り替えるたびにステップ 3 と 4 を実行します。

# 高可用性環境の設定

高可用性とは、ビジネスに不可欠で、冗長リソースによりダウンタイムを防止している環境を表す一般用語です。高可用性を実現するためには、多くの場合、クラスタシステムが使用されます。

WebLogic SPI は、フェイルオーバーによって中断のない WLS 可用性を実現しているクラスタ環境に対応させるように設定することができます。WebLogic SPI による監視は、クラスタ環境に同期させると、故障したノードからアクティブなノードに切り替えて行うことができます。

## 前提条件

高可用性環境で WebLogic SPI を使用するための前提条件は、以下のとおりです。

- 管理サーバー : HP-UX
- ノード : HP-UX MCSG クラスタ、Veritas クラスタ (WebLogic Server バージョン 10.x のみ)
- HPOM 8.xx HTTPS エージェント バージョン (詳細は、エージェント クラスタのサポート マトリックスを参照)

## 高可用性環境での WebLogic SPI の設定

以下のタスクが実行します。

- WebLogic SPI 監視機能の設定ファイルを作成する
- クラスタ化されたアプリケーションの設定ファイルを作成する
- WebLogic SPI を設定する

### WebLogic SPI 監視機能の設定ファイルを作成する

WebLogic SPI は、クラスタ アプリケーション設定ファイルと連携する監視設定ファイル `<appl_name>.apm.xml` を使用します。



`<appl_name>` は `namespace_name` です。詳細については、『*HP Operations for UNIX HTTPS Agent Concepts and Configuration Guide*』を参照してください。

`<appl_name>.apm.xml` ファイルには、管理対象ノードの WebLogic SPI ポリシーがすべてリストされます。そのため、非アクティブなノードとアクティブ ノードに応じて、これらのポリシーを無効または有効にすることができます。

WLS 環境用のクラスタ アプリケーション設定ファイルを作成するには、以下の手順を実行します。

- 1 以下の構文を使用して、`<appl_name>.apm.xml` ファイルを作成します。

```
<?xml version="1.0"?>
<APMApplicationConfiguration>
  <Application>
    <Name> ... </Name>
    <Template> ... </Template>
    <StartCommand>wasspi_perl -S wasspi_clusterSvrApp -opt startMonitor
    $instancename</StartCommand>
    <StopCommand>wasspi_perl -S wasspi_clusterSvrApp -opt stopMonitor
    $instancename</StopCommand>
  </Application>
```

```
</APMApplcationConfiguration>
```

- 2 <Name></Name> タグの間に `namespace_name` を入力します。
- 3 ファイルを作成した後、`$OvDataDir/bin/instrumentation/conf` ディレクトリに保存します。

### サンプル `wlsspi.apm.xml` ファイル

```
<?xml version="1.0"?>
<APMApplcationConfiguration>
  <Application>
    <Name>wlsspi</Name>
    <Template>WLSSPI Java Discovery Error Log</Template>
    <Template>WLSSPI Java Collector Error Log</Template>
    <Template>WLSSPI Error Log</Template>
    <Template>WLSSPI-Logfile-Monitor</Template>
    <Template>WebLogic Log Template</Template>
    <Template>WLSSPI-05min</Template>
    <Template>WLSSPI-15min</Template>
    <Template>WLSSPI-1h</Template>
    <Template>WLSSPI-ConfigCheck</Template>
    <Template>WLSSPI-Performance</Template>
    <StartCommand>wasspi_perl -S wasspi_clusterSvrApp -opt startMonitor
$instanceName</StartCommand>
    <StopCommand>wasspi_perl -S wasspi_clusterSvrApp -opt stopMonitor
$instanceName</StopCommand>
  </Application>
</APMApplcationConfiguration>
```



<appl\_name>.apm.xml は、アプリケーションのネームスペースに依存します。インスタンスレベルには依存しません。したがって、パッケージ切り替え時に実行する起動および停止アクションには、第 1 パラメータに対応するインスタンス名を指定する必要があります。環境変数 `$instanceName` は、起動または停止タスクの実行時に `CIaW` により設定されます。

## クラスタ化されたアプリケーションの設定ファイルを作成する

クラスタ アプリケーション設定ファイル `apminfo.xml` と **WebLogic SPI** の `<appl_name>.apm.xml` ファイルを連携させて使用することにより、**WebLogic SPI** の監視対象インスタンスをクラスタのリソースグループに関連付けることができます。これにより、同一クラスタ内のノード間でリソースグループを移動させると、故障したノードでの監視が停止し、新しいノードで監視が開始されるようになります。

クラスタ アプリケーション設定ファイル `apminfo.xml` を作成するには、以下の手順を実行します。

- 1 テキスト エディタを使用して、ファイルを作成します。構文は以下のとおりです。

```
<?xml version="1.0"?>
<APMClusterConfiguration>
  <Application>
    <Name>namespace_name</Name>
    <Instance>
      <Name><Instance Name></Name>
      <Package><Package Name></Package>
    </Instance>
  </Application>
</APMClusterConfiguration>
```

- 2 <Name></Name> タグの間に `namespace_name` を入力します。
- 3 `apminfo.xml` ファイルを `$OvDataDir/conf/conf` ディレクトリに保存します。

#### サンプルの `apminfo.xml` ファイル

```
<?xml version="1.0"?>
<APMClusterConfiguration>
  <Application>
    <Name>wlsspi</Name>
    <Instance>
      <Name>MedRecServer</Name>
      <Package>ClusterService</Package>
    </Instance>
  </Application>
</APMClusterConfiguration>
```

### WebLogic SPI を設定する

- 1 プログラム ファイルをターゲット クラスタ ノードに配布します。
- 2 アクティブなクラスタ ノードをターゲットとして、**Discover or Configure WLSSPI** ツールを起動します。**Discovery** ツールの起動方法については、[検出の実行 \(42ページ\)](#) を参照してください。
- 3 アクティブなクラスタ ノードをターゲットとして、**Discover or Configure WLSSPI** ツールを起動します。設定ツールの起動方法については、[設定の実行 \(46ページ\)](#) を参照してください。
- 4 すべての必要なポリシーをアクティブなノードに配布します。ポリシーの配布については、[WebLogic SPI ポリシーを配布する \(45ページ\)](#) を参照してください。
- 5 ステップ 2、3、および 4 をパッシブ ノード上で繰り返し実行します。パッシブ ノードでこれらのステップを実行するには、パッシブ ノードにフェイルオーバーする必要があります (**WebLogic AS** を使用可能にするため)。

# 検出と設定のシナリオ

いくつかの一般的なシナリオについて、例を示します。

## 事例 1: 管理ポートがオンになっている (HTTPS モードで WebLogic Server を実行している)

WebLogic Server の管理ポートが有効である場合には、2 通りの検出シナリオが考えられます。

シナリオ 1: WebLogic 管理サーバーを t3s (HTTPS) で実行していて、この管理サーバーに関連する WebLogic Server を t3 (HTTP) で実行している。

### 検出

- 1 Discover or Configure WLSSPI を起動します。検出の実行 (42 ページ) を参照してください。
- 2 設定エディタで、ADMIN\_PORTS プロパティを設定します。ADMIN\_PORTS は アプリケーションサーバーがリッスンする SSL ポートです。  
 WebLogic Administration Server が仮想 IP で動作している場合 (非クラスタ環境) には、ADMIN\_PORTS プロパティの設定時に仮想 IP アドレスを指定する必要があります。ADMIN\_PORTS の値に、<ip address>:port を設定します。クラスタ化された環境での設定については、高可用性環境の設定 (50 ページ) を参照してください。
- 3 PROTOCOL プロパティに、t3s を設定します (t3s は PROTOCOL のデフォルト値)。PROTOCOL では、アプリケーションサーバーのポートで SSL または非 SSL のいずれを使用しているかを指定します。
- 4 必要に応じて、PASSPHRASE および KEYSTORE プロパティを設定します。[Next] をクリックし、選択したノードで検出を実行します。

KEYSTORE は、SSL 信頼キーストア ファイルへの完全修飾パスです。

PASSPHRASE は、WebLogic Administration Server の SSL 環境の KEYSTORE に設定したパスワードです。

これらのプロパティ設定の詳細は、設定プロパティ (138 ページ) を参照してください。

 プロパティ KEYSTORE、PASSPHRASE、および PROTOCOL は、任意のレベル (グローバル、グループ、ノード、またはサーバー) で設定できます。SSL を使用する場合には PROTOCOL が必要です。KEYSTORE および PASSPHRASE の設定は、SSL 環境でキーストアおよびパスフレーズを使用する場合にのみ必要です。

### 設定

検出が正常に完了後、以下の手順を実行します。

- 1 Discover or Configure WLSSPI ツールを起動します (このツールを起動する方法については、設定の実行 (46 ページ) を参照してください)。

- 2 設定エディタで、**PROTOCOL** プロパティの値に、**WebLogic Server** で使用する **t3** を設定します。  
 **WebLogic Server** 用に **PROTOCOL** プロパティの値を **t3** に変更しない場合、**PROTOCOL** には **WebLogic Administration Server** 用のデフォルト値 (**t3s**) が設定されます。これらの設定プロパティの優先順位については、[設定プロパティ \(138ページ\)](#) を参照してください。
- 3 アクティブな **Security Realm** の下の **BEA** に、**MONITOR USER** を作成します。
- 4 **SERVER\_LOGIN** および **SERVER\_PASSWORD** プロパティの値に、**Monitor** ユーザーの資格証明と同等の値を設定します。
- 5 **WebLogic Server** の各インスタンスについて、ステップ 1~4 を繰り返します。

シナリオ 2: **WebLogic 管理サーバーおよびこの管理サーバーに関連する WebLogic Server を t3s (HTTPS) で実行している。**

- 1 **Discover or Configure WLSSPI** を実行し、プロパティをシナリオ 1 と同じように設定します。
- 2 検出が正常に完了後、以下の手順を実行します。
  - a **Discover or Configure WLSSPI** ツールを起動します (このツールを起動する方法については、[設定の実行 \(46ページ\)](#) を参照してください)。
  - b **PROTOCOL** プロパティに、デフォルト値 **t3s** を設定します。
  - c アクティブな **Security Realm** の下の **BEA** に、**MONITOR USER** を作成します。
  - d **SERVER\_LOGIN** および **SERVER\_PASSWORD** プロパティの値に、**Monitor** ユーザーの資格証明と同じような値を設定します。
  - e **WebLogic Server** の各インスタンスについて、a~d の手順を繰り返します。

## 事例 2: 管理ポートがオンになっていない (WebLogic Application Server を仮想 IP で実行している)

**WebLogic Server** が仮想 IP で動作し、管理ポートをオンにしていない場合には、以下の手順で検出を実行します。

- 1 **Discover or Configure WLSSPI** を起動します。[検出の実行 \(42ページ\)](#) を参照してください。
- 2 設定エディタで、**NODE\_NAMES** および **ADDRESS** プロパティを設定します。
- 3 **[Next]** をクリックします。  
[Confirm Operation] ウィンドウが表示されます。
- 4 **[OK]** をクリックし、選択した管理対象ノードで検出を実行します。



クラスタ環境での設定の詳細は、[高可用性環境の設定 \(50ページ\)](#) を参照してください。

## CODA との統合

WebLogi SPI は HP Performance Agent を使用していることを検出できます。HP Performance Agent を使用する場合、WebLogic SPI インストールで自動的に HP Performance Agent を使用します。

OVO 7.x 以降に添付されている HP Operations のサブエージェント CODA を使用する場合は、管理対象ノードを設定する必要があります。この設定は、HP Performance Agent をサポートしていません。

CODA を使用するには、空のファイル `nocoda.opt` を設定し、管理対象ノードに保存します。

- 1 管理対象ノード上の以下のディレクトリに `nocoda.opt` ファイルを作成します。

オペレーティング システム	ファイルの場所
HP-UX、Linux、Solaris	<code>/var/opt/OV/conf/dsi2ddf/</code>
Windows	<code>\usr\ov\conf\dsi2ddf\</code>

ディレクトリ `dsi2ddf` が存在しない場合は、作成します。

- 2 空のファイルを保存します。



## 第4章 ツールの使用

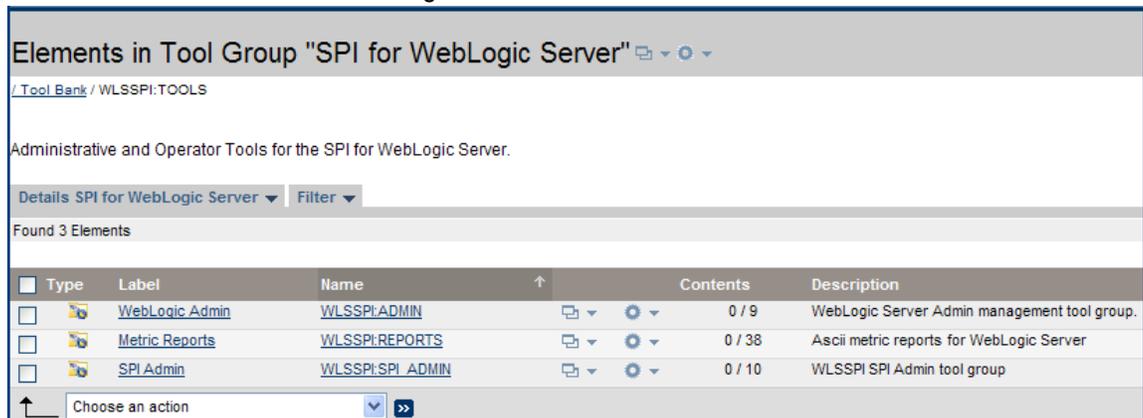
WebLogic SPI には、WebLogic Server を使用したシステムの監視および管理に役立つ中央管理ツールが用意されています。WebLogic SPI ツールを使用すると、特定の管理対象ノード上の選択済みサーバー インスタンスに対する管理サーバーの接続を設定できます。WebLogic SPI ツールには、設定、トラブルシューティング、レポート生成ユーティリティがあります。

### 概要

[Tool Bank] ウィンドウで、WebLogic SPI ツールは以下の WebLogic SPI ツール グループで構成されます。

- WebLogic Admin (WLSSPI:ADMIN)
- Metric Reports (WLSSPI:REPORTS)
- SPI Admin (WLSSPI:SPI\_ADMIN)
- JMX Metric Builder: このツール グループは、SPIJMB ソフトウェアをインストールしている場合にのみ利用できます。

図9 ツール グループ "SPI for WebLogic Server" の要素

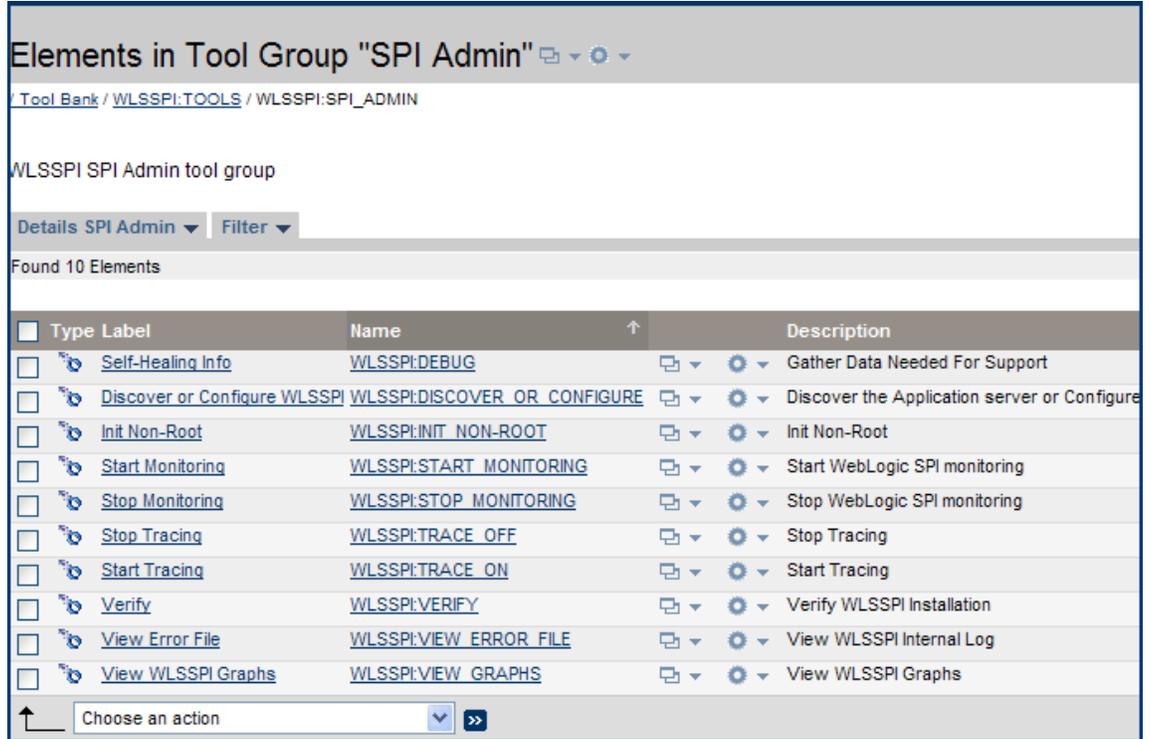


### SPI Admin ツールグループ

WLSSPI SPI Admin ツール グループには以下のツールがあります。これらのツールには、“root” ユーザー権限が必要になるため、このグループを HPOM 管理者に割り当てることをお勧めします。

SPI Admin ツールでは、WebLogic SPI の設定、制御、およびトラブルシューティングを実行できます。root ユーザー権限で WLSSPI Admin (WLSSPI:SPI\_ADMIN) ツールを実行する必要があります。[Tool Bank] ウィンドウで SPI Admin ツールにアクセスするには、[WLSSPI:TOOLS] → [WLSSPI:SPI\_ADMIN] をクリックします。

図 10 SPI Admin ツール



SPI Admin ツール グループには、以下のツールがあります。

- Discover or Configure WLSSPI:** 設定エディタを起動して、WebLogic SPI 設定を検出または管理するために必要になる基本設定プロパティを設定します。
- Init Non-Root:** UNIX 管理対象ノードで非 root HTTPS エージェントを簡単に設定できます。UNIX 管理対象ノードでの非 root HTTPS エージェントの設定に必要な手順については、[UNIX 管理対象ノードでの非 root HTTPS エージェントの設定 \(48 ページ\)](#) を参照してください。
- Self-Healing Info:** HP のサポート担当者に送信するデータを収集できます。
- Start Monitoring:** 管理対象ノード上の 1 つまたはすべてのアプリケーション サーバーのメトリック収集を開始します。監視機能が開始されているか、停止されているかを判定するには、**Verify** ツールを起動します。デフォルトでは、監視機能は有効になっています。
- Stop Monitoring:** 管理対象ノード上の 1 つまたはすべてのアプリケーション サーバーのメトリック収集を停止します。
- Start Tracing:** SPI によって実行される各アクティビティの情報のログ記録を開始します。このツールは、HP のサポート担当者に指示された場合のみ起動するようにしてください。
- Stop Tracing:** SPI によって実行される各アクティビティの情報のファイルへのログ記録を停止します。このツールは、HP のサポート担当者に指示された場合のみ起動するようにしてください。
- Verify:** WebLogic SPI の機能に必要なファイル（インストルメンテーション、設定、ライブラリなど）がサーバーまたは管理対象ノードに正しくインストールされることを確認します。
- View Error File:** WebLogic SPI エラー ログ ファイルの内容を表示できます。
- View Graphs:** Web ブラウザで HP Performance Manager で作成された WebLogic SPI グラフを表示できます。

## Discover or Configure WLSSPI

WLSSPI ツールを使用して検出または設定のいずれかを実行できます。

Discover or Configure WLSSPI ツールは、設定エディタを起動します。ツール Discover or Configure WLSSPI を使用すると、HPOM コンソールから管理対象ノード上で WebLogic Server のインスタンスを特定するか ([Launch Discover Tool] オプションを選択するとき)、設定エディタで設定プロパティを表示、編集、またはセットすることによって WebLogic SPI 設定を管理することができます ([Launch Configure Tool] オプションを選択するとき)。

### 機能

Configure ツールは、以下の機能を備えています。

- HPOM 管理サーバーと管理対象ノード上の設定を更新します。
- 選択された管理対象ノード上の WebLogic SPI が要求するディレクトリとファイルを作成します。
- レポート作成とグラフ作成のためのデータ ソースを設定します。
- 監視のために WebLogic Server ログ ファイルと WebLogic SPI エラー ログ ファイルを設定します。

Discover ツールは、HPOM 管理サーバーと選択された管理対象ノード上の設定を更新します。

すべての管理対象ノード上で実行されているすべての WebLogic Server の設定情報は、管理サーバー上で維持されます。さらに、すべての管理対象ノードは、そのノード上で実行されている WebLogic Server についての情報を維持します。

設定エディタを使用して変更する場合、変更は HPOM 管理サーバーに保存されます。ただし、ノードを選択して Discover or Configure WLSSPI ツールを起動した場合、選択したノードに影響を与える変更はそのノード自体に保存されます。

管理対象ノードでの変更をすべて保存するには、Discover or Configure WLSSPI ツールを起動する前にノードを選択する必要があります。ノードを選択しない場合、変更はデフォルトで管理サーバーに保存されます。

## Init Non-Root

Init Non-Root ツールは、UNIX 管理対象ノードで非 root HTTPS エージェントを簡単に設定できます。UNIX 管理対象ノードでの非 root HTTPS エージェントの設定については、[UNIX 管理対象ノードでの非 root HTTPS エージェントの設定 \(48 ページ\)](#) を参照してください。

### 機能

Init Non-Root は、選択された管理対象ノードで以下の機能を実行します。

- 1 `wasspi_perl -S wasspi_initnonroot -prod wls -force` コマンドを実行して、SPI パスを正しく設定します。
- 2 `wasspi_perl_su` ファイルを生成します。

## Self-Healing Info

Self-Healing Info ツールは、HP のサポート担当者に送信するデータを収集できます。

## 必要な設定

再現可能な問題に関するデータを収集する場合、**Self-Healing Info** ツールを実行する前に、以下の手順を実行してください。

- 1 **Start Tracing** ツール 詳細は、[Start/Stop Tracing \(60ページ\)](#) を参照してください。
- 2 問題を再現します。

## 機能

**Self-Healing Info** ツールは、次の機能を実行します。

- データは以下のファイルに保存されます。
    - UNIX 管理対象ノード上にある場合: /tmp/wasspi\_wls\_support.tar
    - Windows 管理対象ノード上にある場合: %TEMP% ディレクトリの wasspi\_wls\_support.zip
-  このファイルは、**Windows** 管理対象ノードの設定によっては非表示の場合があります。ファイルが表示されない場合は、**Windows** エクスプローラを開き、**[ツール]** メニューから **[フォルダオプション]** を選択します。**[表示]** タブをクリックします。**[ファイルとフォルダの表示]** の下で、**[すべてのファイルとフォルダを表示する]** を選択します。
- **Verify** ツールを起動して、データを実行し、保存します (詳細については、[Verify \(61ページ\)](#) を参照してください)。

## Start/Stop Monitoring

このツールを起動して、**WebLogic SPI** によるアプリケーション サーバーからのメトリックの収集を開始または停止できます。

**WebLogic SPI** はメトリックを収集し、パフォーマンスや可用性に関するデータを取得します。また、メトリックはレポート (自動または手動による生成) とグラフを作成するためにも使用されます。これらのレポートとグラフは、サーバーの用途、可用性、およびパフォーマンスの傾向を分析するために使用されます。

通常は、既知の理由でノードが実行していない場合、管理対象ノードではモニターを停止します。たとえば、ノードが保守のために停止します。監視を停止することで、不要な警告通知が生成されないようにします。

監視機能が開始されているか、停止されているかを判定するには、**Verify** ツールを起動します。デフォルトでは、監視機能は有効になっています。

## 機能

**Start Monitoring** ツールを使用して、管理対象ノード上の 1 つまたはすべてのアプリケーション サーバーのメトリック収集を開始します。

**Stop Monitoring** ツールを使用して、管理対象ノード上の 1 つまたはすべてのアプリケーション サーバーのメトリック収集を停止します。

## Start/Stop Tracing

このツールを起動すると、管理対象ノードの **SPI** によって実行される各アクティビティについて情報のログ記録を開始および停止することができます。このツールは、**HP** のサポート担当者に指示された場合のみ起動するようにしてください。これらのファイルには、**HP** のサポート担当者が利用するデータが含まれています。

## 機能

**Start Tracing** は、**SPI** によって実行される各アクティビティの情報のファイルへのログ記録を保存します。

Stop Tracing は、SPI によって実行される各アクティビティの情報のファイルへのログ記録を停止します。

## Verify

このツールを起動すると、SPI の機能に必要なファイル (インストールメンテーション、設定、ライブラリなど) が配布されることを確認できます。

### 機能

Verify ツールは、WebLogic SPI の機能に必要なファイル (インストールメンテーション、設定、ライブラリファイルなど) が管理対象ノードおよび管理サーバーに配布されているかどうかを確認します。

## View Error File

View Error File ツールを起動し、WebLogic SPI エラー ログ ファイルの内容を表示できます。

### 機能

View Error File ツールは、WebLogic SPI エラー ログ ファイル `<OV_AGT_DIR>/log/wlsspi/wasspi_perl.log` の内容を表示します。ここで、`<OV_AGT_DIR>` は、通常、以下のようになります。

- `/var/opt/OV` (UNIX 管理対象ノード)
- `\Program Files\HP\HP BTO Software\` (Windows 対象ノード)

## View Graphs

View Graphs ツールを起動し、Web ブラウザで HP Performance Manager グラフを表示できます。

### 必要な設定

View Graphs ツールを実行する前に、以下を実行します。

- 1 HP Performance Manager をインストールします。
- 2 HP Operations Manager for UNIX で Mozilla または Netscape ブラウザを設定します。

### 機能

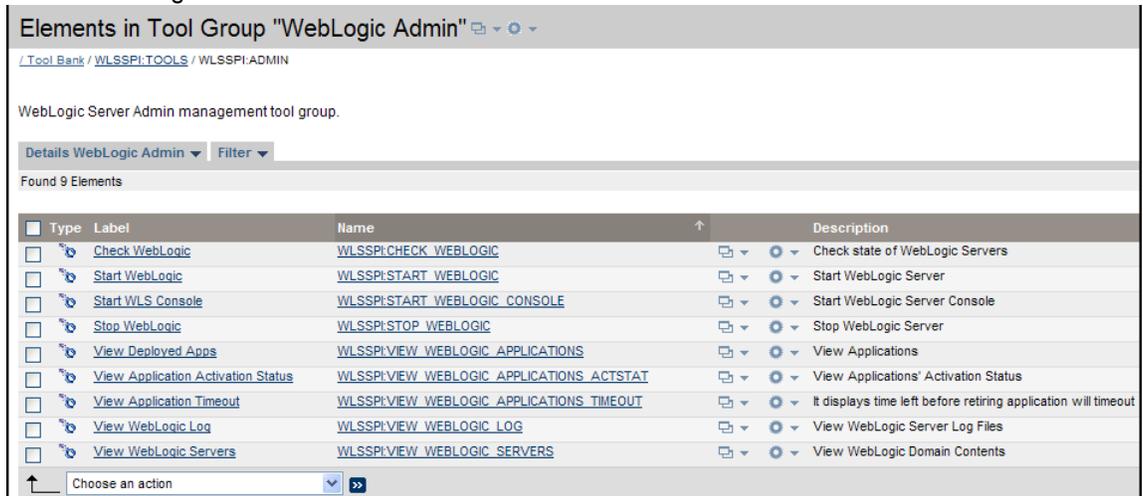
View Graphs ツールは、Web ブラウザを起動し、WebLogic SPI メトリック データから生成された HP Performance Manager グラフを表示します。

## WebLogic Admin ツールグループ

WebLogic Admin (WLSSPI:ADMIN) ツールグループのツールを使用して、WebLogic Server の機能を管理できます。

[Tool Bank] ウィンドウで WebLogic Admin ツール グループ内のツールにアクセスするには、[WLSSPI:TOOLS] → [WLSSPI:ADMIN] をクリックします。

図 11 WebLogic Admin ツール



WebLogic Admin ツール グループには以下のツールがあります。

- **Check WebLogic:** WebLogic Server の対話的ステータス確認を行います。
- **Start WLS Console:** Web ブラウザで WebLogic Server Admin コンソールを起動します (セットアップが必要)。
- **Start WebLogic:** HPOM コンソール (設定が必要) から WebLogic Server を起動できます。
- **Stop WebLogic:** HPOM コンソール (設定が必要) から WebLogic Server を停止できます。
- **View Deployed Apps:** WebLogic Server インスタンスに配布されたすべてのツールの名前およびバージョンを表示できます。
- **View WebLogic Log:** WebLogic Server log ファイルを表示できます。
- **View WebLogic Servers:** WebLogic ドメイン設定、クラスタ情報、および物理マシンを表示できます。
- **View Application Activation Status:** WebLogic Server で実行しているアプリケーションの稼働状況を表示できます。
- **View Application Timeout:** WebLogic Server 上で実行中のアプリケーションがタイムアウトで終了するまでの残り時間を参照できます。

## Check WebLogic

このツールを使用すると、選択した管理対象ノード上で動作している各 WebLogic Server のステータスを確認できます。

## 機能

Check WebLogic は、選択されたノード上の各 WLS サーバーについて以下の情報を表示します。

情報	説明
Server Name	WebLogic Server で定義されるサーバー名
State	WebLogic Server のステータス
Listen Address	着信接続をリッスンするために使用される名前と IP アドレス
Health State	WebLogic Server の現在のステータスを数値で表したもの
Health State String	WebLogic Server 自身によるヘルス モニタリングの結果

WebLogic SPI が WebLogic Server に関するメトリックを収集するよう設定されていない場合、以下のメッセージが表示されます。

```
Collection is temporarily OFF for <server_name>
```

## Start WLS Console

Start WLS Console を使用して、HPOM コンソールから WebLogic Administration Server コンソールを起動できます。選択された管理対象ノード上にある 1 つ以上のアプリケーション サーバー インスタンスに対するコンソールを起動することができます。

### 必要な設定

- このツールを正常に実行できるようにするには、ADMIN\_HOST および ADMIN\_PORT 設定プロパティを設定する必要があります。
- HP Operations Manager for UNIX で Mozilla または Netscape ブラウザを設定します。

## 機能

Start WLS Console は、選択されたノード上の 1 つ以上のアプリケーション サーバー インスタンスに対する WebLogic Administration Server コンソールを Web ブラウザで起動します。

## Start/Stop WebLogic

HPOM コンソールから Start WebLogic または Stop WebLogic ツールを使用して WebLogic Server を起動または停止できます。選択された管理対象ノード上の 1 つ以上のアプリケーション サーバー インスタンスを開始および停止することができます。その際、各 WebLogic Administration Server にログインする必要はありません。

### 必要な設定

START\_CMD、STOP\_CMD、および USER 設定プロパティは、このツールを起動する前に設定する必要があります。

## 機能

Start WebLogic ツールは、選択された管理対象ノード上の 1 つ以上のアプリケーション サーバー インスタンスを起動します。

Stop WebLogic ツールは、選択された管理対象ノード上の 1 つ以上のアプリケーション サーバー インスタンスを停止します。

## View Deployed Apps

View Deployed Apps ツールを使用して、WebLogic Server インスタンスで実行中のアプリケーションを表示できます。その際、WebLogic Server を実行中のシステムにログインする必要はありません。

### 機能

View Deployed Apps は、選択された管理対象ノードの各 WebLogic Server インスタンスに関して、以下の情報を表示します（「WLS のバージョン」列は、各情報に該当する WebLogic Server のバージョンを示します）。

情報	WLS のバージョン	説明
Application	9.x、10.x	アプリケーション インスタンス
Name	9.x、10.x	アプリケーションの名前
Version	9.x、10.x	アプリケーション バージョン (アプリケーションがバージョン管理されない場合は、“null” が表示されます)。
Module Type	9.x、10.x	CAR、EAR、EJB、RAR、WAR などの J2EE モジュール タイプ

## View WebLogic Log

View WebLogic Log ツールを使用して、WebLogic Server ログ ファイルを表示できます。その際、WebLogic Server を実行中のシステムにログインする必要はありません。

### 機能

View WebLogic Log ツールは、以下の情報を表示します。

- パラメータを入力しないで View WebLogic Log を起動すると、選択した管理対象ノードについての利用可能なログ ファイルの番号リストが表示されます。
- 無効なパラメータ (数値以外の値または利用可能なログ ファイルのリストに対応していない数) を入力して View WebLogic Log を起動すると、選択した管理対象ノードについての利用可能なログ ファイルの番号リストが表示されます。
- 有効なパラメータを入力して View WebLogic Log を起動すると、選択した管理対象ノードに対応するログ ファイルの内容が表示されます。

パラメータ フィールドには、1 つの数値しか入力できません。選択したすべての管理対象ノードについて、この番号で示されているログ ファイルを表示できます。このツールを起動するたびに、管理対象ノードごとに 1 つのログ ファイルを選択して表示します。

## View WebLogic Servers

View WebLogic Servers ツールを使用して、WebLogic ドメイン設定、クラスタ情報、および物理コンピュータを表示できます。その際、WebLogic Server を実行中のシステムにログインする必要はありません。

## 機能

View WebLogic Servers は、選択された管理対象ノードの各 WebLogic Server インスタンスに関して、以下の情報を表示します（「WLS のバージョン」列は、各情報に該当する WebLogic Server のバージョンを示します）。

情報	WLS のバージョン	説明
Domain	9.x、10.x	WebLogic ドメイン インスタンス
Admin Server	9.x、10.x	WebLogic 管理サーバー インスタンスの名前
Version	9.x、10.x	設定のリリース ID
Server	9.x、10.x	WebLogic Server インスタンス
Name	9.x、10.x	サーバー インスタンスの名前。Administration Console に表示され、サーバーの識別に使用される名前です
Listen Port	9.x、10.x	WebLogic Server インスタンスが通常の（非 SSL）着信接続をリッスンするために使用するデフォルトの TCP ポート
Listen Address	9.x、10.x	WebLogic Server インスタンスが着信接続をリッスンするために使用する IP アドレスまたは DNS 名
Cluster	9.x、10.x	クラスタ インスタンス
Name	9.x、10.x	ユーザー指定のクラスタ インスタンス名
Type	9.x、10.x	クラスタ内のサーバーがクラスタ間レプリケーションの最適化のために使用するデータ送信方法。man (metro area network)、wan、none などです
Address	9.x、10.x	クライアントがクラスタに接続するときに使用するアドレス。EJB ハンドルとエンティティ EJB フェールオーバー アドレスの生成に使用されます
Multicast Address	9.x、10.x	クラスタのメンバが相互通信するために使用するアドレス
Machine	9.x、10.x	コンピュータ インスタンス
Name	9.x、10.x	ユーザー指定のコンピュータ インスタンス名

## View Application Activation Status

View Application Activation Status ツールを使用して、WebLogic Server インスタンスに配布された実行中のアプリケーションの稼動状況を表示できます。その際、WebLogic Server を実行中のシステムにログインする必要はありません。

### 必要な設定

View Application Activation Status ツールを起動する前に、URL\_PATH 設定プロパティの値を次のように設定します（設定プロパティの詳細は、[設定プロパティ \(138ページ\)](#)を参照してください）。

```
/jndi/weblogic.management.mbeanservers.domainruntime
```

## 機能

View Application Activation Status ツールは、選択されたノード上の各 WebLogic Server インスタンスについて、以下の情報を表示します。説明の列に記載されている情報は、WebLogic Server のバージョンにより異なります。

表 3

情報	WLS のバージョン	説明
AppRuntimeStateRuntime	9.x、10.x	AppRuntimeStateRuntime MBean
Application ID	9.x、10.x	アプリケーション ID (SPI により生成) に使用されるシリアルナンバー
Application-ID	9.x、10.x	アプリケーションの名前
Is Active?	9.x、10.x	このフィールドに「true」が表示されている場合、アプリケーションはアクティブです。このフィールドに「false」が表示されている場合、アプリケーションはアクティブではありません。

## View Application Timeout

View Application Timeout ツールを使用すると、WebLogic Server インスタンスに配布された実行中のアプリケーションがタイムアウトで終了するまでの残り時間を参照できます。WebLogic Server が実行されているシステムにログインせずに、残り時間を表示できます。

### 必要な設定

View Application Timeout ツールを起動する前に、URL\_PATH 設定プロパティの値を次のように設定します (設定プロパティの詳細は、[設定プロパティ \(138 ページ\)](#) を参照してください)。

```
/jndi/weblogic.management.mbeanservers.domainruntime
```

## 機能

View Application Timeout ツールを使用して、選択された管理対象ノード上の各 WebLogic Server インスタンスについて、以下の情報を取得できます。説明の列に記載されている情報は、WebLogic Server のバージョンにより異なります。

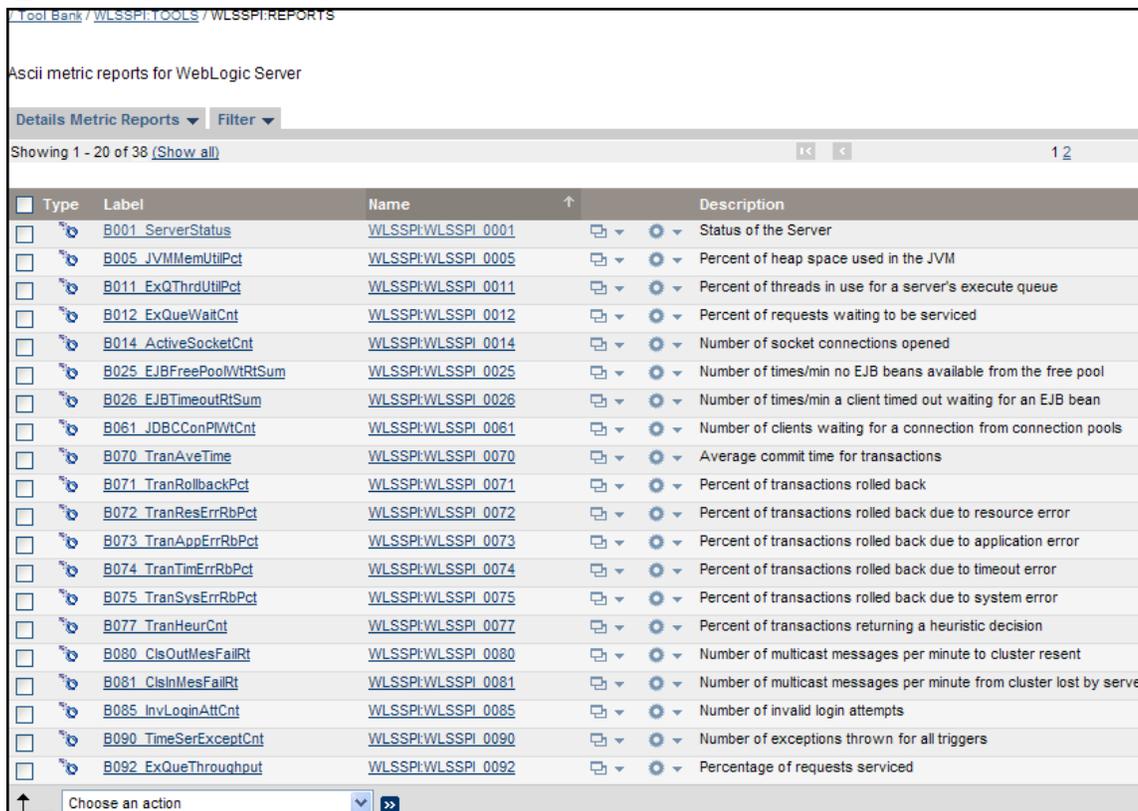
表 4

情報	WLS のバージョン	説明
AppRuntimeStateRuntime	9.x、10.x	AppRuntimeStateRuntime MBean
Application ID	9.x、10.x	アプリケーション ID (SPI により生成) に使用されるシリアルナンバー
Application-ID	9.x、10.x	アプリケーションの名前
Time Left to Retire	9.x、10.x	アプリケーションが終了するまでの時間 (単一のバージョンのアプリケーションのみがサーバー上に存在し、アプリケーションのタイムアウトが設定されていない場合は、この情報の値が「-1」になります)。

## メトリック レポート

メトリック レポート グループには、**WebLogic Server** の状態に関する情報を示すレポートが含まれています。[Tool Bank] ウィンドウでメトリック レポートにアクセスするには、[WLSSPI:TOOLS] → [WLSSPI:REPORTS] をクリックします。

図 12 メトリック レポート



The screenshot shows the 'Tool Bank / WLSSPI:TOOLS / WLSSPI:REPORTS' interface. It displays 'Ascii metric reports for WebLogic Server' with a table of 38 reports. The table has columns for Type, Label, Name, and Description. The reports listed include ServerStatus, JVMMemUtilPct, ExQThrdUtilPct, ExQueWaitCnt, ActiveSocketCnt, EJBFreePoolWrtSum, EJBTimeoutRtSum, JDBCConPwrtCnt, TranAveTime, TranRollbackPct, TranResErrRbPct, TranAppErrRbPct, TranTimErrRbPct, TranSysErrRbPct, TranHeurCnt, CIsOutMesFailRt, CIsInMesFailRt, InvLoginAttCnt, TimeSerExceptCnt, and ExQueThroughput.

Type	Label	Name	Description
<input type="checkbox"/>	B001_ServerStatus	WLSSPI:WLSSPI_0001	Status of the Server
<input type="checkbox"/>	B005_JVMMemUtilPct	WLSSPI:WLSSPI_0005	Percent of heap space used in the JVM
<input type="checkbox"/>	B011_ExQThrdUtilPct	WLSSPI:WLSSPI_0011	Percent of threads in use for a server's execute queue
<input type="checkbox"/>	B012_ExQueWaitCnt	WLSSPI:WLSSPI_0012	Percent of requests waiting to be serviced
<input type="checkbox"/>	B014_ActiveSocketCnt	WLSSPI:WLSSPI_0014	Number of socket connections opened
<input type="checkbox"/>	B025_EJBFreePoolWrtSum	WLSSPI:WLSSPI_0025	Number of times/min no EJB beans available from the free pool
<input type="checkbox"/>	B026_EJBTimeoutRtSum	WLSSPI:WLSSPI_0026	Number of times/min a client timed out waiting for an EJB bean
<input type="checkbox"/>	B061_JDBCConPwrtCnt	WLSSPI:WLSSPI_0061	Number of clients waiting for a connection from connection pools
<input type="checkbox"/>	B070_TranAveTime	WLSSPI:WLSSPI_0070	Average commit time for transactions
<input type="checkbox"/>	B071_TranRollbackPct	WLSSPI:WLSSPI_0071	Percent of transactions rolled back
<input type="checkbox"/>	B072_TranResErrRbPct	WLSSPI:WLSSPI_0072	Percent of transactions rolled back due to resource error
<input type="checkbox"/>	B073_TranAppErrRbPct	WLSSPI:WLSSPI_0073	Percent of transactions rolled back due to application error
<input type="checkbox"/>	B074_TranTimErrRbPct	WLSSPI:WLSSPI_0074	Percent of transactions rolled back due to timeout error
<input type="checkbox"/>	B075_TranSysErrRbPct	WLSSPI:WLSSPI_0075	Percent of transactions rolled back due to system error
<input type="checkbox"/>	B077_TranHeurCnt	WLSSPI:WLSSPI_0077	Percent of transactions returning a heuristic decision
<input type="checkbox"/>	B080_CIsOutMesFailRt	WLSSPI:WLSSPI_0080	Number of multicast messages per minute to cluster resent
<input type="checkbox"/>	B081_CIsInMesFailRt	WLSSPI:WLSSPI_0081	Number of multicast messages per minute from cluster lost by server
<input type="checkbox"/>	B085_InvLoginAttCnt	WLSSPI:WLSSPI_0085	Number of invalid login attempts
<input type="checkbox"/>	B090_TimeSerExceptCnt	WLSSPI:WLSSPI_0090	Number of exceptions thrown for all triggers
<input type="checkbox"/>	B092_ExQueThroughput	WLSSPI:WLSSPI_0092	Percentage of requests serviced

レポートを生成するには、[Integrations] → [HPOM for Unix Operational UI] を選択します。管理対象ノードを右クリックして、[スタート] → [SPI for WebLogic] → [WLSSPI Reports] → [Name of the Metric Report] を選択します。各レポートでは、管理対象ノード上に設定されたすべての **WebLogic Server** インスタンスの状態が、レポート対象のメトリックに関連して示されます。

### 警告通知から生成された登録ツールのレポート

警告通知条件からレポートを生成できます。このレポートはコンテキストに基づき自動的に生成され、管理対象ノード上の 1 つのサーバーにのみ関連しています。これらのレポートは、特定メッセージの [メッセージのプロパティ] ウィンドウの [注釈] タブの下に表示されます。

**SUAONE** 列を表示するようメッセージ ブラウザを設定している場合、レポートが生成されたときに **S** 列 (メッセージの隣) の下にフラグが表示されます。

## JMX Metric Builder ツール

JMX Metric Builder ツール グループには以下のツールがあります。

- **Deploy UDM:** UDM ファイルを展開します。
- **Gather MBean Data:** JMX Metric Builder で使用される MBean 情報を収集します。

- **JMX Metric Builder:** UDM を作成して MBeans を参照するために使用する JMX Metric Builder ツールを起動します。
- **UDM Graph Enable/Disable:** UDM グラフのデータ収集を開始または停止します。HP Operations サブエージェントの開始または停止も行います。

JMX Metric Builder ツール グループの詳細と SPIJMB ソフトウェアのインストール手順については、『*HP Operations Smart Plug-in User Defined Metrics User Guide*』を参照してください。

## ツールの起動

このセクションでは、WebLogic SPI のツールを起動する方法について説明します。**Discover or Configure WLSSPI ツールの起動**の手順は Discover or Configure WLSSPI ツールを起動する方法を記述して、**すべてのツールの起動** はすべてのツール (Discover or Configure WLSSPI ツールを除く) を起動できる方法について説明します。

### 重要!

WebLogic SPI に関連する GUI を起動するには、次の手順を実行します。

- 1 HPOM for UNIX 9.0x サーバー Operator GUI を起動するマシンに X-windows クライアント ソフトウェアをインストールします。
- 2 X-windows クライアント ソフトウェアを開始します。

## Discover or Configure WLSSPI ツールの起動

Discover or Configure WLSSPI ツールを起動する方法については、**検出の実行** (42 ページ) および **設定の実行** (46 ページ) を参照してください。

## すべてのツールの起動

- 1 Administration UI から **[Integrations]** → **[HPOM for Unix Operational UI]** を選択します。
- 2 ツールを起動する 1 つまたは複数のノードを選択します。
- 3 ノードを右クリックして、**[スタート]** → **[SPI for WebLogic]** → **[<Tool Group>]** → **[<Name of the Tool>]** を選択します。  
[<Name of the Tool> Output] ウィンドウが開きます。

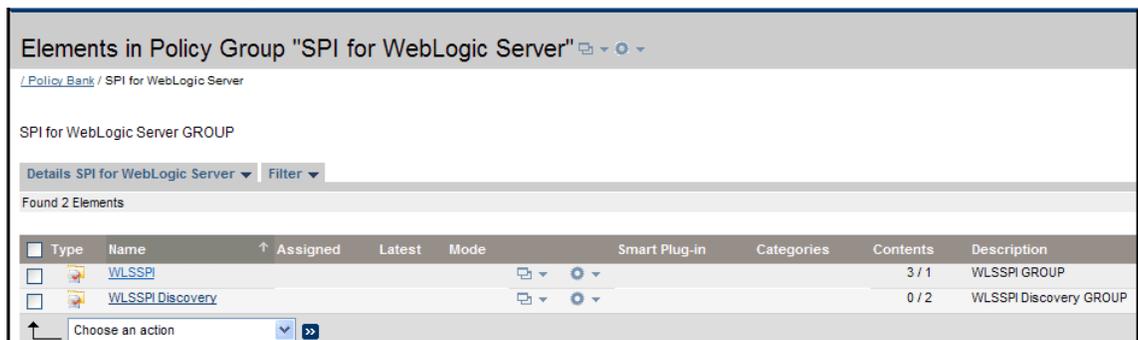
# 第5章 WebLogic SPI ポリシーのカスタマイズ

## 概要

[Policy Bank] ウィンドウで、SPI for WebLogic Server ポリシー グループは、次のポリシー グループで構成されます。

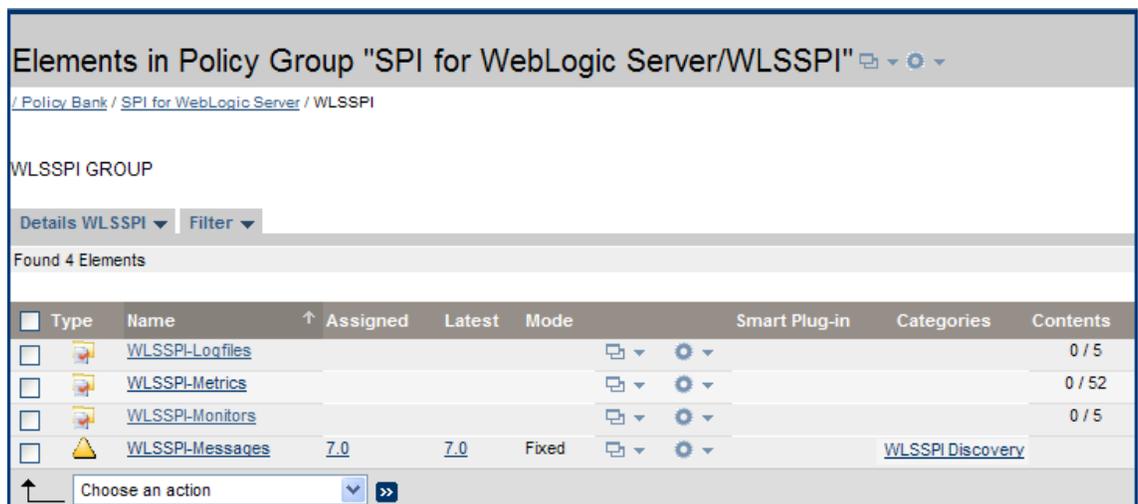
- WLSSPI
- WLSSPI Discovery

図 13 SPI for WebLogic Server ポリシー グループ



WLSSPI ポリシー グループには、以下のポリシー サブグループと個々のポリシーが含まれます。

図 14 WLSSPI ポリシー グループ



- **WLSSPI-Logfiles:** WebLogic Server ログファイルと WebLogic SPI ログファイルの両方で検出されたログファイルとエラー テキストに基づいてメッセージを生成するポリシーを含みます。これらのログファイルから取り込まれた情報には、WebLogic Server または WebLogic SPI の操作中に発生したエラーや WebLogic Server 設定の変更が含まれます。

図 15 WLSSPI-Logfiles ポリシー サブグループ

Type	Name	Assigned	Latest	Mode	Smart Plug-in	Categories	Description
<input type="checkbox"/>	<a href="#">WebLogic Log Template</a>	7.0	7.0	Fixed		<a href="#">WebLogic</a>	Catch
<input type="checkbox"/>	<a href="#">WLSSPI Error Log</a>	7.0	7.0	Fixed		<a href="#">WebLogic</a>	Monitor
<input type="checkbox"/>	<a href="#">WLSSPI Java Collector Error Log</a>	7.0	7.0	Fixed		<a href="#">WebLogic</a>	Monitor
<input type="checkbox"/>	<a href="#">WLSSPI Java Discovery Error Log</a>	7.0	7.0	Fixed		<a href="#">WebLogic</a>	Monitor
<input type="checkbox"/>	<a href="#">WLSSPI-Logfile-Monitor</a>	7.0	7.0	Fixed		<a href="#">WebLogic</a>	WLSSPI

- **WLSSPI-Metrics** : WebLogic Server のパフォーマンス レベルおよび可用性を監視するメトリック ポリシーが含まれます。

各メトリック ポリシーは、監視対象のメトリック、しきい値を超えた場合に HPOM メッセージブラウザに送信されるメッセージ テキスト、実行するアクション、および表示される指示についてのしきい値の条件を決定します。

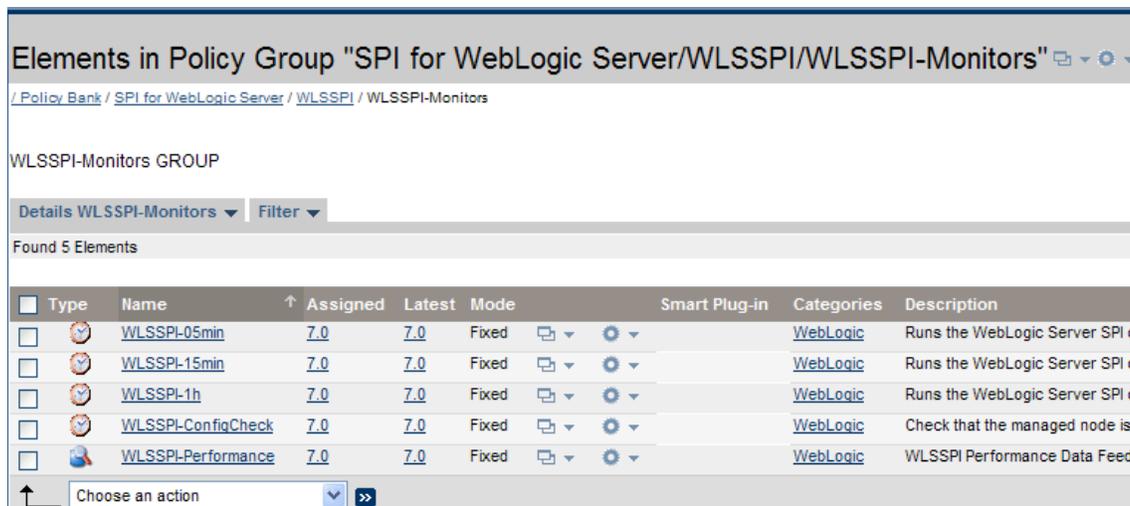
- **WLSSPI-Monitor** : メトリック ポリシーの収集間隔を指定するコレクタ ポリシーが含まれます。各コレクタ ポリシーの名前には、収集間隔が含まれています。たとえば、ポリシー **WLSSPI-1h** の収集間隔は 1 時間です (1h は 1 時間を表しています)。各コレクタ ポリシーには、5 分、15 分、1 時間のいずれかの収集間隔が指定されています。

コレクタ ポリシーを開くと、指定された間隔で収集されるメトリックがリストされています (メトリックはコレクタ/アナライザ用コマンド `wasspi_ca` の `-m` オプションの後に番号でリストされます)。

各コレクタ ポリシーは、どのようなメトリックをいつ収集するかを制御します。具体的には、コレクタ ポリシーは以下を実行します。

- 各収集間隔でコレクタ/アナライザを実行する
- どのメトリックを収集するかを指定する

図 16 WLSSPI-Monitors ポリシー サブグループ



- WLSSPI-Messages** : これは単一ポリシーです。このテンプレートは、HPOM メッセージブラウザの WebLogic SPI メッセージを遮断します。

WLSSPI Discovery ポリシー グループには、以下のポリシー サブグループと個々のポリシーが含まれます。

図 17 WLSSPI Discovery ポリシー グループ



- WLSSPI-Messages** : これは単一ポリシーです。このテンプレートは、HPOM メッセージブラウザの WebLogic SPI メッセージを遮断します。
- WLSSPI-Service Discovery** : これは単一ポリシーです。このテンプレートは、HPOM 管理サーバーと管理対象ノード上の設定を更新します。

UDM についての詳細は、『HP Operations Smart Plug-in User Defined Metrics User Guide』を参照してください。

## ポリシーの基本的なカスタマイズ

使用している環境の要件に基づいて、デフォルトの **WebLogic SPI** ポリシーをカスタマイズする必要があります。このセクションでは、(メトリックポリシーの変更による)しきい値の変更、および警告通知の生成の変更などの基本的なカスタマイズについて説明します。

▶ ポリシーをカスタマイズする前に、デフォルトポリシーのコピーを作成します。

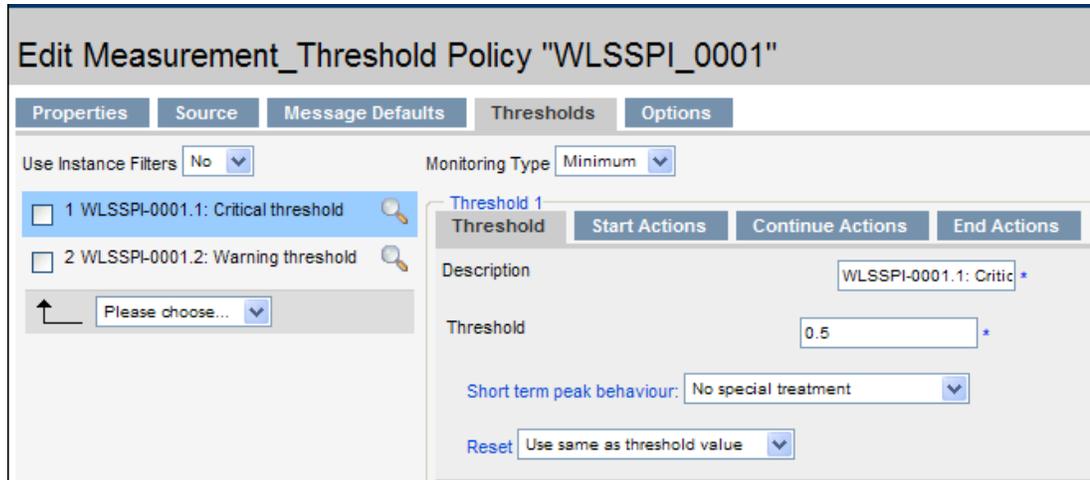
### メトリックポリシーの変更

以下のステップに従って、**WebLogic Server** のすべての監視対象のインスタンスについて、多くのメトリック属性を変更できます。以下の手順を実行します。

- 1 [Policy Bank] ウィンドウを開きます。
- 2 [SPI for WebLogic Server] → [WLSSPI] → [WLSSPI-Metrics] ポリシーグループをクリックします。
- 3 ドロップダウンリストからメトリックを1つ選択し、[Edit...] をクリックします。

ドロップダウンリストが  のように表示されます。

- 4 [Edit Measurement\_Threshold Policy "*Metric Name*"] ウィンドウが開きます。
- 5 [Thresholds] タブをクリックします。
- 6 変更する条件をクリックします。



- 7 別のタブ ([Threshold]、[Start Actions]、[Continue Actions]、および [End Actions]) をクリックして、属性を変更します。変更可能な属性のリストについては、表5を参照してください。
- 8 [Save] をクリックして変更を保存します。
- 9 **WebLogic SPI** ポリシーを配布する (45ページ) の説明に従って、変更されたポリシーを配布します。

表 5 メトリック属性

属性	説明
しきい値	この値を超えた場合、問題が発生しようとしているか、またはすでに発生していることが示されます。
継続期間	メトリックに対する入力データ値が設定済みのしきい値を超過した状態で、この値よりも長い時間が経過すると警告通知が生成されます。
重要度	環境における重要性に基づき、メッセージに割り当てるレベル。 <b>【開始アクション】</b> タブ、 <b>【メッセージ】</b> の順にクリックします。 <b>【重要度】</b> ドロップダウン リストから重要度を選択します。
メッセージ テキスト	管理オブジェクトの状態、管理オブジェクトに関連するイベント、または管理オブジェクトの問題についての構造化された判読可能な情報。 <b>注意:</b> メッセージ内で山カッコ <> かっこで囲まれ、\$ で始まるパラメータは、変更しないでください。
アクション	メッセージに対する応答です。この応答は、メッセージ ソース ポリシーまたは条件により割り当てられ、自動的にまたはオペレータが起動することで生じます。レポートの表示、 <b>Performance Manager</b> のグラフの表示、またはカスタムプログラムの追加を行う場合は、アクションを設定する必要があります。
<b>【自動起動】</b> アクション	着信イベントまたはメッセージにより実行されるアクション。オペレータの介入は不要です。 <b>WebLogic SPI</b> に付属の自動起動アクションにより、スナップショット レポートが生成されます。このレポートには、しきい値を超過してアクションが実行された時点のデータ値が示されます。 <b>【メッセージのプロパティ】</b> ウィンドウの <b>【注釈】</b> タブの下にあるレポートを表示できます。
オペレータ起動アクション	特定のメッセージに回答して修復措置または予防措置をとるのに使用されるアクション。自動起動アクションとは異なり、これらのアクションはオペレータにより起動されます。 <b>WebLogic SPI</b> に添付されたオペレータ起動アクションを使用すると、しきい値を超えたために他の関連メトリック値とともにメッセージを生成したメトリックのグラフを表示できます (グラフを表示するには、 <b>【メッセージのプロパティ】</b> ウィンドウ内の <b>【アクション起動】</b> をクリックします)。

図 18 では、メトリック **WLSSPI-0026** に、しきい値 **10** が設定されています。メトリック **WLSSPI-0026** は、クライアントが利用可能な **EJB (Enterprise Java Bean)** を待つ **1 分**あたりの回数の合計を監視します。

このメトリックの重要度レベルは「注意域」です。

このメトリックに設定されているしきい値は **10** です。クライアントが **EJB** を待つ回数が **1 分**あたりに **10** 回を越えると、警告通知 (警告メッセージ) が生成されます。

図 18 WLSSPI-0026 のしきい値

Name		WLSSPI_0026
Type		external
Description		Aggregate EJB Timeout Rate
Conditions (1) <a href="#">Show all</a>		
Condition		Condition No.1 - WLSSPI-0026.1: Warning threshold (match)
Overview		Match
1 match	WLSSPI-0026.1: Warning threshold	Set (start)
Threshold		10
Severity		warning
Application		Weblogic Application Server
Content		WLSSPI-0026.1: # of times per minute a client timed out waiting for an EJB (<\$VALUE>) too high (>= <\$THRESHOLD>) [Policy: <\$NAME>]
Message Key		<\$NAME>.<\$MSG_NODE_NAME>.<\$MSG_OBJECT>
Message key relation		^<\$NAME>.<\$MSG_NODE_NAME>.<\$MSG_OBJECT>\$(ignore case)
Service name		WLS_EJB_<\$OPTION(map_servername)>_<\$OPTION(map_port)>_<\$OPTION(node)><\$OPTION(applicationname)>
Actions		
Operator	Initiated	/opt/OV/wasspi/wls/bin/wasspi_xterm -e /opt/OV/wasspi/wls/bin/wasspi_optaction_graphs <\$MSG_NODE_NAME> "<\$OPTION(servername)>" "EJB Performance"(execute on node <\$OPC_MGMTSV>)(creates annotation)
Action	Automatic	wasspi_perl_su -S wasspi_ca -r -m WLSSPI_0026 -i "<\$OPTION(servername)>" (execute on node <\$MSG_NODE_NAME>)(creates annotation)
(Send message after automatic action finished)		
		Set (end)
Severity		normal
Application		Weblogic Application Server
Content		WLSSPI-0026.1: # of times per minute a client timed out waiting for an EJB (>= <\$THRESHOLD>) [Policy: <\$NAME>]
Message Key		<\$NAME>.<\$MSG_NODE_NAME>.<\$MSG_OBJECT>
Message key relation		^<\$NAME>.<\$MSG_NODE_NAME>.<\$MSG_OBJECT>\$(ignore case)
Service name		WLS_EJB_<\$OPTION(map_servername)>_<\$OPTION(map_port)>_<\$OPTION(node)><\$OPTION(applicationname)>
Server log		on
		only

## 警告通知生成の変更

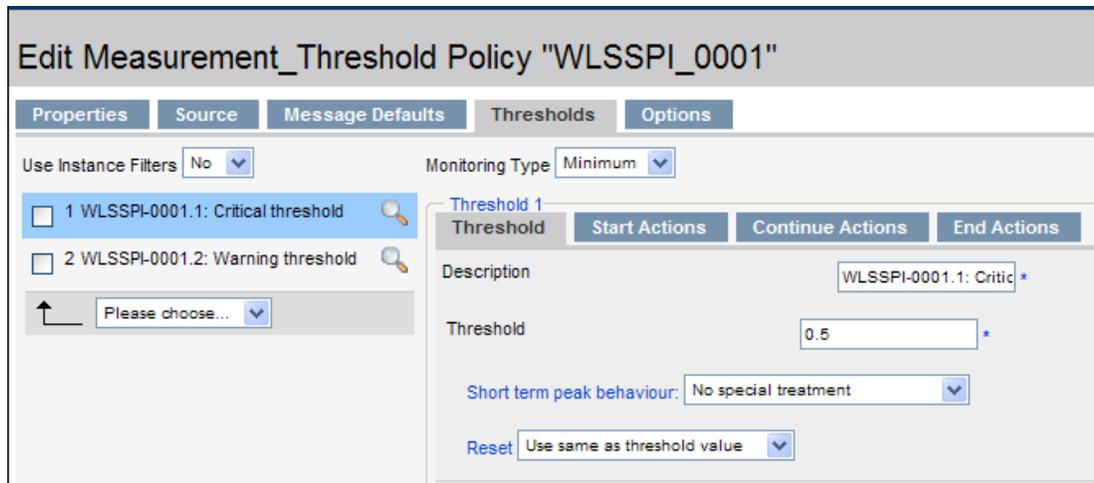
警告通知が生成される回数を設定するには、[しきい値のモニタの変更] ウィンドウの属性を変更します。

メッセージの生成を変更するには、以下の手順を実行します。

- 1 [Policy Bank] ウィンドウを開きます。
- 2 [SPI for WebLogic Server] → [WLSSPI] → [WLSSPI-Metrics] ポリシーグループをクリックします。
- 3 ドロップダウン リストからメトリックを 1 つ選択し、[Edit...] をクリックします。

ドロップダウン リストが  のように表示されます。

- 4 [Edit Measurement\_Threshold Policy “Metric Name”] ウィンドウが開きます。
- 5 [Thresholds] タブをクリックします。
- 6 条件をクリックして、メッセージ生成の設定を変更します。



- 7 メッセージ生成設定を変更するには、**[Reset]** ドロップダウン リストから必要なオプションを選択します。
  - **[Use Same as threshold level]:** 監視しきい値を超えると 1 回警告通知が生成されます。メトリック値がしきい値違反ではなくると、アラームは自動的にリセットされます。その後しきい値を超えるとアラームが再び生成されます。
  - **[Specify a special reset value...]:** しきい値を超えると、警告通知が 1 回生成されます。同時にリセットしきい値が有効になります。リセットしきい値を超えたときだけ、元のしきい値が再び有効になります。その後、再びしきい値を超えると、別の警告通知が生成され、プロセスは初めからやり直しになります。
- 8 **[Save]** をクリックして変更を保存します。
- 9 **WebLogic SPI ポリシーを配布する (45 ページ)** の説明に従って、変更されたポリシーを配布します。

## ポリシーの高度なカスタマイズ

デフォルトのポリシー グループをコピーしていくつかの設定をカスタマイズすること、ポリシーのコマンド行でメトリック グループを削除することなどポリシーの変更。個々で説明する変更はすべて、**WebLogic SPI** メトリックについての高度な知識を必要とします。

### カスタマイズするメトリックの選択

どのメトリックをカスタマイズし、グループ内のどのポリシーを使用するかを決定します。以下の手順を実行します。

- 1 **[Policy Bank]** ウィンドウを開き、**[SPI for WebLogic Server]** をクリックします。
- 2 ドロップダウン リストから使用するポリシー グループを選択し、**[Copy...]** をクリックします。

ドロップダウン リストが  のように表示されます。

**[Copy Policy Group]** ウィンドウが表示されます。

- 3 グループの名前を変更して、親グループを選択して **[Save]** をクリックして保存します。

- 4 名前が変更されたポリシー グループ内で、各オリジナル ポリシーをコピーして、その名前を変更します (ステップ 2 および 3 に従います)。
- 5 名前が変更されたポリシー グループ内でオリジナル ポリシーを削除するには、[Choose an Action] ドロップダウン リストから [Delete...] を選択して  をクリックして実行します。
- 6 グループ内の名前を変更したポリシーを必要に応じてカスタマイズします。  
新しいポリシー グループを作成すると、元のデフォルト ポリシーからカスタム ポリシーを分離できます。

## パラメータ付きの WebLogic SPI コレクタ/アナライザ コマンドの使用

`wasspi_perl_su -S wasspi_ca -prod wls` コマンドは、すべてのコレクタ テンプレートで使用されます。コレクタ ポリシーは、収集間隔に基づいた名前が付けられています。デフォルト コマンド行パラメータは、[コマンド] テキスト ボックス内の [Scheduled Task] タブの下にある [Edit Scheduled\_Task Policy “Policy name”] ウィンドウで表示できます。

## WebLogic Server コマンド パラメータの使用方法

WebLogic SPI のデータ収集は、`wasspi_ca` コマンドで開始します。このコマンドには、以下の表に示すその他のパラメータを追加することができます。

パラメータ	機能	構文
<code>-e</code> (exclude)	特定のサーバーを除外できます。このオプションは、 <code>-i</code> オプションと同時に使用できません。	<code>-e &lt;server_name&gt;</code> 例: <code>-e server2,server4</code>
<code>-i</code> (include)	監視する特定のサーバーを一覧表示できます。このオプションは、 <code>-e</code> オプションと同時に使用できません。	<code>-i &lt;server_name&gt;</code> 例: <code>-i server1,server3</code>
<code>-m</code> (metric)	データを収集する対象となるメトリックの番号または番号の範囲を指定します。	<code>-m</code> <code>&lt;metric_number metric_number_range&gt;</code> 例: <code>-m 1,3-5,9-11,15</code>
<code>-matchver</code> (match version)	監視する特定の WebLogic Server のバージョンを指定します。このオプションは、 <code>-minver</code> オプションまたは <code>-maxver</code> オプションと同時に使用できません。一致するバージョンが見つからなかった場合、このコマンドは実行されません。	<code>-matchver &lt;version_number&gt;</code> 例: <code>-matchver 10</code>
<code>-maxver</code> (maximum version)	監視する最高の WebLogic Server のバージョンを指定します。 <code>-minver</code> とともに使用すると、バージョンの範囲を指定できます。バージョンが何も見つからなかった場合、このコマンドは実行されません。	<code>-maxver &lt;version_number&gt;</code> 例: <code>-maxver 10</code>
<code>-minver</code> (minimum version)	監視する最低の WebLogic Server のバージョンを指定します。 <code>-maxver</code> とともに使用すると、バージョンの範囲を指定できます。バージョンが何も見つからなかった場合、このコマンドは実行されません。	<code>-minver &lt;version_number&gt;</code> 例: <code>-minver 9</code>

パラメータ	機能	構文
-r (report)	指定したメトリックの ASCII レポートを生成します。	-r
-t (tag)	既存のコレクタ ポリシーにプレフィックスを付け、メトリック番号を指定することにより、新しいポリシー グループを作成します。	-t <prefix>- 例:wasspi_ca -prod wls -t DEV-
-prod	(本運用) ノード上でコマンドを実行する SPI を特定します。	<b>構文:</b> -prod <Name of the SPI>- 例:wasspi_perl -S wasspi_ca -prod wls -m 220-223 -t DEV-
-x	以下のプロパティ / 値を指定できます。	-x <property>=<property_value>
	<b>alarm: off</b> にすると、メトリック モニタポリシーに設定されているすべての警告通知条件を無効にします。	-x alarm=off
	<b>prefix:</b> デフォルト: JMXUDM_。メトリック ID のプレフィックスを指定します。	-x prefix=SALES_
	<b>print: on</b> にすると、設定した警告通知やログ作成に加え、メトリック名、インスタンス名、およびメトリック値を STDOUT に出力します。	-x print=on
	<b>graph: off</b> にすると、グラフ作成機能が停止します。	-x graph=off
	<b>report: off</b> にすると、レポート作成機能が停止します。	-x report=off

#### 構文例

- 設定されているすべてのサーバーから特定のデータを収集する場合:  
wasspi\_ca -prod wls -m 10-14,25,26
- 特定のサーバーのみからデータを収集する場合:  
wasspi\_ca -prod wls -m 245,246,26 -i server1,server2
- 特定のサーバーからデータを収集しない場合:  
wasspi\_ca -prod wls -m 220-225 -e server1,server2

## JMX コマンド パラメータの使用方法

このセクションでは、JMX アクションを実行するために使用するコマンド パラメータについて説明します。JMX アクションとは、MBean インスタンスまたは MBean タイプに対して実行する 1 つまたは複数の JMX 呼び出し (invoke、get、set) です。1 つの JMX 呼び出しは、コマンド行から実行できます。複数の JMX 呼び出しを指定する場合、XML ファイルに記述するか、UDM ファイルに Metric 子要素として記述します。

表 6 JMX コマンド パラメータ

パラメータ	機能	構文
-a (action) 必須	JMX アクションを実行することを指定します。	-a
-i (include)	JMX アクションを実行するサーバーを指定します。このパラメータを指定しない場合、JMX アクションは設定されているすべてのサーバーで実行されます。	-i <server_name> 例: -i server1,server3
-m (metric)	実行するアクションを含むメトリック ID を指定します。メトリック ID は UDM ファイルに定義されていなくてはなりません。このオプションは、-mbean オプションまたは -xml オプションと同時に使用できません。	-m <metric_id> 例: -m TestUDM_1000

表 6 JMX コマンド パラメータ

パラメータ	機能	構文
-mbean	特定の MBean 上で JMX 呼び出しを実行します。このオプションは、-m オプションまたは -xml オプションと同時に使用できません。	-mbean <objectname> <action> 例: -mbean *:* , Type=JMSServerConfig -get MessagesMaximum\ 上記の構文内の <action> (JMX 呼び出し) は、以下のいずれかを使用します。
-get		指定した属性の値を返します。 構文: -mbean <objectname> -get <attribute> 例: -get MessagesMaximum
-invoke [-type]		指定したパラメータで MBean オペレーションを実行します。オペレーションによっては、パラメータが不要な場合もあります (この場合、-type は指定しません)。パラメータを受け取る操作の場合は、type パラメータを指定する必要があります。-type は、オペレーションのオーバーロードをサポートします。 構文: -mbean <objectname> -invoke <operation> [-type <parameter_type> <parameter_value>]... <parameter_type> には、以下のいずれかの型を指定します。 short、int、long、double、float、boolean、java.lang.Short、java.lang.Integer、java.lang.Long、java.lang.Double、java.lang.Float、java.lang.Boolean、および java.lang.String 例: -invoke stagingEnabled -type java.lang.String examplesServer
-set		指定した属性に指定した値を割り当てます。 構文: -mbean <objectname> -set <attribute> <value> 例: -set MessagesMaximum 250000
-o	(object) MBean インスタンスを指定します。	構文: -o <mbean_instance> 例: -o examplesJMSServer
-xml	実行する JMX アクションを含む XML ファイルを指定します。このオプションは、-m オプションまたは -mbean オプションと同時に使用できません。	構文: -xml <filename> 例: -xml myJMXActions.xml

## 例

- 警告を通知する **WebLogic** 実行キューの最大スレッド数を **50** に設定する  
(`<$OPTION (instancename)>`には警告を通知するインスタンスを指定)  

```
wasspi_perl -S wasspi_ca -prod wls -a  
-mbean "PetStore:*,Type=ExecuteQueueConfig"  
-set ThreadsMaximum 50 -o <$OPTION(instancename)>
```
- 複数の **MBean** インスタンスで **MessagesMaximum** 属性を **25000** に設定する:  

```
wasspi_perl -S wasspi_ca -prod wls -a  
-mbean *:*,Type=JMSServerConfig -set MessagesMaximum 250000 -i examplesServer
```
- 特定の **MBean** インスタンスで **MessagesMaximum** 属性を **25000** に設定する:  

```
wasspi_perl -S wasspi_ca -prod wls -a  
-mbean *:*,Type=JMSServerConfig -set MessagesMaximum 250000 -i examplesServer -o  
examplesJMSServer
```
- 複数の **MBean** インスタンスに対して操作を呼び出す:  

```
wasspi_perl -S wasspi_ca -prod wls -a  
-mbean *:*,Type=ApplicationConfig -invoke staged  
-i examplesServer
```
- **MessagesMaximum** 属性を取得する (`set` コマンドの実行後、属性が設定されたことを確認するために使用):  

```
wasspi_perl -S wasspi_ca -prod wls -a  
-mbean *:*,Type=JMSServerConfig -get MessagesMaximum  
-i examplesServer
```
- `wls_UDMMetrics-sample.xml` ファイル内でサンプル **UDM TestUDM\_1000** を使用する:  

```
wasspi_perl -S wasspi_ca -prod wls -a -m TestUDM_1000 -i examplesServer
```

## 監視されたすべてのメトリックの収集間隔の変更

監視されているすべてのメトリックの収集間隔を変更するには、該当するコレクタ ポリシーの [ポーリング 周期] を変更します。たとえば、**WLSSPI-05min** コレクタ ポリシーについてデフォルト メトリックの収集を 5 分から 10 分に変更するには、以下の手順を実行します。

- 1 [Policy Bank] ウィンドウを開きます。
- 2 **[SPI for WebLogic Server]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI-Metrics]** をクリックします。
- 3 ドロップダウン リストから コレクタ ポリシー **WLSSPI-05min** を選択し、**[Edit...]** をクリックします。

ドロップダウン リストが  のように表示されます。

- 4 [Edit Scheduled\_Task Policy “WLSSPI-05min”] ウィンドウが表示されます。

**Edit Scheduled\_Task Policy "WLSSPI-05min"**

Properties | **Scheduled Task** | Message Failed

Name: WLSSPI-05min \* ?

Type: schedule \*

Version: 7.0 | Auto-increment on save

Description: Runs the WebLogic Server SPI collector/analyzer every 5 minutes \* ?

- 5 名前を **WLSSPI-10min** に変更して、説明も変更します。
- 6 **[Scheduled Task]** タブをクリックします。
- 7 [分] ボックスで、ポーリング周期を 5 分から 10 分に変更します。たとえば、「0、10、20...」のようになります。
- 8 **[Message Failed]** タブをクリックします。
- 9 メッセージ テキストを変更します。
- 10 **[Save]** をクリックします。
- 11 新しいポリシーを分配します ([WebLogic SPI ポリシーを配布する \(45ページ\)](#) の説明に従います)。

## 選択したメトリックの収集間隔の変更

選択したメトリックの収集間隔を変更するには、該当するコレクタ ポリシーをコピーし、新しい間隔を反映した名前に変更します。次に、変更するメトリック以外のすべてのメトリックを削除し、新しい間隔を設定します。その後、変更したポリシーを元のテンプレートから削除します。

たとえば、メトリック 70-81 の収集間隔を 10 分に変更するには、以下の手順を実行します。

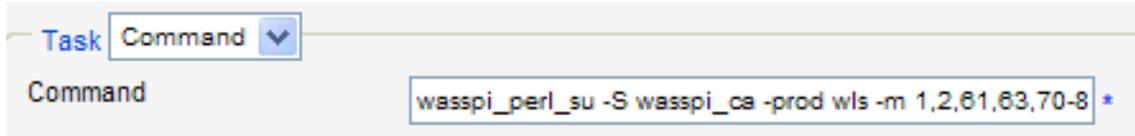
- 1 **[Policy Bank]** ウィンドウを開きます。
- 2 **[SPI for WebLogic Server] → [WLSSPI] → [WLSSPI-Metrics]** をクリックします。
- 3 ドロップダウン リストからポリシー **WLSSPI-05min** を選択し、**[Copy...]** をクリックします。

ドロップダウン リストが  のように表示されます。

**[Copy Policy WLSSPI-05min]** ウィンドウが表示されます。

- 4 名前を **WLSSPI-10min** に変更して、説明も変更します。
- 5 **[Scheduled Task]** タブをクリックします。
- 6 [分] ボックスで、ポーリング周期を 5 分から 10 分に変更します。たとえば、「0、10、20...」のようになります。

- 7 コマンド テキスト ボックスで、70-81 を除く、-m の後のすべてのメトリックを削除します。



- 8 **[Save]** をクリックして変更を保存します。
- 9 **WLSSPI-Monitor** ポリシー グループで、**WLSSPI-5min** ポリシーを選択します。
- 10 ドロップダウン リストから **[Edit...]** を選択します。  
ドロップダウン リストが  のように表示されます。  
**[Edit Scheduled\_Task Policy WLSSPI-05min]** ウィンドウが表示されます。
- 11 **[Scheduled Task]** タブをクリックします。
- 12 コマンド テキスト ボックスから「70-81」を削除します。
- 13 **[Save]** をクリックして変更を保存します。
- 14 **WebLogic SPI ポリシーを配布する (45 ページ)** の説明に従って、変更されたポリシーを再分配します。

## 個々のアプリケーション、EJB、サーブレット、または JDBC のしきい値のカスタマイズ

環境によっては、特定のアプリケーションが他のアプリケーションよりも重要な場合や、アプリケーション内で、特定の **EJB/サーブレット/JDBC** データソースがその他よりも重要となる場合があります。しきい値は、重要性に応じて、アプリケーションごとに、または **EJB/サーブレット/JDBC** データソースごとに設定できます。

しきい値を変更するには、既存の条件をコピーして変更します。以下の手順を実行します。

- 1 カスタマイズするメトリックをダブルクリックして開きます (たとえば **WLSSPI-0012**)。[メッセージ条件と除外条件] ウィンドウが開きます。
- 2 必要な条件を選択し、**[コピー ...]** ボタンをクリックしてその条件のコピーを作成します。
- 3 [オブジェクト・パターン] フィールドに、以下の詳細情報を入力します (必要なフィールドにのみ入力します。例を参照)。

**<ServerName>:<ServerPort>:<NodeName>:<ApplicationName>:<EJBName / ServletName / JDBC DataSource>:<Instance Name>**

- 4 [しきい値] 列で、しきい値を変更します。
- 5 対象のノードにポリシーを配布します。

しきい値をカスタマイズする前に、サーバーで動作しているアプリケーション/**EJB/サーブレット/JDBC** のデータソースを表示させたい場合があります。このためには、以下の **WebLogic SPI** ツールを使用できます。

- **View WebLogic Servers:** すべての実行中のアプリケーション サーバーと対応するポートの詳細を表示します。
- **View Deployed Apps:** 特定のサーバーに配布されているすべてのアプリケーションのリストを表示します。

### 例

以下の例では、[オブジェクト・パターン] フィールドに詳細情報を入力する方法を示しています。

- 例 1: MedrecEAR アプリケーションのしきい値を設定する必要があり、このアプリケーション名がすべてのノードで一意である場合、以下のように入力します。

```
<*>:<*>:<*>:MedrecEAR:<*>:<*>
```

- 例 2: ノード 1 とノード 2 で使用できる MedrecEAR アプリケーションのしきい値を設定する場合、ノード 1 のみでしきい値を設定するには、以下のように入力します。

```
<*>:<*>:node1:MedrecEAR:<*>:<*>
```

- 例 3: MedrecEAR アプリケーション内の FileServlet サブレットのしきい値を設定する必要があり、FileServlet がすべてのノードで一意である場合、以下のように入力します。

```
<*>:<*>:<*>:MedrecEAR:FileServlet:<*>
```

## タグ付きのカスタム ポリシーの作成

高度なカスタマイズのためのもう 1 つのオプションは、タグ オプション (コマンド行上の `-t`) です。これにより、名前にタグを付けてカスタマイズしたポリシーをコレクタまたはアナライザで認識できます。このオプションを使用すると、WebLogic Server の特定の設定に関する条件を定義したポリシーを複数セット持つという柔軟性が加わります。

複数のノードをいくつかのグループで管理するときこのオプションを使用すると、特定のタグを付けたポリシーを、元の設定とは明確に区別して作成できます。この場合、ポリシーのコピーを作成して名前をタグ付きの名前に変更し、タグ付きの名前を選択するようコレクタ ポリシーを修正した後、さまざまなグループに割り当てます。

たとえば、ポリシーのグループを作成し、名前に **CLIENT01** が含まれるよう各ポリシー名を変更できます。メトリック モニタ ポリシーの名前は、たとえば **CLIENT01-WLSSPI\_0012** とします (メトリック番号はそのまま使用する必要があります)。コレクタ ポリシーの名前は、たとえば **FIRST\_CLIENT-05min** とします。次に、**SECOND\_CLIENT** 用に別のグループを設定し、名前に **CLIENT02** が含まれるようそれらすべてのポリシーを変更します。

## 新しいポリシー グループを作成するには

- 元のポリシー グループをコピーします。[Policy Bank] ウィンドウで、グループを選択して、ドロップダウン リストから **[Copy...]** をクリックします。

ドロップダウン リストが  のように表示されます。

[Copy Policy Group] ウィンドウが表示されます。

- 新しいグループに名前を付け、新しいモニタとコレクタ ポリシーを識別できるようにします。たとえば、ポリシー名に **CLIENT01** を含んでいる場合は、新しいポリシー グループ名にもそれを含めます。

- [Policy Bank] ウィンドウで、ポリシー グループをクリックして、すべてのポリシーを表示し、使用する予定の各ポリシーを選択して、ドロップダウン リストから **[Copy...]** をクリックし (ステップ 1 と 2 の記載どおり)、命名方式に従って名前を変更します。

- グループ内の新しいメトリック モニタ ポリシーの名前は、新しい名前の後に元のメトリック番号を付けたものにします。たとえば **WLSSPI\_0001** のコピーには、**CLIENT01-WLSSPI\_0001** と命名します。

- 新しいコレクタ モニタ ポリシーに指定する名前にも、識別用の名前を含めます。また、コマンド行に `-t` プロパティを挿入して、新しいグループ用にスケジュール設定された収集も変更します。例:

```
wasspi_ca -prod wls -m 16 -t CLIENT01-
```

- 新しいグループから元のポリシーをすべて削除します。

## ポリシー変数

WebLogic SPI ポリシーでは、以下の変数が使用されます。ポリシーを独自に作成する場合、これらの変数を使用できます。

名前	説明
instancename	マルチインスタンス メトリックでメトリックのレポートを生成するインスタンス。 例: medRecServer_MedRecServer_wl_management_internal2_com.bea.wli.bpm.runtime.JwfServlet_20
map_port	port を参照してください。
map_servername	アンダースコア (“_”) にスペースが置き換えられたアプリケーション サーバー名。スペースを使用できないサービス マップ キーで使います。 例: my_server
node	アプリケーション サーバーを実行するノード。 例: node1.hp.com
port	アプリケーション サーバーがリッスンするポート。PORT 設定プロパティに相当します。 例: 9001
servername	アプリケーション サーバー名。NAME 設定プロパティに相当します。 例: my_server

## デフォルトの WebLogic SPI ポリシーの復元

WebLogic SPI のポリシーが HPOM にインストールされると、swinstall が実行された時点で以下に示すコマンドがインストールされたポリシーを自動的にアップロードします。以前のインストールでカスタマイズしたポリシーの設定は、すべて上書きされます。

元々インストールされていたデフォルトの SPI for BEA WebLogic Server ポリシー グループを復元するには、先に現在のポリシーをすべて削除した後、次の表に示すコマンドのいずれかを HPOM のバージョンに応じて実行します。

swinstall により実行されるスクリプト

HPOM バージョン	スクリプト
>8.x 以降	/opt/OV/bin/OpC/opccfgupld -silent -replace -subentity /var/opt/OV/share/tmp/OpC_appl/wasspi/wls/wls_set

-silent オプションの代わりに、-verbose オプションを使用することもできます。

## テキスト ベース レポートの表示

一部のポリシーでは、しきい値の違反やエラー条件に付属してアクションが定義されているため、[メッセージのプロパティ] ウィンドウの【注釈】タブの下にレポートが自動的に表示されます。これらのレポートは、警告通知が行われた時点付近でサーバーから収集したデータ値のスナップショットです。

その他のポリシーには、オペレータ アクションが対応付けられているため、これによりグラフを生成できます。



このセクションで説明するレポートと HP Reporter で生成されるレポートとを混同しないよう注意してください。後者は、管理用のプレゼンテーション形式での Web ページとして生成される、より統合的な履歴データを示すものです。

- メッセージの詳細を表示するには、HPOM メッセージ ブラウザでメッセージ テキストをダブルクリックします。
- レポートを表示するには、以下の手順に従います。
  - HPOM コンソールで、[Integrations] → [HPOM for Unix Operational UI] を選択します。
  - メトリック レポートを生成するノードを選択します。
  - このノードを右クリックします。
  - [スタート] → [SPI for WebLogic Server] → [SPI Admin] → [Metric Reports] → <メトリックレポートの名前> を選択します。

これらのレポートには、ノード上のすべてのサーバー データが表示されます。

- グラフを表示するには、以下の手順に従います。
  - HPOM コンソールで、[Integrations] → [HPOM for Unix Operational UI] を選択します。
  - グラフを生成するノードを選択します。
  - このノードを右クリックします。
  - [スタート] → [SPI for WebLogic Server] → [SPI Admin] → [View Graphs] を選択します。

Web ブラウザが起動され、HP Performance Manager (別途購入要) で使用できるグラフ作成機能が表示されます。

## 自動アクション レポート

多くのメトリックは、自動アクション レポートを生成します。これらのレポートは、HPOM で警告通知が発行されると直ちに生成されます。自動アクション レポートは、警告通知が行われた直後のシステムの状態を示します。

HPOM から自動アクション レポートを実行すると、追加データについてのクエリがサーバーに送信されます。SUIAONE 列を表示するようメッセージ ブラウザを設定する場合、[メッセージのプロパティ] ウィンドウの【注釈】タブの下にレポートが表示されるときに、“A”列の下に文字“S”があることに気付きます (図 19 を参照)。

図 19 メッセージ ブラウザ

重要度	重複	SUIAONE	受信時刻	ノード	アプリケーション/メッセージグループ/オブジェクト	メッセージテキスト
正常		--X----	14:01:15 08/20/09	vovm890909.hp...	Weblogic Appli... WLSMPI wasspi_co...	WLSMPI-124: WLSMPI Internal Messages: WAASSPI-000 /ser...
正常		--X----	14:01:11 08/20/09	vovm890909.hp...	Weblogic Appli... WLSMPI wasspi_co...	WLSMPI-124: WLSMPI Internal Messages: WAASSPI-000 /ser...
正常		-----X-	06:31:04 08/20/09	spilsspih19.ind...	HP OpenView ... OpC	execution complete
正常		-----	06:31:01 08/20/09	spilsspih19.ind...	HP OpenView ... OpC	execution starting

50 / 92 24 0 306 534 23 0 0 ロック

全アクティブ メッセージ

Select Map View

最大 50 メッセージを表示

## 自動アクション レポートを表示するには

[メッセージのプロパティ] ウィンドウの [注釈] タブに自動アクション レポートを表示できます。以下の手順を実行します。

- メッセージ テキストをダブルクリックします。  
[メッセージのプロパティ] ウィンドウが表示されます。
- **[注釈]** タブをクリックします。

自動アクション レポートは、1 つのサーバーに関するデータ値を示します。ウィンドウ内の列の説明に、さらに詳しい情報があります。

## 登録ツール レポート

登録ツールのレポートを使用すると、自動アクション レポートに類似したレポートを手動で生成できます。登録ツールのレポートは、管理対象ノード上で設定された **WebLogic Server** のすべてのインスタンスについて生成されます。この点が、**WebLogic Server** の単一のインスタンスについて生成される自動アクション レポートとは対照的です。登録ツールから生成されたレポートは、管理対象ノード上の **WebLogic Server** の現在の状態を反映しています。

図 20 登録ツール レポート

Type	Label	Name	Description
<input type="checkbox"/>	B001_ServerStatus	WLSSPI:WLSSPI_0001	Status of the Server
<input type="checkbox"/>	B005_JVMMemUtilPct	WLSSPI:WLSSPI_0005	Percent of heap space used in the JVM
<input type="checkbox"/>	B011_ExQThrdUtilPct	WLSSPI:WLSSPI_0011	Percent of threads in use for a server's execute queue
<input type="checkbox"/>	B012_ExQueWaitCnt	WLSSPI:WLSSPI_0012	Percent of requests waiting to be serviced
<input type="checkbox"/>	B014_ActiveSocketCnt	WLSSPI:WLSSPI_0014	Number of socket connections opened
<input type="checkbox"/>	B025_EJBFreePoolWrtSum	WLSSPI:WLSSPI_0025	Number of times/min no EJB beans available from the free pool
<input type="checkbox"/>	B026_EJBTimeoutRtSum	WLSSPI:WLSSPI_0026	Number of times/min a client timed out waiting for an EJB bean
<input type="checkbox"/>	B061_JDBCConPWTcnt	WLSSPI:WLSSPI_0061	Number of clients waiting for a connection from connection pools
<input type="checkbox"/>	B070_TranAveTime	WLSSPI:WLSSPI_0070	Average commit time for transactions
<input type="checkbox"/>	B071_TranRollbackPct	WLSSPI:WLSSPI_0071	Percent of transactions rolled back
<input type="checkbox"/>	B072_TranResErrRbPct	WLSSPI:WLSSPI_0072	Percent of transactions rolled back due to resource error
<input type="checkbox"/>	B073_TranAppErrRbPct	WLSSPI:WLSSPI_0073	Percent of transactions rolled back due to application error
<input type="checkbox"/>	B074_TranTimErrRbPct	WLSSPI:WLSSPI_0074	Percent of transactions rolled back due to timeout error
<input type="checkbox"/>	B075_TranSysErrRbPct	WLSSPI:WLSSPI_0075	Percent of transactions rolled back due to system error
<input type="checkbox"/>	B077_TranHeurCnt	WLSSPI:WLSSPI_0077	Percent of transactions returning a heuristic decision
<input type="checkbox"/>	B080_ClsOutMesFailRt	WLSSPI:WLSSPI_0080	Number of multicast messages per minute to cluster resent
<input type="checkbox"/>	B081_ClsInMesFailRt	WLSSPI:WLSSPI_0081	Number of multicast messages per minute from cluster lost by server
<input type="checkbox"/>	B085_InvLoginAttCnt	WLSSPI:WLSSPI_0085	Number of invalid login attempts
<input type="checkbox"/>	B090_TimeSerExceptCnt	WLSSPI:WLSSPI_0090	Number of exceptions thrown for all triggers
<input type="checkbox"/>	B092_ExQueThroughput	WLSSPI:WLSSPI_0092	Percentage of requests serviced

## 手動でレポートを生成するには

以下の手順を実行します。

- 1 HPOM コンソールで、**[Integrations]** → **[HPOM for Unix Operational UI]** を選択します。

- 2 メトリック レポートを生成するノードを選択します。
- 3 このノードを右クリックします。
- 4 **[スタート] → [SPI for WebLogic Server] → [SPI Admin] → [Metric Reports] → <メトリックレポートの名前>** を選択します。

# サポートされていないプラットフォーム上の WebLogic を監視する方法

WebLogic SPI は、サポート対象プラットフォームで実行しているシステムにインストールされた WebLogic Server の監視をサポートします。ただし、サポートされていないプラットフォームで実行しているシステム（「リモート システム」とも呼ばれる）にインストールされた WebLogic Server を監視するように WebLogic SPI を設定することは可能です。

このセクションの目的は、ユーザーの環境がリモート監視の設定に適しているか判断できるようにすることです。また、下記の基準を満たす環境のユーザーに対して、リモート監視を開始するための例を示します。

## リモート ノード (WebLogic SPI がサポートしていないプラットフォーム上で動作) を監視するための要件

サポートされている以外のプラットフォームで動作するシステムに WebLogic Server をインストールしている場合でも、以下の条件に該当すれば、WebLogic SPI を使用してそのリモート システムを監視できます。最後の条件はオプションです。

- そのリモート システムは、購入したライセンスの対象範囲である (Tier 1 の価格設定を使用)
- 対象の WebLogic SPI はサポートされているプラットフォーム上の少なくとも 1 つの管理対象ノード上で動作している。
- (オプション。ログファイルの監視用) そのリモート システムは、HP Operations エージェント ソフトウェアがサポートしているプラットフォーム上で動作している。

## 概要

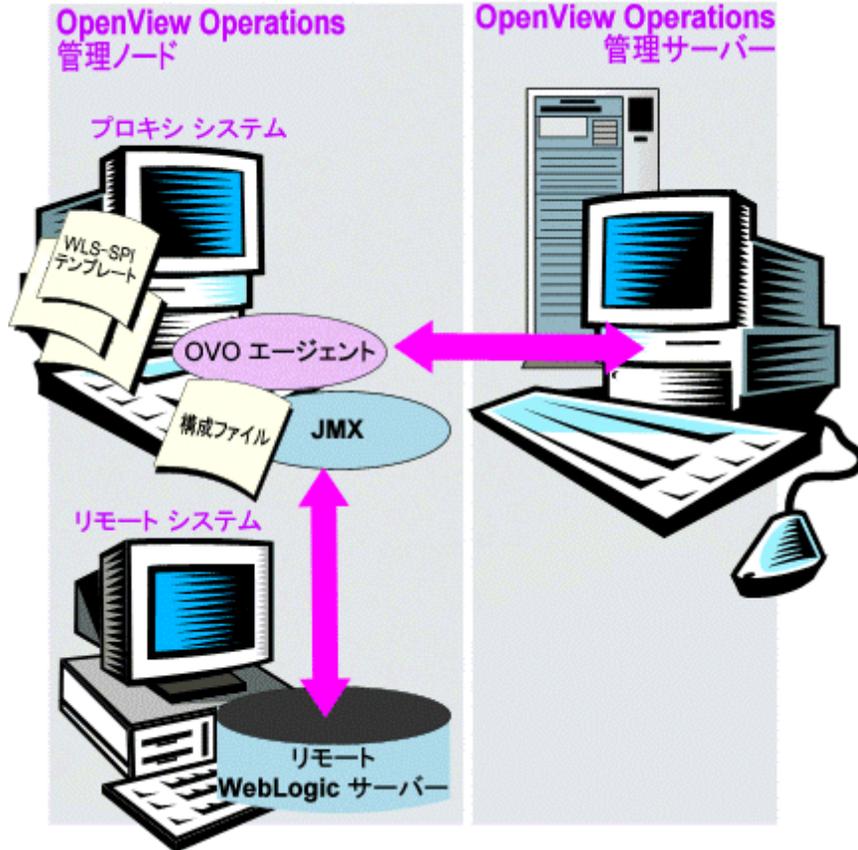
このセクションではリモート監視の概要を説明し、その実装方法を示します。また、WebLogic SPI と HP Operations エージェント ソフトウェアの両方を使用して、サポートされていないプラットフォーム上の WebLogic Server のメトリックとログファイルにアクセスするよう WebLogic SPI を設定する方法も説明します。

## リモート監視

標準設定では、WebLogic SPI のプログラム/ポリシーは、ローカルの管理対象ノード上に配布されます。標準でない設定では、ローカル システムはプロキシとして使用され、このプロキシを通じて、リモート メトリック情報にアクセスできるようになります。

リモート システムにおけるデータの収集および解釈は、データ収集が設定されたプロキシとして機能する、ローカルの管理対象ノードに依存します (図 21 を参照)。

図21 リモート システムにおけるデータ収集



**設定エントリの要件:** 設定に、ローカルシステム用とリモートシステム用の両方のエントリが含まれます。ローカルシステムのセクションに複数のリモートシステムエントリを入れることができます。90ページの例を参照してください。リモートエントリが表示される様子が(システムIPアドレスとともに)示されています。

**ポリシー配布の要件:** ポリシーはローカルノード上に配布されている必要があります。別個のポリシーグループを必要とする場合は、既存のポリシーをコピーして名前を変更し、`-i` または `-e` オプションを使用してコマンド行で WebLogic Server 名を指定します。これらのコマンド行パラメータの使用については、[WebLogic Server コマンドパラメータの使用法 \(76ページ\)](#) を参照してください。

**HP エージェントの配布の要件 (オプションのログファイル監視):** リモートの WebLogic のログファイルにアクセスするには、そのリモートシステムに HP Operations エージェントソフトウェアをインストールする必要があります。標準の HPOM プロセスを使用すれば、適正なログファイル名を指定するように WebLogic SPI に付属の標準ログファイルポリシーを変更してから、リモートシステムにこれらを配布することができます。



ログファイルのバージョン指定を使用したリモートシステムの監視はサポートされていません。

## リモートシステムの監視の設定

サポートしているプラットフォーム以外で動作しているシステム上の WebLogic Server をリモートで監視するには、以下のタスクを実行します。

### ローカルノードの検出

Discover or Configure WLSSPI ツールを使用して、ローカルノードを検出します。

## リモートの WebLogic Server を設定する

Discover or Configure WLSSPI ツールを使用して、リモート WebLogic Server と通信する各ローカル管理対象ノードを設定します。この設定では、リモート WebLogic Server 用のエントリーを追加します。

- 1 HPOM コンソールで、[Integrations] → [HPOM for Unix Operational UI] を選択します。
- 2 リモート WebLogic Server を監視する拠点となる WebLogic Server 管理対象ノードを選択します。
- 3 このノードを右クリックします。
- 4 [スタート] → [SPI for WebLogic Server] → [SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI] を選択します。
- 5 [Launch Configure Tool] ラジオ ボタンを選択して、[OK] をクリックします。
- 6 設定エディタで、プロパティ ADDRESS=<DNS server name or IP address> を設定することによって、各リモート WebLogic Server のエントリーを追加します。サーバー名および IP アドレスは、それぞれリモート サーバーのサーバー名および IP アドレスに相当します。

HOME および JAVA\_HOME プロパティがグローバルレベルで設定されていることを確認します。

下図は、ローカルとリモートの WebLogic Server を設定する方法について示しています。ただし、リモート サーバーの場合、ADDRESS=<IP\_address> プロパティが追加されることに注意してください。

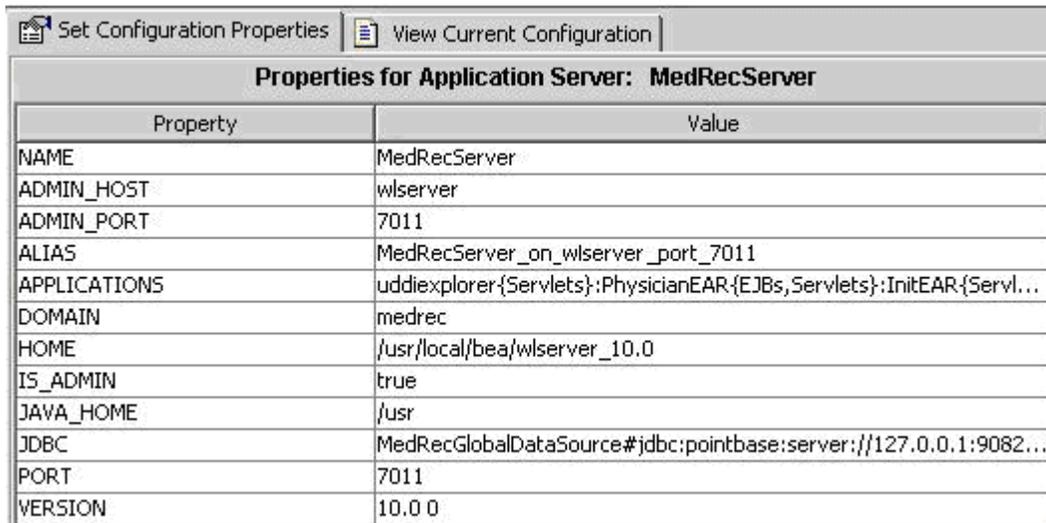
```
ADDRESS=15.75.27.109
```

または

```
ADDRESS=hardey.hp.com
```

1 つのローカルと 1 つのリモートの WebLogic Server を設定している場合、設定は、リモート ノードの検出完了後、ローカルおよびリモート ノードについて、次のようになります。

図 22 ローカル ノードの設定



Property	Value
NAME	MedRecServer
ADMIN_HOST	wlserver
ADMIN_PORT	7011
ALIAS	MedRecServer_on_wlserver_port_7011
APPLICATIONS	uddiexplorer{Servlets};PhysicianEAR{EJBs,Servlets};InitEAR{Servlets}
DOMAIN	medrec
HOME	/usr/local/bean/wlserver_10.0
IS_ADMIN	true
JAVA_HOME	/usr
JDBC	MedRecGlobalDataSource#jdbc:pointbase:server://127.0.0.1:9082...
PORT	7011
VERSION	10.0.0

図23 リモート ノードの設定

Properties for Application Server: MedRecServer	
Property	Value
NAME	MedRecServer
ADDRESS	app.spi.hp.com
ADMIN_HOST	app.spi.hp.com
ADMIN_PORT	7011
ALIAS	MedRecServer_on_app.spi.hp.com_port_7011
APPLICATIONS	uddiexplorer{Servlets};PhysicianEAR{EJBs,Servlets};InitEAR{Servlet...
DOMAIN	medrec
HOME	/usr/local/bean/wlserver_10.0
IS_ADMIN	true
JAVA_HOME	/usr
PORT	7011
VERSION	10.0.0

リモートシステムは、ローカルシステムと同様に設定されますが、プロパティ ADDRESS=app.spi.hp.com が含まれます。

- 7 SPI によるリモート ノードの監視を確認するため、以下のコレクタ コマンドを実行します。

```
wasspi_perl wasspi_ca -m 5 -x print=on -prod wls
```

リモートおよびローカル ノードからそれぞれ出力と情報を表示できます。

例: メトリック: WLSSPI\_0005, Server: "MedRecServer"、インスタンス: "MedRecServer"、値: 54.0、ホスト: <リモート ノード>、ポート: 7011

## HP Performance Agent を統合する (オプション)

HP Performance Agent の収集は、リモートシステムではなく、管理対象ノードで行われます。PerfView を使用していて、リモートシステムのデータのグラフを作成したい場合は、ローカル管理対象ノードで HP Performance Agent の統合が有効であることを確認する必要があります。

## ローカル ノードを WebLogic ノード グループに割り当てる

ローカル管理対象ノードを WebLogic ノード グループに割り当てます。リモートシステムと同じバージョンの WebLogic Server のノードに設定を配布しようとしていることを確認してください。

## ログファイル用のリモート監視の設定 (オプション)

リモートシステムのログファイルの監視は、以下の両方の条件に当てはまる場合にサポートされます。

- 1 そのリモートシステム上で HP Operations エージェントが動作している
- 2 システムは、ログファイルをローテーションしても、ファイル名は変更しない。

ログファイル監視を設定するには、HPOM コンソールで WLS SPI のログファイル ポリシーをコピーします。次に、コピーしたログファイル ポリシーを設定し、リモートシステムに割り当てた後、これを配布します。

## リモート ログファイルのログファイル ポリシーの設定

ログファイル ポリシーを設定するには、以下の手順を実行します。

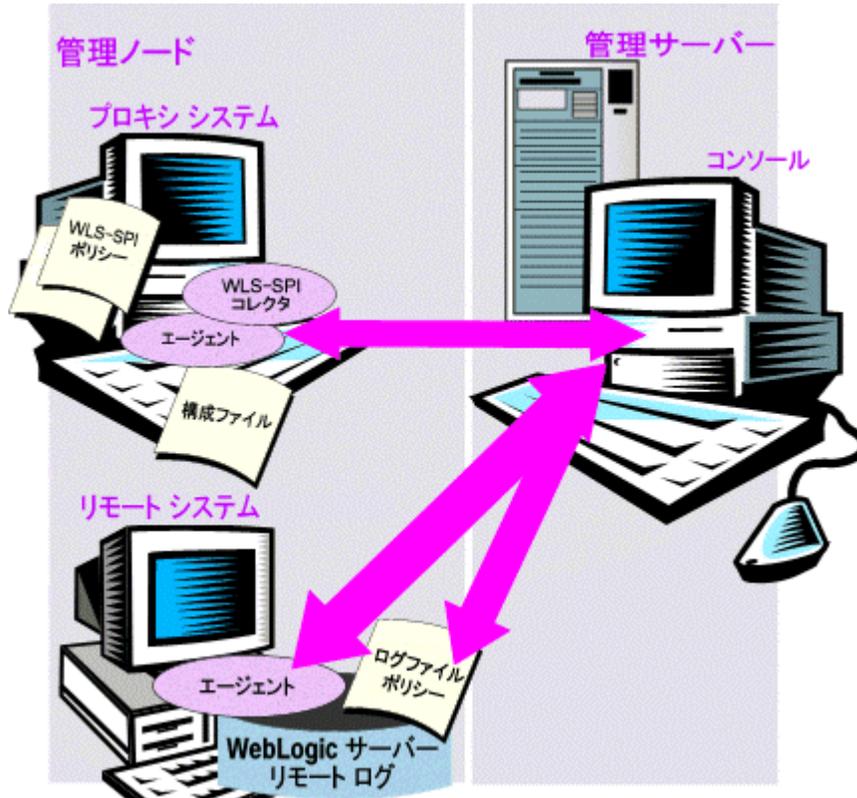
- 1 SPI for WebLogic Server グループの WLSSPI-Logfiles の下にある WebLogic ログファイル ポリシーのコピーを選択します。例: [SPI for WebLogic Server] → [WLSSPI-Logfiles] → **WLSSPI Error Log**
- 2 ドロップダウン リストから [Edit...] を選択します。

ドロップダウン リストが  のように表示されます。

[Edit LogFile\_EntryPolicy “WLSSPI Error Log”] ウィンドウが表示されます。

- 3 [Source] タブをクリックします。
- 4 [ログファイル] テキスト ボックスに、リモート システム上のログファイルの場所を入力します。  
<パス>/<ファイル名>
- 5 リモートの HPOM 管理対象ノードにログファイル ポリシーを割り当てて配布します。

ログファイル ポリシーと HP Operations エージェントの両方がリモート システム上に存在しているため、WebLogic Server のログファイルを監視できます。



## リモート監視の制限

リモート監視には、以下の制限があります。

- WebLogic SPI と HP Operations エージェント は、ログがローテーションするたびにログファイル名が変更される場合には、ログファイルへのアクセスをサポートしていません。
- リモート システム上に HP Operations エージェントが存在しない場合、リモート システム上の WebLogic のログファイルの監視はできません。

- HPOM の登録ツールでは、WebLogic SPI ツールをリモート システムで実行することはできません。

## ライセンス数に対する WebLogic SPI ノードの確認

HPOM レポート ユーティリティを使用して、管理対象ノードにインストールしたポリシーの数を確認できます。管理対象ノードあたりのポリシー数を調べると、管理対象のシステム全般に一貫してポリシーをインストールしたことが分かります。さらに、このレポートを実行することにより、購入したライセンス数がレポートの結果と矛盾していないことも確認できます。

レポートを実行するには、以下の手順を実行します。

- 1 HPOM コンソールで、チェックしたいノードまたはノード グループを選択します。
- 2 [アクション] メニューから、[ユーティリティ] → [レポート ...] を選択します。
- 3 [レポート] ウィンドウでリストされたレポートの中から、[WLSSPI License Check] を選択します。
- 4 出力先を選択し、[OK] をクリックします。



# 第6章 HP のレポート作成およびグラフ作成ソリューションと WebLogic SPI との統合

WebLogic SPI を、以下の HP のレポート作成およびグラフ作成製品（別途ご購入ください）と統合できます。

- **HP Reporter: Reporter** は、管理用の Web ページ レポートを生成します。このレポートは、履歴と傾向を表す情報を示します。HPOM に組み込まれている Reporter のバージョンとは異なります。

WebLogic SPI は、Reporter とともに動作してさまざまなレポートを生成し、WebLogic Application Server についての情報を整理して表示します。

WebLogic SPI を Reporter に統合する方法については、[HP Reporter との統合 \(95 ページ\)](#) を参照してください。Reporter に WebLogic SPI を統合すると、Reporter は毎晩、設定済み管理対象ノードでの WebLogic Application Server のパフォーマンスと可用性を示すレポートを生成します。

- **HP Performance Agent: HP Performance Agent** は、システムの現在および過去のリソース データに関して、収集、要約、タイムスタンプの追加、および警告状態の検出を行います。パフォーマンス、リソース、エンドツーエンドのトランザクション応答時間の測定値を提供するとともに、ネットワークおよびデータベース測定情報もサポートします。HP Performance Agent についての詳細は、『*HP Performance Agent for UNIX User's Manual*』を参照してください。

HP Performance Agent を使用する場合、WebLogic SPI は自動的に HP Performance Agent を使用します。HPOM に組み込まれている HP Operations のサブエージェント CODA (HPOM に含まれ、HP Performance Agent をサポートしない) を使用する場合は、管理対象ノードを設定する必要があります。詳細については、[CODA との統合 \(55 ページ\)](#) を参照してください。

- **HP Performance Insight: HP Performance Insight** は、データの収集、処理、およびレポートを行うネットワーク管理システムです。データはレポートの生成に使用されます。HP Performance Insight の詳細は、『*HP Performance Insight 管理ガイド*』を参照してください。WebLogic SPI レポートの詳細と、HP Performance Insight への WebLogic SPI の統合方法については、『*Application Server Report Pack User Guide*』を参照してください。

- **HP Performance Manager: HP Performance Manager** は、WebLogic SPI メトリックのグラフ作成機能を提供します。HPOM に組み込まれている HP Performance Manager のバージョンとは異なります。

WebLogic SPI を HP Performance Manager に統合する方法については、[HP Performance Manager との統合 \(98 ページ\)](#) を参照してください。HP Performance Manager に WebLogic SPI を統合すると、翌日からグラフを使用できます。

## HP Reporter との統合

Reporter に統合する前に、WebLogic SPI を設定する必要があります（第 3 章「[WebLogic SPI の設定](#)」を参照）。

WebLogic SPI レポート パッケージをアップグレードする場合、新しいバージョンをインストールする前に旧バージョンを削除する必要があります。WebLogic SPI レポート パッケージの削除方法についての詳細は、[新しいレポート パッケージのインストール \(オプション\) \(30ページ\)](#) を参照してください。

Reporter が動作する Windows システムに WebLogic SPI レポート パッケージをインストールする必要があります。レポート パッケージをインストールするには、以下のステップを実行します。

- 1 Windows のクライアント システムで、DVD-ROM ドライブに **Smart Plug-ins DVD-ROM** (レポート パッケージを含むもの) を挿入し、Windows エクスプローラ上で、以下のファイルをダブルクリックします。

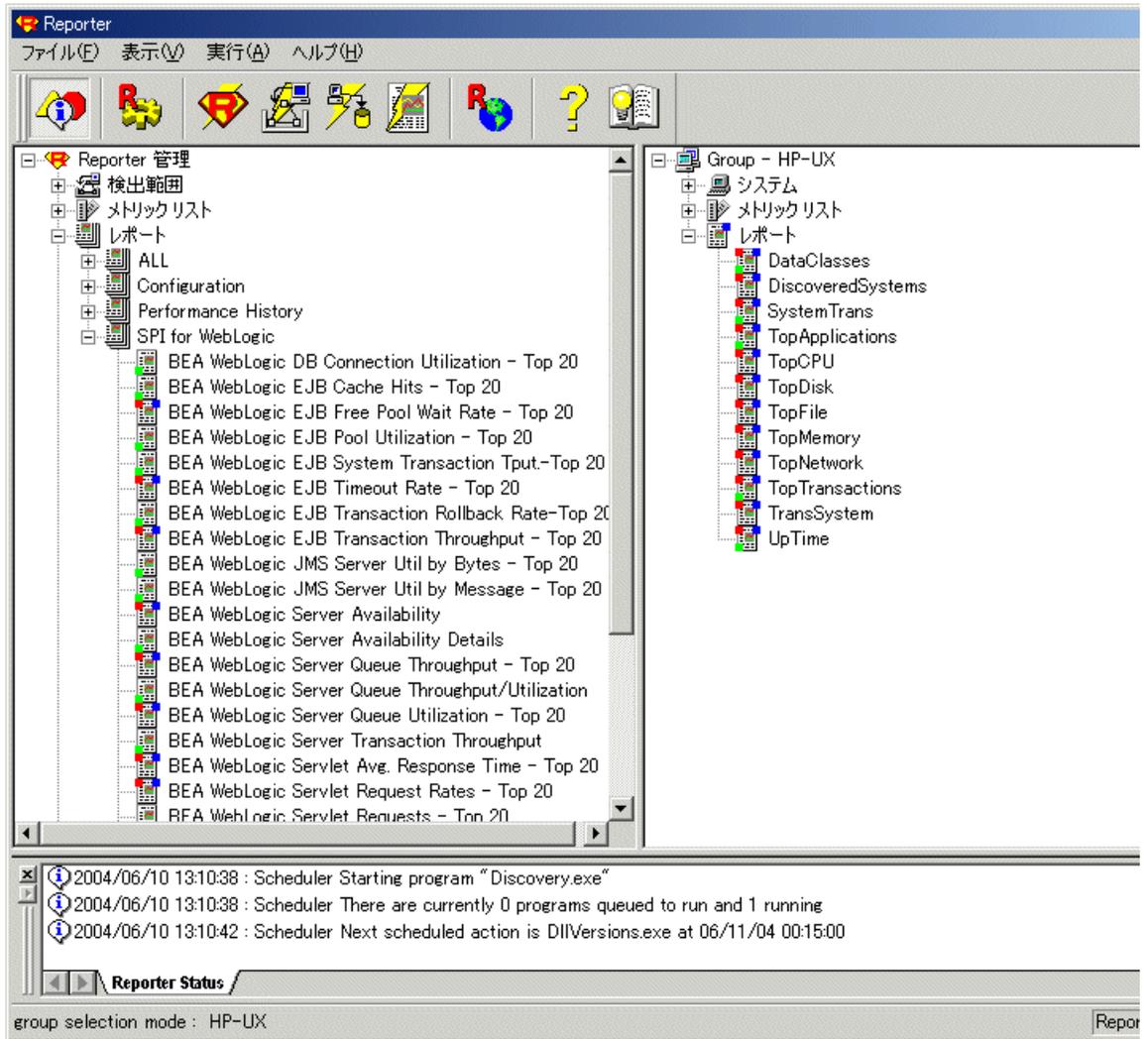
**WINDOWS\OV\_REPORTER\WEBLOGIC\_SPI\WLSSPI-Reporter.msi**

- 2 表示される指示に従います。
- 3 Reporter のステータス ペイン (後の図を参照) で、Reporter 設定への変更を確認します。



Windows 2000 の管理対象ノードの場合、インストール中に、システム上で旧バージョンのインストーラが検出されたことを示すエラー メッセージが表示されることがあります。このメッセージは無視してかまいません。そのまま続行してください。

[Reporter Status] ペイン ([Reporter] ウィンドウの一番下) には、実行中のプログラムと発生したエラーに関する情報が表示されます。[Reporter Status] ペインで、Reporter が WebLogic SPI レポートとともに更新されたことを確認できます。



対象となるノードに WebLogic SPI レポートを割り当てる方法は、Reporter のヘルプで説明されています。ヘルプを表示するには、Reporter のメイン ウィンドウの左側のパネルの [レポート] または [検出されたシステム] を選択し、右クリックします。表示されたサブメニューから [レポート ヘルプ] または [検出されたシステム ヘルプ] を選択します。「[検出されたシステム グループ] にレポート定義を割り当てるには」のトピックを参照してください。

- 4 必要に応じて、レポートを割り当てることによりグループと単一システム レポートを追加します。(詳細については、『Reporter ヘルプ』およびオンラインの『コンセプト ガイド』を参照してください)。

▶ グループと単一システムの WebLogic SPI レポートでは、完全な名前ですべてシステムを指定する必要があります。たとえば、abc.xyz.com は受け付けられますが、abc は受け付けられません。

WebLogic SPI を HP Reporter または HP Performance Insight に統合するときに生成されたレポートのリストについては、『*HP Operations Smart Plug-in for WebLogic Server リファレンス ガイド*』を参照してください。



ブラウザは、レポートが大量であり、そのためユーザーがレポートを HTML で表示することができない場合、クラッシュします。回避策は、レポートを pdf で表示することです。

## HP Performance Manager との統合

WebLogic SPI を HP Performance Manager に統合するには、以下の手順を実行します。

- 1 WebLogic SPI をインストールし、設定します。GRAPH\_URL プロパティを設定したことを確認します。GRAPH\_URL プロパティについての詳細は、[プロパティの定義 \(139 ページ\)](#) を参照してください。
- 2 WebLogic SPI グラフ作成パッケージをアップグレードする場合、新しいバージョンをインストールする前に旧バージョンを削除する必要があります。WebLogic SPI グラフ作成パッケージの削除についての詳細は、[新しいグラフ作成パッケージのインストール \(オプション\) \(31 ページ\)](#) を参照してください。
- 3 グラフ作成パッケージをインストールします。

Windows システムで HP Performance Manager を実行している場合、以下のステップを実行します。

- a DVD-ROM ドライブに Smart Plug-ins DVD-ROM (グラフ作成パッケージを含むもの) を挿入し、Windows エクスプローラ上で、以下のファイルをダブルクリックします。

```
WINDOWS\OV_PM\WEBLOGIC_SPI\WLSSPI-OVPM.msi
```

- b 表示される指示に従います。

HPOM 管理サーバー以外の HP-UX システムで HP Performance Manager を実行している場合、以下のステップを実行します (HP Performance Manager を HPOM 管理サーバーにインストールしている場合は、SPI ソフトウェアのインストール時に自動的に必要なファイルがインストールされています)。

- Smart Plug-ins DVD-ROM (グラフ作成パッケージを含むもの) をマウントし、以下のコマンドを入力します。

```
swinstall -s <mount_point>/HPUX/  
HP_Operations_Smart_Plug-ins_HPUX.depot WLSSPI-GRAPHS
```

HPOM 管理サーバー以外の Solaris システムで HP Performance Manager を実行している場合、以下のステップを実行します (HP Performance Manager を HPOM 管理サーバーにインストールしている場合は、SPI ソフトウェアのインストール時に自動的に必要なファイルがインストールされています)。

- Smart Plug-ins DVD-ROM (グラフ作成パッケージを含むもの) をマウントし、以下のコマンドを入力します。

```
/usr/sbin/pkgadd -d <mount_point>/SOLARIS/  
HP_Operations_Smart_Plug-ins_SOLARIS.sparc HPOvSpiWlsG
```

- 4 WebLogic Server メトリックのグラフを作成するには、データ ソース名 WLSSPI\_METRICS を使用します。

グラフの表示方法については、HP Performance Manager のマニュアルを参照してください。統合した翌日から、グラフを表示できます。



グラフ作成パッケージをアンインストールするには、[WebLogic SPI のアップグレード \(27 ページ\)](#) のステップに従います。

## 警告通知条件を示すグラフの表示

WebLogic SPI は、グラフ作成という目的のために、タイプ別にメトリックを整理しています。この後のセクションの表に示すメトリックについてのメッセージが生成されると、そのメトリック値とその他のメトリック値のチャートを表示できます。

警告通知条件 (オペレータ起動アクションが WebLogic SPI モニタ ポリシーを用いて定義されています) に関連するグラフを表示するには、以下のステップを実行します。

- 1 **HPOM** メッセージ ブラウザでメッセージ テキストをダブルクリックします。 [メッセージのプロパティ] ウィンドウが表示されます。
- 2 **[アクション起動]** をクリックします。

対象のメトリックについての **WebLogic SPI** グラフが表示されます。このメトリックの値は、同じグループに含まれる他のメトリックの値とともにチャート化されます。

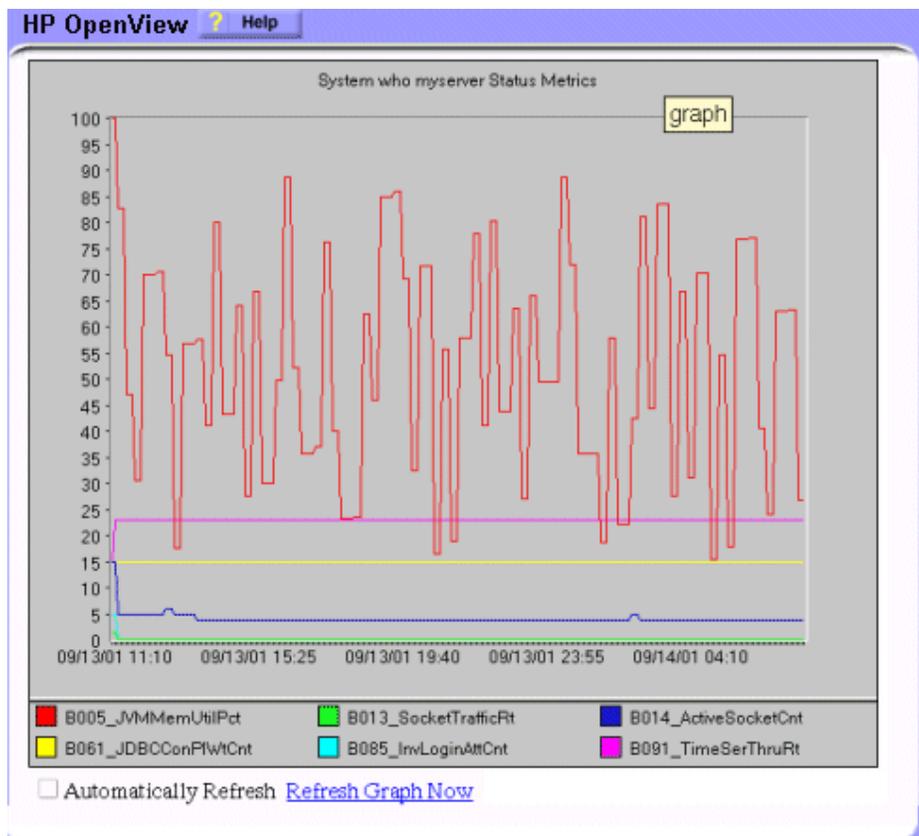
## 過去/現在の状態を示すグラフの表示

**View Graphs** ツールを使用すると、利用可能な 4 つのグラフはいずれも手動で生成できます。以下の手順を実行します。

- 1 **HPOM** コンソールで、**[Integrations]** → **[HPOM for Unix Operational UI]** を選択します。
- 2 グラフを表示する管理対象ノードを選択します。
- 3 このノードを右クリックします。
- 4 **[スタート]** → **[SPI for WebLogic Server]** → **[SPI Admin]** → **[View Graphs]** を選択します。  
[View Graphs Output] ウィンドウが開きます。

## グラフを生成するオペレータ アクションを用いた Web ページ表示の起動

Performance Manager のグラフは、[メッセージブラウザ] ウィンドウの [アクション] タブ内で [アクション起動] をクリックすることにより、ほとんどの WebLogic SPI 警告通知メッセージから生成できます。オペレータ アクションにより Web ブラウザが起動し、そのメッセージを生成したメトリック、およびその他の関連するメトリックのグラフが表示されます。



### 日付の範囲の指定

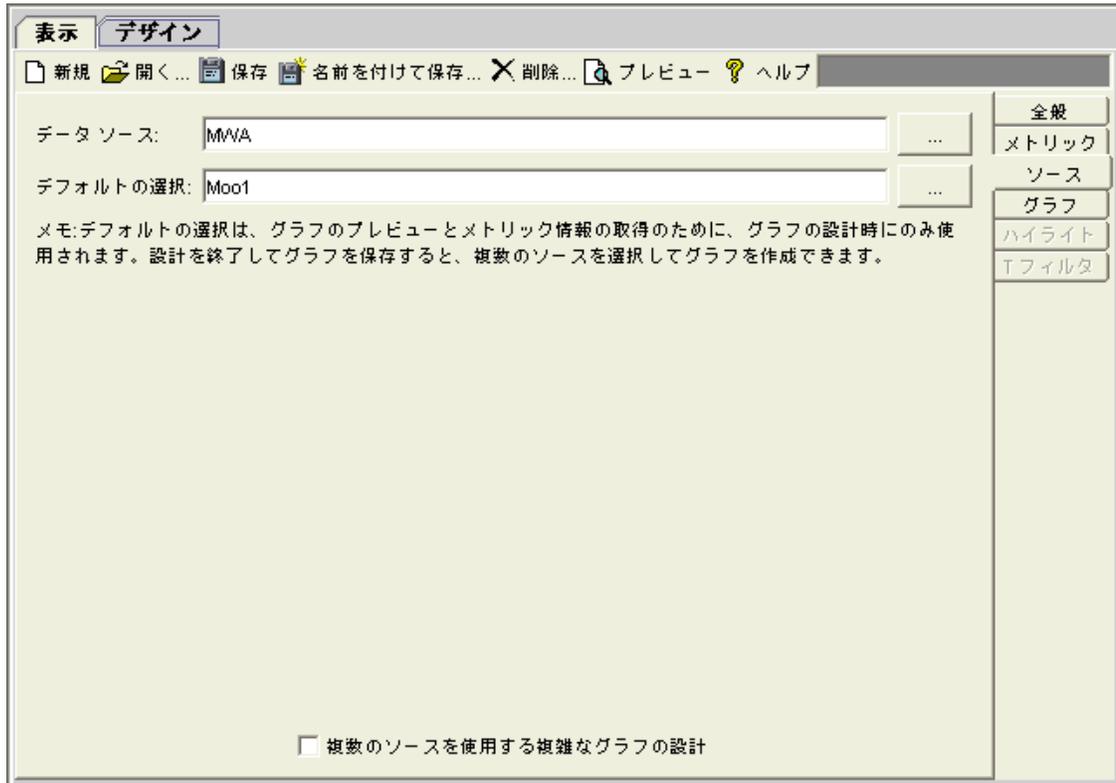
Web ページの表示内で、1 日、1 週間、1 ヶ月、または 1 年という日付の範囲を指定できます。表示設定の変更手順については、オンライン ヘルプを参照してください。

### 統合の例

以下の例では、各 SERVERNAME の METRICID の各 OBJECTNAME をレポートすることにより、データソースに格納されているマルチインスタンスデータをグラフ化する方法を示します。結果として、すべてのインスタンスの全データが 1 つのグラフでレポートされます。各 SERVERNAME のデータを別のグラフで表示することもできます。

この例では、HP Performance Manager の Java インタフェース オプションも使用します。

- 1 HP Performance Manager の [Java インタフェース] オプションを起動します。 [Performance Manager Java Interface] ウィンドウが表示されます。

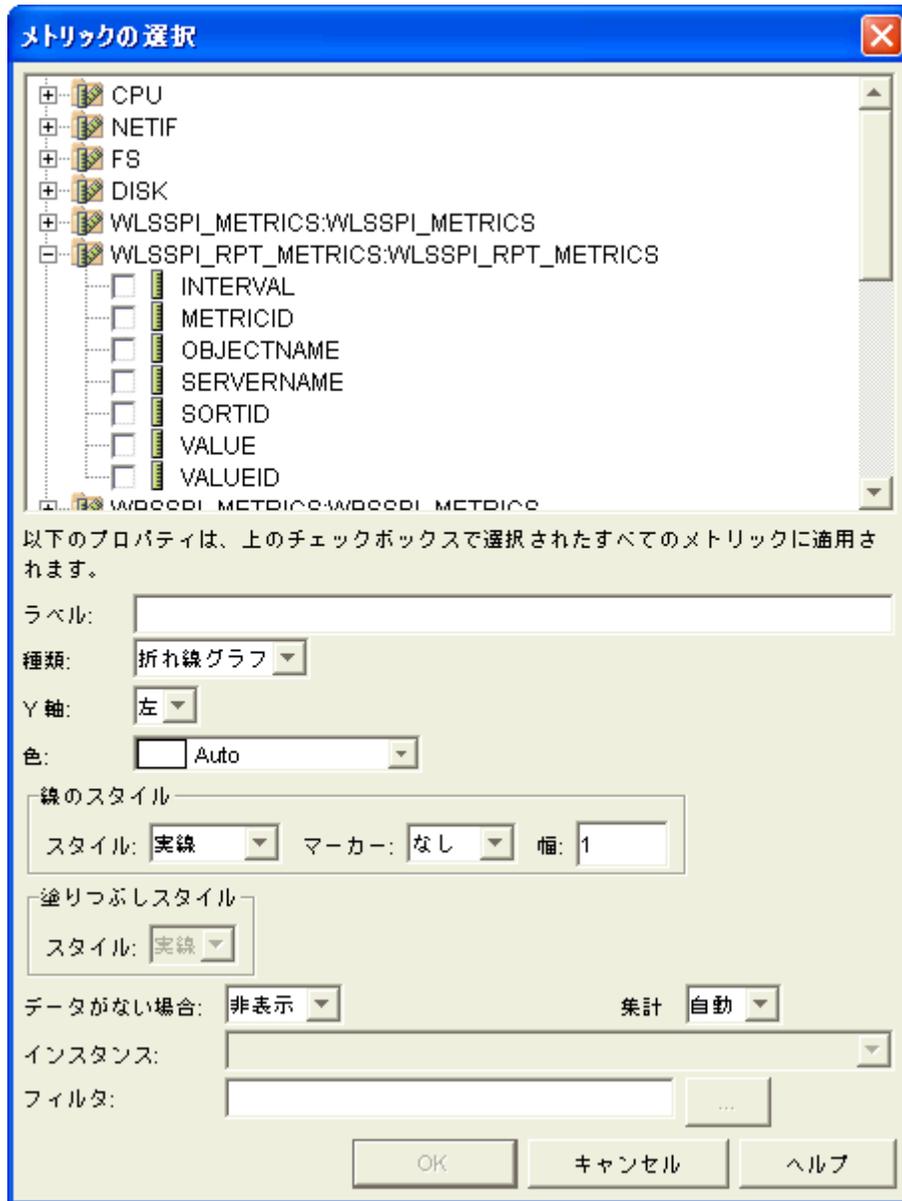


- 2 [Performance Manager Java Interface] ウィンドウで以下の手順を実行します。
  - a ウィンドウ上部の [表示] タブをクリックします。
  - b [表示] ペインで、[ソース] タブをクリックします。
  - c [データ ソース] ボックスの横にある [...] ボタンをクリックし、データ ソースを選択します。
  - d [デフォルトの選択] ボックスの横にある [...] ボタンをクリックし、データ ソースが属するノードを選択します。
- 3 ウィンドウ右側の [全般] タブをクリックします。



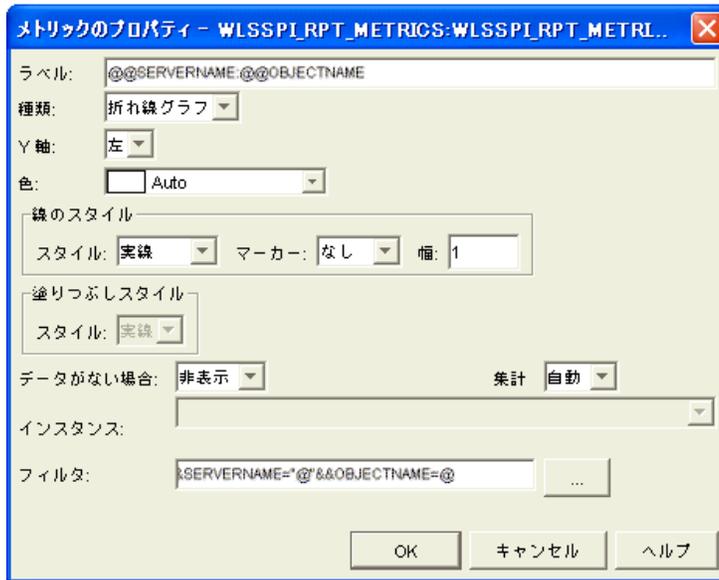
- 4 [全般] ペインで、以下の手順を実行します。
  - a [種類] ドロップダウン リストから **[折れ線グラフ]** を選択します。これで折れ線グラフが作成されます。
  - b [表示期間] を入力します。
  - c [ポイント間隔] ドロップダウン リストを使用して間隔を入力します。
  - d グラフのキーをアルファベット順に並べ替えたい場合は、[メトリックの表示順序] の **[ラベル (名前順)]** を選択します。

- 5 ウィンドウ右側の **[メトリック]** タブをクリックし、**[追加]** をクリックします。**[メトリックの選択]** ウィンドウが表示されます。

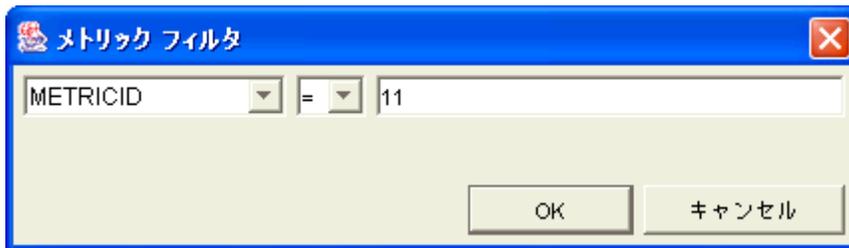


- 6 **[メトリックの選択]** ウィンドウで、以下の手順を実行します。
- [+]** をクリックし、**[WLSSPI\_RPT\_METRICS]** データ ソース オプション ツリーを展開します。
  - [VALUE]** チェックボックスをオンにします。
  - [OK]** をクリックします。

- 7 [メトリック]タブが選択されたウィンドウに **VALUE** が表示されます。**VALUE** が表示されている行を選択し、**[プロパティ]**をクリックします。[メトリックのプロパティ]ウィンドウが表示されます。



- 8 [メトリックのプロパティ]ウィンドウで、以下の手順を実行します。
- [ラベル]ボックスに、以下を入力します。
    - @@SERVERNAME:@@OBJECTNAME** (すべての **SERVERNAME** を表示するグラフを作成している場合)
    - @@OBJECTNAME** (1つの **SERVERNAME** を表示するグラフを作成している場合)
  - [マーカー]ドロップダウンリストで、[なし]以外のマーカーを選択します。
  - [データがない場合]ドロップダウンリストで、次のように選択します。
    - [前の値]**: データがデータソースから失われている場合、前の値を使用する
    - [ゼロ]**: データがデータソースから失われている場合、ゼロの値を使用する
  - [フィルタ]ボックスの横の **[...]** をクリックします。[メトリック フィルタ]ウィンドウが表示されます。



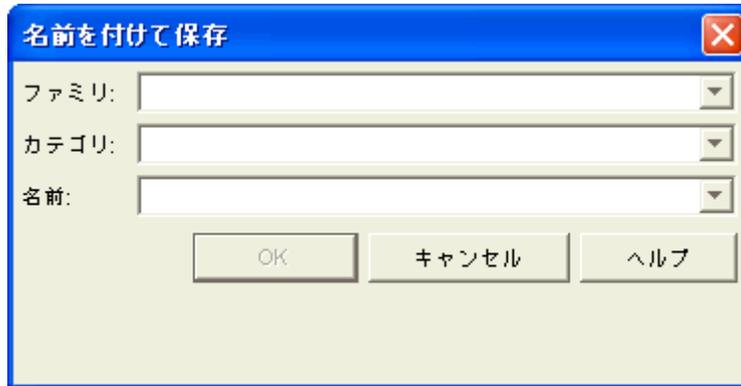
- 9 [メトリック フィルタ]ウィンドウで、以下の手順を実行します。
- 最初のドロップダウン リストから **[METRICID]** を選択します。
  - 2番目のドロップダウン リストから **=** を選択します (未選択の場合)。
  - ボックスにメトリック番号 (例: **11**)を入力します。
  - [OK]** をクリックします。
- 10 [メトリックのプロパティ]ウィンドウで、
- [フィルタ]ボックスに以下を追加します。

- **&&SERVERNAME=@&&OBJECTNAME=@@**: 1つのグラフですべての **SERVERNAME** と **OBJECTNAME** の組み合わせを表示する場合
- **&&SERVERNAME= “<server\_name>”&&OBJECTNAME=@**: 1つのグラフで、マルチインスタンスメトリックに関連付けられた 1つの **SERVERNAME** とすべての **OBJECTNAME** を表示する場合

[フィルタ] ボックスを編集できない場合は、グラフ テンプレート ファイルでこの項目を編集できます。詳細については、[手順13](#)を参照してください。

b **[OK]** をクリックします。

11 ウィンドウ上部の **[名前を付けて保存]** をクリックします。[名前を付けて保存] ウィンドウが表示されます。



12 [名前を付けて保存] ウィンドウで、以下の手順を実行します。

- a [ファミリー] ボックスにファミリー (例: **WLSSPI\_Graphs**) を入力します。ファミリー名は、グラフを編成するためのグループとして使用されます。
- b グラフを一意に識別する名前 (例: **metric\_11**) を [名前] ボックスに入力します。
- c [カテゴリ] ボックスへのテキストの入力は任意です。
- d **[OK]** をクリックします。グラフ テンプレート ファイル `VPI_GraphsUser<family>.txt` (例: `VPI_GraphsUserWLSSPI_Graphs.txt`) に情報が保存されます。

このウィンドウの詳細は、オンライン ヘルプを参照してください。

- 13 グラフ テンプレート ファイルを編集します。このファイルは、作業中の HP Performance Manager インスタンスのシステムの HPOM データ ディレクトリにあります。グラフ ファイルは以下のようなものになります。

```
*****
#* OpenView Performance Manager
#* user Defined Graph Templates
#* Last Updated: 07/25/04 04:31_30 AM by [1.2.3.4] moo1
*****
FAMILY: WLSSPI_Graphs
GRAPH: Metric11
GRAPHBACKGROUND: None
DATERANGE: 1 day
GRAPHMULTIPLEGRAPHS: Yes
POINTSEVERY: raw
DATASOURCE: mwa
SYSTEMNAME: moo1

CLASS: WLSSPI_RPT_METRICS:WLSSPI_RPT_METRICS
METRIC: VALUE
FILTER: METRICID=11&&SERVERNAME=@&&OBJECTNAME=@
LABEL: @@SERVERNAME:@@OBJECTNAME
COLOR: Auto
MARKER: rectangle
MISSINGDATA: previous
END_GRAPH:

#*-----
GRAPH: Metric11_2
GRAPHBACKGROUND: None
DATERANGE: 1 day
GRAPHMULTIPLEGRAPHS: Yes
POINTSEVERY: raw
DATASOURCE: mwa
SYSTEMNAME: moo1

CLASS: WLSSPI_RPT_METRICS:WLSSPI_RPT_METRICS
METRIC: VALUE
FILTER: METRICID=11
LABEL: @@SERVERNAME:@@OBJECTNAME
COLOR:Auto
MARKER: rectangle
MISSINGDATA: previous
END_GRAPH:
```

グラフ テンプレート ファイルには、1 つのグラフの複数のデータ セットを入れることができます。

- a 各グラフの最初のセクションの末尾に **SUMFROMRAW:** を追加します (上記の例では **SUMFROMRAW:** を **SYSTEMNAME: moo1** の後に追加します)。これにより、HP Performance Manager はデータ ソースからデータを要約でき、GUI を使用して追加できなくなります。
- b [メトリックのプロパティ] ウィンドウの [フィルタ] ボックスを編集できなかった場合は、**FILTER** フィールドを編集します。
- c ファイルを保存します。グラフ ファイルは次のようになります

```

*****
#* OpenView Performance Manager
#* user Defined Graph Templates
#* Last Updated: 07/25/04 04:31_30 AM by [1.2.3.4] moo1
*****
FAMILY: WLSSPI_Graphs
GRAPH: Metric11
GRAPHBACKGROUND: None
DATERANGE: 1 day
GRAPHMULTIPLEGRAPHS: Yes
POINTSEVERY: raw
DATASOURCE: mwa
SYSTEMNAME: moo1
SUMFROMRAW:

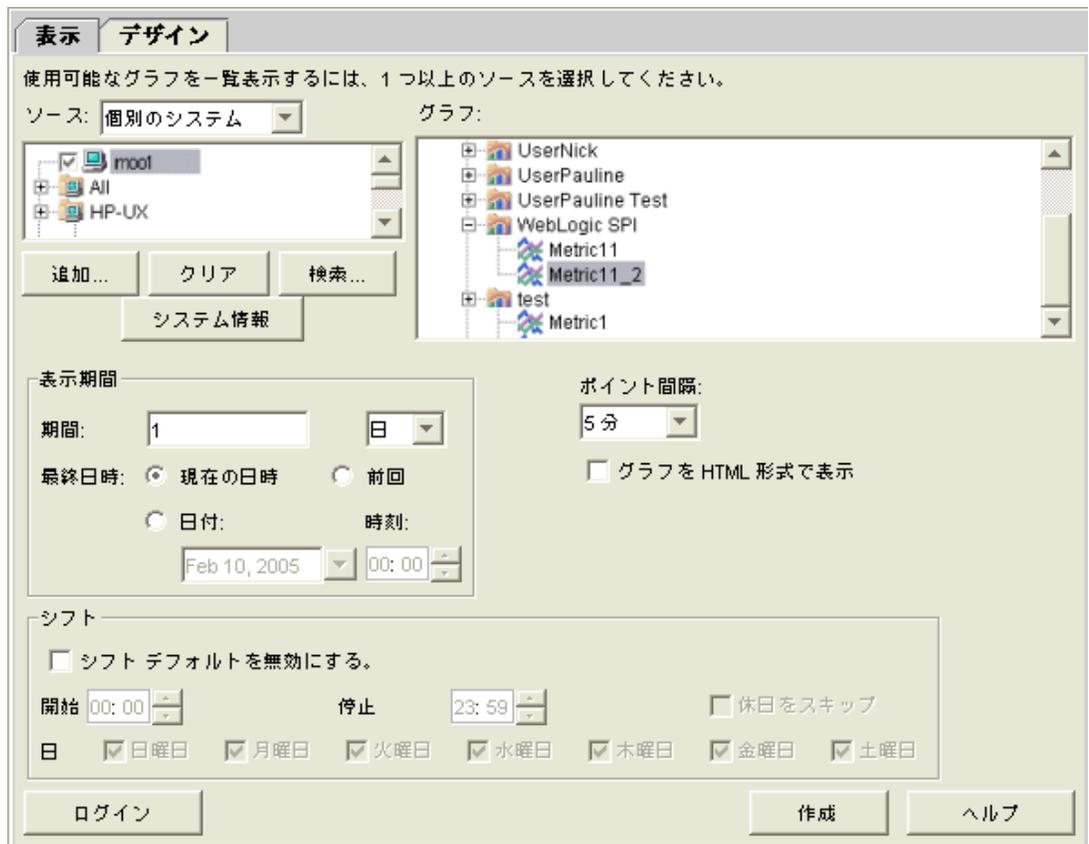
CLASS: WLSSPI_RPT_METRICS:WLSSPI_RPT_METRICS
METRIC: VALUE
FILTER: METRICID=11&&SERVERNAME=@&&OBJECTNAME=@
LABEL: @@SERVERNAME: @@OBJECTNAME
COLOR: Auto
MARKER: rectangle
MISSINGDATA: previous
END_GRAPH:

#*-----
GRAPH: Metric11_2
GRAPHBACKGROUND: None
DATERANGE: 1 day
GRAPHMULTIPLEGRAPHS: Yes
POINTSEVERY: raw
DATASOURCE: mwa
SYSTEMNAME: moo1
SUMFROMRAW:

CLASS: WLSSPI_RPT_METRICS:WLSSPI_RPT_METRICS
METRIC: VALUE
FILTER: METRICID=11&&SERVERNAME=@&&OBJECTNAME=@
LABEL: @@SERVERNAME: @@OBJECTNAME
COLOR:Auto
MARKER: rectangle
MISSINGDATA: previous
END_GRAPH:

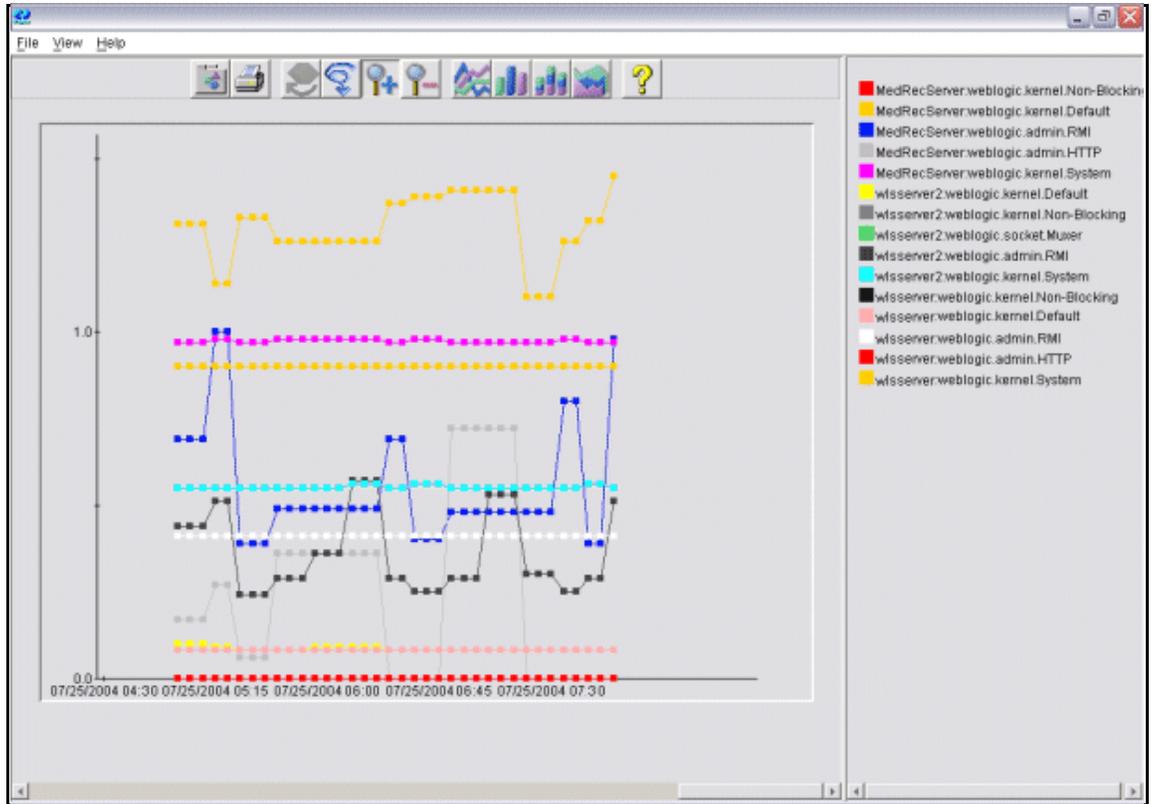
```

- 14 [Performance Manager Java Interface] ウィンドウで [表示] タブをクリックします。



- 15 [表示] タブ ウィンドウで、以下の手順を実行します。
- a データ ソースが属するサーバーに移動します ([ソース] ボックスの下のボックスに示されています)。
  - b [グラフ] ボックスで、グラフのファミリーに移動し、作成したグラフを選択します。
  - c [表示期間] ダイアログ ボックスと [ポイント間隔] ボックスに情報を入力します。
  - d [表示] をクリックします。グラフが表示されます。図24を参照してください。

図24 グラフ



[デザイン] タブからグラフを編集した場合は、**SUMFROMRAW:** エントリがグラフ テンプレート ファイルから削除されます。グラフ テンプレート ファイルを編集して、このエントリを再入力する必要があります。

16 SPI からグラフ作成を有効にします。

- a HPOM コンソールで、[Integrations] → [HPOM for Unix Operational UI] を選択します。
- b グラフを生成するノードを選択します。
- c このノードを右クリックします。
- d [スタート] → [JMX Metric Builder] → [WLSSPI] → [UDM Graph Enable] を選択します。



# 第7章 トラブルシューティング

## Self-Healing Info ツール

Self-Healing Info ツールは SPI に関するトラブルシューティング データを収集し、ファイルに格納します。このファイルは、サポートを受ける際の支援情報として、HP サポートに提出できます。このツールの詳細は、[Self-Healing Info \(59ページ\)](#) を参照してください。



Self-Healing Info ツールで作成されるファイルは、一部の Windows 管理対象ノードでは隠しファイルになる場合があります。ファイルが表示されない場合は、Windows エクスプローラを開き、[ツール] メニューから [フォルダ オプション] を選択します。[表示] タブをクリックします。[ファイルとフォルダの表示] の下で、[すべてのファイルとフォルダを表示する] を選択します。

# ログ記録

## 管理サーバー

以下のログ ファイルは、管理サーバーにあります (通常、`<OvInstallDir%>/` は `/var/opt/OV` です)。

ファイル タイプ	ログ
ファイル名	<code>&lt;OvInstallDir%&gt;/log/wlsspi &lt;managed_node&gt;_disc_server.log</code>
説明	WLSSPI の検出ポリシーによって各管理対象ノードの管理サーバーの設定に行われた更新を記録します。ログ ファイルは、検出ポリシーが管理対象ノード上で実行されるたびに上書きされます。このファイルへのログ記録は、常に有効になっています。

## 管理対象ノード

ログ記録用の以下のファイルが UNIX または Windows 上で実行している管理対象ノードに見つかりました (通常は、`<Agent_Dir>/` は、UNIX の場合、`/var/opt/OV/` であり、Windows の場合、`\Documents and Settings\All Users\Application Data\HP\HP BTO Software\`)。

ディレクトリ	<code>&lt;Agent_Dir&gt;/wasspi/wls/log/wasspi_perl.log</code> (アーカイブ ファイルのファイル名には 1 桁の数字が追加されます)
説明	HP サポート担当者によってデバッグに使用されるファイル。このファイルには、Perl ログ (設定、検出、および収集) に関する情報があります。デフォルトでは、エラー メッセージのみを表示できます。すべての種類のメッセージ (情報、警告、およびエラー) を表示するには、 <b>Start Tracing</b> ツールを実行します。このトレース記録を停止するには、 <b>[Stop Tracing]</b> ツールを実行します。これらのツールの使用方法については、 <a href="#">Start/Stop Tracing (60 ページ)</a> を参照してください。サイズ 10MB の 3 つのアーカイブされたバージョンが保持されます。
ディレクトリ	<code>&lt;Agent_Dir&gt;/wasspi/wls/log/Discovery.log</code> (アーカイブ ファイルのファイル名には 1 桁の数字が追加されます)
説明	HP サポート担当者によってデバッグに使用されるファイル。このファイルには、Java 検出ログに関する情報があります。デフォルトでは、エラー メッセージのみを表示できます。すべての種類のメッセージ (情報、警告、およびエラー) を表示するには、 <b>Start Tracing</b> ツールを実行します。このトレース記録を停止するには、 <b>[Stop Tracing]</b> ツールを実行します。これらのツールの使用方法については、 <a href="#">Start/Stop Tracing (60 ページ)</a> を参照してください。サイズ 10MB の 3 つのアーカイブされたバージョンが保持されます。

ディレクトリ	<Agent_Dir>/wasspi/wls/log/Collector.log (アーカイブ ファイルのファイル名には 1 桁の数字が追加されます)
説明	HP サポート担当者によってデバッグに使用されるファイル。このファイルには、CollectorServer の Java Collector ログに関する情報があります。デフォルトでは、エラー メッセージのみを表示できます。すべての種類のメッセージ (情報、警告、およびエラー) を表示するには、Start Tracing ツールを実行します。このトレース記録を停止するには、[Stop Tracing] ツールを実行します。これらのツールの使用方法については、Start/Stop Tracing (60ページ) を参照してください。サイズ 10MB の 3 つのアーカイブされたバージョンが保持されます。
ディレクトリ	<Agent_Dir>/wasspi/wls/log/CollectorClient.log (アーカイブ ファイルのファイル名には 1 桁の数字が追加されます)
説明	HP サポート担当者によってデバッグに使用されるファイル。このファイルには、CollectorClient の Java Collector ログに関する情報があります。デフォルトでは、エラー メッセージのみを表示できます。すべての種類のメッセージ (情報、警告、およびエラー) を表示するには、Start Tracing ツールを実行します。このトレース記録を停止するには、[Stop Tracing] ツールを実行します。これらのツールの使用方法については、Start/Stop Tracing (60ページ) を参照してください。サイズ 10MB の 3 つのアーカイブされたバージョンが保持されます。

## 検出プロセスのトラブルシューティング

**問題:** WLSSPI 検出ポリシーが JDBC for WebLogic Application Server の検出に失敗します

**解決策:** アプリケーション サーバーのプロパティを編集して、JDBC URL にポート番号を入れます。

例: SERVER1\_JDBC=examples-demo#jdbc:pointbase:server://122.0.0.1:9082/demo#examples-dataSource-demoPool#122.0.0.1#demo

**問題:** WLSSPI Discovery ポリシーが WebLogic SPI 設定の検出と更新を自動的に行いません。

**解決策:**

- 1 検出されない管理対象ノードのメッセージ ブラウザでエラーの有無を確認します。エラー メッセージが表示されていれば、その指示に従います。
- 2 WebLogic アプリケーション サーバーが管理対象ノードにインストールされていることを確認します。アプリケーション サーバーがインストールされていない場合、アプリケーション サーバーをインストールし、第 3 章「WebLogic SPI の設定」で示されている設定タスクを実行します。
- 3 WebLogic アプリケーション サーバーの動作状況を確認します。アプリケーション サーバーが動作している必要があります。詳細については、アプリケーション サーバーのステータスを確認する (36ページ) を参照してください。
- 4 LOGIN および PASSWORD プロパティが設定されていること、および設定された WebLogic ユーザーに正しい権限があることを確認します。詳細については、第 3 章「WebLogic SPI の設定」を参照してください。
- 5 Java のホーム ディレクトリを確認します (Java ホーム ディレクトリの確認 (115ページ) を参照)。

- 6 WebLogic Server 9.x 以上を実行中であり、ドメイン設定ファイル (たとえば config.xml) をデフォルト ディレクトリに保存しなかった場合は、以下の手順のいずれかを実行します (デフォルト ディレクトリは <BEA\_Home\_Dir>/user\_projects/domains/<WebLogic\_Domain\_X>/ です。ここで、<BEA\_Home\_Dir> は、registry.xml ファイルのあるディレクトリ)。
  - Discover or Configure WLSSPI ツールを使用して、サーバーを設定します。または
  - Configure WLSSPI ツールを使用して、手動で ADMIN\_PORTS (ドメイン設定ファイルに一覧表示されている WebLogic Admin サーバーのポート番号) を設定します。それらの WebLogic Admin サーバーが動作しているノードに対して、グローバルの LOGIN と PASSWORD を設定する必要があります。
- 7 同一システムに WebLogic Server の複数バージョンを実行している場合、HOME プロパティを設定します。
- 8 UNIX 管理対象ノードで、BEA\_HOME\_LIST のディレクトリパス名にスペースが含まれていないことを確認します。現時点では、検出プロセスはディレクトリ名の中のスペースをサポートしていません。
- 9 Discover or Configure WLSSPI ツールが動作していないことを確認します。一度に 1 つのプロセスだけが、設定にアクセスできます。Discover or Configure WLSSPI が動作している場合、設定にアクセスする必要のある他のプロセス (検出プロセスなど) は、この設定が利用可能になるまで停止します。
- 10 以下の手順で、HPOM 管理サーバーが重複メッセージを抑制していることを確認します。
  - a HPOM コンソールから、[アクション] → [サーバ] → [設定] を選択します。[管理サーバの設定] ウィンドウが表示されます。
  - b [重複メッセージの抑制およびカウント] チェックボックスを探します。このチェックボックスが選択されている場合は、選択解除します。
- 11 次の手順で、HPOM 管理サーバーを再起動します。
  - a [ファイル] → [終了] を選択し、動作しているすべての HPOM GUI を停止します。
  - b HPOM 管理サーバー プロセスを停止します。次のように入力します。  
`/opt/OV/bin/ovstop opc ovoacomm`
  - c すべての HPOM 一時ファイルを削除します。すべての保留メッセージ (データベースに保存されていないメッセージ) とすべての保留アクション (自動アクション、オペレータ起動アクション、予定されているアクション、およびコマンド ブロードキャスト) は失われます。次のように入力します。  
`rm -f /var/opt/OV/share/tmp/OpC/mgmt_sv/*`
  - d HPOM 管理サーバー プロセスを再起動します。次のように入力します。  
`/opt/OV/bin/OpC/opcsv -start/opt/OV/bin/OpC/opcsv -status`
  - e HPOM GUI を再起動します。次のように入力します。opc
  - 問題: WLSSPI-Discovery ポリシーが、誤った情報を設定に追加しています。  
解決策:
    - a LOGIN と PASSORD が正しいことを確認します。詳細については、[WebLogic ログイン情報を収集する \(37 ページ\)](#) を参照してください。
    - b Java のホーム ディレクトリを確認します。詳細については、[Java ホーム ディレクトリの確認 \(115 ページ\)](#) を参照してください。
    - c 設定ファイルを更新します。
  - 問題: サービス検出がタイムアウトになりました。

**解決策:** Smart Plug-in のサービス検出は、OVDEPLOY ユーティリティに依存します。このユーティリティの場合、サービス検出タイムアウト設定が 10 分であり、ミリ秒では 60000 になります。そのため、プロセスの完了に 10 分以上かかると、検出が失敗します。Smart Plug-in サービス検出プロセスの完了に長くかかる場合は、管理サーバーで次のコマンドを実行することによってタイムアウトを大きくします。

```
ovconfchg -ns depl -set CMD_TIMEOUT <new_value>
```

例:

```
ovconfchg -ns depl -set CMD_TIMEOUT 120000
```



次のコマンドを実行することによって、現在のタイムアウト設定を表示できます。

```
ovconfget
```

- **問題:** アンインストール後に共通コンポーネントが残っています。

**解決策:** Smart Plug-in インストールは、SPI のインストールに加えて、その他の SPI に共通するプログラムもインストールします。このようなプログラムを以下に示します。

DSI2DDF (データ収集目的)

SPI-SHS-OVO (SPI 問題のトラブルシュート用の Self-Healing サービス)

これらのプログラムは、すべての SPI の共通コンポーネントであるため、Smart Plug-in をアンインストールしても自動で削除されません。ただし、すべての SPI をアンインストールしていて、これらのコンポーネントを削除する場合は、管理サーバーで次のコマンドを実行します。

```
swremove DSI2DDF
```

```
swremove SPI-SHS-OVO
```



SPI が残る場合は、上記のコンポーネントのいずれも削除しないでください。

## Java ホーム ディレクトリの確認

WLSSPI-Discovery ポリシーを正常に使用するには、Java のホーム ディレクトリを (Windows と UNIX の両方の管理対象ノード上で) 正しく設定する必要があります。

WLSSPI-Discovery ポリシーはこの情報を検索しますが、この情報を検出できない、またはその情報が正確でない場合、WLSSPI-Discovery ポリシーは完全には機能しません。

WLSSPI-Discovery ポリシーを実行する各管理対象ノード上で、以下のいずれかに該当することを確認します (WLSSPI-Discovery ポリシーによる優先順に記載)。

- 設定の中で、**JAVA\_HOME** が正しく定義されていること。設定を編集または表示するには、**Discover or Configure WLSSPI** ツールを実行します (手順については、[Discover or Configure WLSSPI \(59 ページ\)](#) を参照)。
  - a **Configuration Editor** で、**JAVA\_HOME** プロパティを設定します。設定エディタの使用方法については、[設定エディタ \(129 ページ\)](#) を参照してください。
  - b **[Save]** をクリックし、設定に加えた変更を保存します。一度保存した変更を、自動的に元に戻すことはできません。
  - c **[Finish]** または **[Next]** をクリックし、変更をすべて保存してエディタを終了します。

[Next] をクリックすると、[Confirm Operation] ウィンドウが表示されます。[OK] をクリックします。

 [Cancel] をクリックして、設定に変更を加えた場合には、それらの変更は管理サーバー上の設定に残ります。選択した管理対象ノードの設定への変更を行うには、それらのノードを選択し、Discover or Configure WLSSPI ツールを起動し、Discover ツールを起動し、設定エディタから [Next] をクリックしてから、[OK] をクリックします。

d JAVA\_HOME プロパティが追加または編集された管理対象ノード上で、Discover or Configure WLSSPI を起動します ([Launch Discover Tool] オプションを選択します)。ツールの更新を実行すると、サービス マップが更新されます。

- Java が各 BEA ホーム ディレクトリ (ファイル beahomelist に記載されている各ディレクトリ) にインストールされていること。
- JAVA\_HOME システム変数が正しく定義されていること。

Windows 管理対象ノードでは、以下の手順を実行します。

- a [スタート] メニューから、[設定] → [コントロール パネル] を選択します。
- b [システム] をダブルクリックします。
- c [詳細] タブを選択します。
- d [環境変数] を選択します。
- e [システム環境変数] のリストをスクロールします。JAVA\_HOME の値を確認します。JAVA\_HOME が存在しない場合、この変数が定義されていません。

UNIX 管理対象ノードでは、以下の手順を実行します。

- a `echo $JAVA_HOME` と入力します。
- b 出力を確認します。出力が返されない場合、JAVA\_HOME が定義されていません。

## 設定のトラブルシューティング

- **問題:** WebLogic SPI 設定に記載されている WebLogic 管理サーバーについての情報に欠落があるかまたは不正確です。

**解決策:** LOGIN と PASSORD が正しいことを確認します。詳細については、[WebLogic ログイン情報を収集する \(37 ページ\)](#) を参照してください。これが、リモート ノード上で動作している (HPOM 管理対象ノード上で動作していない) WebLogic 管理サーバーについての情報が誤っている場合の最も一般的な理由です。

- **問題:** サーバーが実行されているのに、メッセージ Server status is unknown (down) がメッセージブラウザに表示されます。

**解決策:** PORT、PROTOCOL、および PASSPHRASE の各プロパティを、必要に応じて正しく設定していることを確認します。

- PROTOCOL が t3 (非 SSL の場合) または t3s (SSL の場合) に設定されていることを確認します。
- アプリケーション サーバーが SSL を使用している場合、PORT が有効な SSL ポート番号に設定されていること、および PROTOCOL が t3s に設定されていることを確認します。
- アプリケーション サーバーが SSL を使用していない場合、PORT が有効な非 SSL ポート番号に設定されていること、および PROTOCOL が t3s に設定されていることを確認します。
- キーストアにパスワードが定義されている場合は、誤入力されている可能性もあるため、PASSPHRASE をリセットしてください。

## 収集のトラブルシューティング

- **問題:** メトリック用の警告を受信しません。

**解決策:**

- メトリックに相当するモニタ ポリシーがノード上に配布されることを確認します。
- **alarm=yes** がメトリック用の `<Agent_Dir>/wasspi/wls/conf/MetricDefinitions.xml` ファイルで指定されていることを確認します。

- **問題:** 管理対象ノードでコレクタ コマンドを手動で実行すると、メトリックの値が STDOUT に No instance, No data と表示されます。

**解決策:** 適切な MBeans があることを Admin Console で確認します。

- **問題:** データがログに記録されません。

**解決策:**

- SPIDataCollector インストールメンテーション カテゴリが管理対象ノードに配布されることを確認します。これは、データソース WLSSPI\_METRICS の作成に必要です。
- WLSSPI-Performance ポリシーがノードに配布されることを確認します。
- `<servername>.dat` ファイルが `<Agent_Dir>/wasspi/wls/datalog` に作成されたかどうかを確認します。
- データソース LSSPI\_METRICS が作成されたかどうかを確認します。
- **graph=yes** が監視中のメトリック用の `<Agent_Dir>/wasspi/wls/conf/MetricDefinitions.xml` ファイルで指定されていることを確認します。`MetricDefinitions.xml` 内で **graph=yes** と指定されるメトリックのみがログに記録されません。デフォルト値は、**no** です。

## ツールのトラブルシューティング

- **問題:** 「Default Server」サーバーに対して、設定変数 `SERVER<n>_START_CMD` が設定されていません。  
**解決策:** Start WebLogic ツールを正常に実行できるようにするには、`START_CMD` プロパティと `USER` プロパティを設定する必要があります。Discover or Configure WLSSPI ツールを使用して、これらのプロパティを設定します。このツールの詳細は、[Discover or Configure WLSSPI \(59ページ\)](#) を参照してください。
- **問題:** 「Default Server」サーバーに対して、設定変数 `SERVER<n>_STOP_CMD` が設定されていません。  
**解決策:** Stop WebLogic ツールを正常に実行できるようにするには、`STOP_CMD` プロパティと `USER` プロパティを設定する必要があります。Discover or Configure WLSSPI ツールを使用して、これらのプロパティを設定します。このツールの詳細は、[Discover or Configure WLSSPI \(59ページ\)](#) を参照してください。
- **問題:** Verify ツールが、起動時に不正な出力を生成します。  
**解決策:** Verify ツールを起動する前に、SPI DVD に含まれている最新バージョンの Self-Healing サービス (SHS) コンポーネント (バージョン 3.00) をインストールしているか確認します。SPI DVD を使用せずに WebLogic SPI をアップグレードする場合、SHS コンポーネントもアップグレードする必要があります。SHS コンポーネントは、  
[http://support.openview.hp.com/self\\_healing\\_downloads.jsp](http://support.openview.hp.com/self_healing_downloads.jsp) からダウンロードできます。
- **問題:** Self-Healing Info ツールが起動時に不正な出力を生成します。  
**解決策:** SPI DVD から最新のバージョンの Self-Healing Service (SHS) コンポーネント (バージョン 3.00) をインストールしているか確認します。SPI DVD を使用せずに WebLogic SPI をアップグレードした場合、SHS コンポーネントもアップグレードする必要があります。SHS コンポーネントは、  
[http://support.openview.hp.com/self\\_healing\\_downloads.jsp](http://support.openview.hp.com/self_healing_downloads.jsp) からダウンロードできます。
- **問題:** Check WebLogic ツールがサーバー インスタンスのステータスを誤って表示するか、何も出力しません。  
**解決策:** サーバーが実行中にもかかわらず Check WebLogic ツールがサーバーのステータス「NOT\_RUNNING」を返す(または何も出力しない)場合、Start Monitoring ツールを使用して、該当のサーバーの監視を有効化します。
- **問題:** アプリケーションを起動すると、アプリケーションがハングするか、出力がありません。  
**解決策:** メモリ不足の場合、アプリケーションは動作しません。ノードと管理サーバーのパフォーマンスをチェックしてください。使用できる物理メモリは 500 MB 以上必要です。
- **問題:** View WebLogic Log ツールが重複した (冗長な) ログ ファイル名を表示します。  
**解決策:** この問題は、SiteConfig ファイル内に重複したエントリがある場合に発生します。Discover or Configure WLSSPI ツールを起動して、重複エントリを削除してください。
- **問題:** RHEL 4.0 プラットフォームでデータソースが作成されません。  
**解決策:** SPI DVD に含まれる最新バージョンの DSI2DDF コンポーネント (02.40.000) をインストールしているか確認します。SPI DVD を使用せずに WebLogic SPI をアップグレードした場合、DSI2DDF コンポーネントもアップグレードする必要があります。最新の DSI2DDF コンポーネントを入手するには、HP ソフトウェア サポートにお問い合わせください。

# エラー メッセージ

WebLogic SPI エラー メッセージには、次の情報が含まれます。

- エラー メッセージ番号
- 説明
- 重要度
- ヘルプ テキスト (原因と処置)

エラーメッセージは、**HPOM**メッセージ ブラウザから表示できます。エラーメッセージをダブルクリックして、メッセージを開きます。[メッセージのプロパティ] ウィンドウが表示されます。[メッセージ テキスト] タブをクリックして、エラーメッセージを表示します。

エラー メッセージの詳細は、[付録 C 「エラー メッセージ」](#) を参照してください。



# 第8章 WebLogic SPI の削除

この章では、さまざまな環境から WebLogic SPI コンポーネントを削除する方法について手順を示します。

## SPI コンポーネントの削除

SPI を完全にアンインストールするには、次のタスクに従って、SPI コンポーネントを削除します。

- 1 管理サーバーから WebLogic SPI ソフトウェアを削除する
- 2 WebLogic SPI メッセージ グループを削除する
- 3 WebLogic SPI ユーザー プロファイルを削除する
- 4 レポート パッケージを削除する (オプション)
- 5 グラフ作成パッケージを削除する (オプション)

### 管理サーバーから WebLogic SPI ソフトウェアを削除する

- 1 ターミナル ウィンドウを開き、**root** としてログオンします。
- 2 ターミナル ウィンドウに以下を入力します。
  - HP-UX 管理サーバーの場合、以下を入力します。

```
/usr/sbin/swremove WLSSPI
```

- Solaris 管理サーバーの場合、以下を入力します。

```
/usr/sbin/pkgrm HPOvSpiWls
```

**swremove** および **pkgrm** コマンドは、ソフトウェア リストのファイル、`/var/opt/OV/share/databases/OpC/mgd_node/instrumentation/` 内のディレクトリ、`/opt/OV/wasspi/wls` 内のディレクトリ、ノード グループ、カテゴリ、ツール、およびポリシーを削除します。

### WebLogic SPI メッセージ グループを削除する

- 1 Admin UI から、[All Message Groups(すべてのメッセージ グループ)] ウィンドウを開きます。
- 2 [WebLogic] および [WLSSPI] メッセージ グループ チェック ボックスを選択します。
- 3 [Choose an Action] ドロップダウン リストから [Delete...] を選択し、 をクリックして実行します。WebLogic SPI メッセージ グループが削除されます。

## WebLogic SPI ユーザー プロファイルを削除する

- 1 Admin UI から、[All User Profiles] ウィンドウを開きます。
- 2 チェック ボックスを選択することによって、WebLogic SPI のユーザー プロファイルを選択します。
- 3 **[Choose an Action]** ドロップダウン リストから **[Delete...]** を選択し、 をクリックして実行します。  
WebLogic SPI ユーザー プロファイルが削除されます。

## レポート パッケージを削除する (オプション)

HP Reporter を実行している Windows システム に WebLogic SPI レポート パッケージをインストールした場合、次の手順に従って、それを削除します。

- 1 HP Reporter を実行している Windows システムでは、[コントロール パネル] から [プログラムの追加と削除] アイコンをダブルクリックします。
- 2 WebLogic SPI レポート パッケージを選択し、[削除] をクリックします。

## グラフ作成パッケージを削除する (オプション)

WebLogic SPI グラフ作成パッケージを (HPOM 管理サーバーおよび HP Performance Manager を実行するシステムに) インストールしている場合は削除します。

- HPOM 管理サーバーで、以下のコマンドを実行します。  
`/usr/sbin/swremove WLSSPI-GRAPHS`
- Solaris 管理サーバーで、以下のコマンドを実行します。  
`/usr/sbin/pkgrm HPOvSpiWlsG`
- HP Performance Manager を実行している Windows システムで、以下の手順を実行します。
  - a [コントロール パネル] から [プログラムの追加と削除] アイコンをダブルクリックします。
  - b WebLogic SPI グラフ作成パッケージ (HP Operations SPI for WebLogic Application Server - Graphing Component Integration) を選択し、[削除] をクリックします。
- HPOM 管理サーバーではない HP Performance Manager を実行している HP-UX システムで、次の手順に従います (HPOM 管理サーバーに HP Performance Manager がインストールされている場合、ファイルが管理サーバーから WebLogic SPI ソフトウェアを削除する (121 ページ) で削除されます)。
  - a グラフ パッケージがインストールされていることを確認します。  
`swlist | grep WLSSPI-GRAPHS` と入力します。
  - b `swremove WLSSPI-GRAPHS` と入力します。
- HPOM 管理サーバーではない HP Performance Manager を実行している Solaris システムで、次の手順に従います (HPOM 管理サーバーに HP Performance Manager がインストールされている場合、ファイルが管理サーバーから WebLogic SPI ソフトウェアを削除する (121 ページ) で削除されます)。
  - a グラフ パッケージがインストールされていることを確認します。  
`/usr/bin/pkginfo HPOvSpiWlsG` と入力します。
  - b `/usr/sbin/pkgrm HPOvSpiWlsG` と入力します。

## クラスタ環境からの WebLogic SPI の削除

クラスタ内の各システムから WebLogic SPI を削除するには、[SPI コンポーネントの削除 \(121 ページ\)](#) の手順に従います。



# A ファイルの位置

WebLogic SPI 設定ファイルとエラー ログは特定のディレクトリにあります。

## HPOM 管理サーバーのファイルの位置

オペレーティング システム	ファイル	ファイルの位置
HP-UX	設定	/opt/OV/wasspi/wls/conf
Solaris	設定	/opt/OV/wasspi/wls/conf

## 管理対象ノードのファイルの位置

これらのファイル場所は、WebLogic SPI が実行している UNIX または Windows ノードを非 root HTTPS エージェント環境に移行している場合は有効です (UNIX のみ。これらのディレクトリが存在しない場合は、ファイル場所を [非 Root HTTPS エージェント環境 \(126ページ\)](#) の表で確認してください)。

オペレーティング システム	ファイル	ファイルの位置
HP-UX、Solaris	設定	/var/opt/OV/wasspi/wls/conf
HP-UX、Solaris	エラー ログ	/var/opt/OV/wasspi/wls/log
AIX	設定	/var/opt/OV/wasspi/wls/conf
AIX	エラー ログ	/var/opt/OV/wasspi/wls/log
Windows (HTTPS)	設定	\Documents and Settings\All Users\Application Data\HP\HP BTO Software\wasspi\wls\conf
Windows (HTTPS)	エラー ログ	\Documents and Settings\All Users\Application Data\HP\HP BTO Software\wasspi\wls\log

## 非 Root HTTPS エージェント環境

非 root HTTPS エージェント環境で新しく設定された WebLogic SPI 管理対象ノード (UNIX のみ) は以下のとおりです。

オペレーティング システム	ファイル	ファイルの位置
HP-UX、Solaris、Linux	設定	/var/opt/OV/conf/wlsspi
HP-UX、Solaris、Linux	エラー ログ	/var/opt/OV/log/wlsspi
AIX	設定	/var/opt/OV/conf/wlsspi
AIX	エラー ログ	/var/opt/OV/log/wlsspi

## B 設定

この付録には、設定構造についての詳細、設定エディタの使用方法、設定プロパティの説明、および設定例が記載されています。

### 構造

設定例については、[サンプル設定 \(149 ページ\)](#) を参照してください。以下では、設定の基本的な構造を示します。# が先頭に付いている行は、コメントとして無視されます。

```
# グローバル プロパティ
property=<value> ...

# GROUP ブロック
Groups<Group_Name>
{
  <node_name> ...
}

# NODE ブロック
NODE <node_name | group_name>
{
  property=<value> ...
}
```

### グローバル プロパティ

```
# グローバル プロパティ
<property>=<value> ...
```

グローバルレベルで定義されたプロパティはすべてのノードに適用されます。グローバルプロパティは、GROUP または NODE ブロックで設定されるプロパティやサーバー固有のプロパティにより無効にできます。

### GROUP ブロック

```
# GROUP ブロック
Groups<Group_Name>
{
  <node_name> ...
}
```

GROUP ブロックは、共通のプロパティを持つノードをまとめてグループ化するために使用します。<group\_name> は共通のプロパティを持つノードグループを示します。GROUP ブロック <group\_name> が設定ファイル内で繰り返し定義されている場合は、最後の定義が優先されます。

<nodename> はグループのノードを一覧表示するもので、HPOM で設定したプライマリ ノード名です。

NODE ブロックを使用して共通のプロパティを設定できます。



GROUP ブロックで指定したノード名は、HPOM で設定したプライマリ ノード名である、HPOM 変数 \$OPC\_NODES が返す値に一致します。

GROUP ブロックのプロパティを表示、設定、または編集するには、設定エディタで <Group\_Name> フォルダの [Default Properties] 項目を選択します。

## NODE ブロック

```
# NODE ブロック
NODE <node_name | group_name>
{
  <property>=<value> ...
}
```

NODE ブロックで設定されるプロパティは、グループの共通プロパティを設定するために <group\_name> で定義されるグループに属すノードや、単一のノードのプロパティを設定するために指定される <nodename> に属すノードに適用されます。

グループにプロパティを設定するには、GROUP ブロックで定義される <group\_name> を入力し、グループの共通プロパティを定義します。

単一のノードにプロパティを設定するには、<nodename> を入力し、プロパティを定義します。

<nodename> は、HPOM で設定したプライマリ ノード名です。

NODE ブロックでプロパティが繰り返し定義されている場合は、最後の定義が優先されます。

NODE ブロックのプロパティを表示、設定、または編集するには、設定エディタで <Node\_Name> フォルダの [Default Properties] 項目を選択します。

## サーバー固有のプロパティ

高度なプロパティを除き、サーバー固有のプロパティを表示、設定、または編集することもできます。SERVER<n>\_config\_property として指定される各プロパティは、WebLogic Server 固有のインスタンスを参照します。複数の WebLogic Server が指定の管理対象ノードで動作している場合は、番号 <n> でサーバーを区別します。番号は「1」から始まり、WebLogic Server の各インスタンスに一意の番号が割り当てられます。

## プロパティ優先順位

設定で定義されるプロパティの優先順位 (高い順) は以下のようになります。

- 1 SERVER<n>\_property (サーバー固有)
- 2 NODE <node\_name> {<property>} (ノードについて定義されたプロパティ)
- 3 Nodes <group\_name> {<property>} (グループについて定義されたプロパティ)
- 4 グローバル <property>

# 設定エディタ

設定エディタを使用して、設定を表示および編集できます。設定の更新にはこのエディタのみを使用する必要があります。

設定エディタの主なコンポーネントには、以下のものがあります。

- ツリー
- ボタン
- アクション

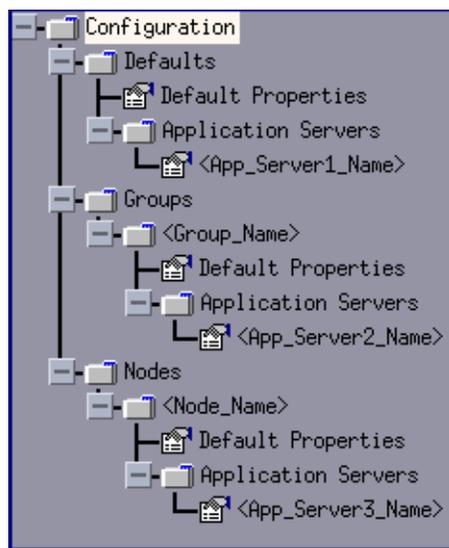
## Configuration Editor: ツリー

[Configuration Editor] ウィンドウの左ペインに表示される **Configuration** ツリーは、ツリー構造で WebLogic SPI 設定を示します。

以下にツリーの例を示します。



アプリケーション サーバーまたはグループが設定されていない場合は、[Application Servers] フォルダおよび [Groups] フォルダは表示されません。ノードを選択せずに **Discover or Configure WLSSPI** ツールを初めて起動した場合は、[Nodes] フォルダはツリーに表示されません。



ここで、アイコンは以下のように定義されます。



設定プロパティを表示できます。



設定プロパティを表示して、設定できます。

以下の表では、ツリーの各項目とその項目についての簡単な説明を示します。

項目名	説明
Application Servers	すべてのアプリケーション サーバーのリストが含まれます。このフォルダは、 <b>Defaults</b> (グローバルプロパティ)、 <b>Group_Name</b> (GROUP ブロック)、または <b>Node_Name</b> (NODE ブロック) の下に表示されます。
<Application_Server_Name>	WebLogic Server で定義されるサーバー名です。
Configuration	WebLogic 環境についてのすべての WebLogic SPI 設定情報を含みます。
Default Properties	設定されている設定プロパティのリスト。この項目は、 <b>Defaults</b> (グローバルプロパティ)、 <b>Group_Name</b> (GROUP ブロック)、または <b>Node_Name</b> (NODE ブロック) の下に表示されます。
Defaults	グローバルプロパティを表します。このレベルで設定されたデフォルトプロパティは、すべてのノードに適用されます。ただし、これらのプロパティは、 <b>Group_Name</b> と <b>Node_Name</b> フォルダで設定したプロパティで無効にできます (詳細は、 <a href="#">プロパティ優先順位 (128 ページ)</a> を参照してください)。
Groups	GROUP ブロックを表します。
<Group_Name>	共通プロパティを持つノード グループの名前を識別します。このレベルで設定されたデフォルト プロパティは、指定されたグループに属するすべてのノードに適用されます。これらのプロパティは、 <b>Node_Name</b> フォルダで設定されたプロパティで無効にできます (詳細は、 <a href="#">プロパティ優先順位 (128 ページ)</a> を参照してください)。
Nodes	NODE ブロックを表します。
<Node_Name>	HPOM 変数 \$OPC_NODES が返す値に一致する名前の単一のノードを表します。この値は、HPOM で設定したプライマリ ノード名です。このレベルで設定されるデフォルト プロパティは、指定されたノードのみに適用されます (詳細は、 <a href="#">プロパティ優先順位 (128 ページ)</a> を参照してください)。

## Configuration Editor: ボタン

WebLogic SPI 設定エディタでは、ボタンを使用していくつかの機能を実行できます。以下の表に、ボタンとその説明を示します。

ボタン	説明
Cancel	設定エディタを終了します。 アプリケーション サーバー、ノード、またはグループを追加または削除したり、設定プロパティを変更したりした後、変更を保存せずに <b>[Cancel]</b> をクリックすると、 <b>[Confirm Cancel]</b> ウィンドウが表示されます。変更を保存して終了するには <b>[Save and Exit]</b> 、変更を保存しないで終了するには <b>[Exit without Save]</b> 、また、設定の編集を続行するには <b>[Return to Editing]</b> (変更は保存されない) をクリックします。
Next	設定エディタを終了します。 <b>[Next]</b> をクリックすると、 <b>[Confirm Operation]</b> ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、 <b>Discover or Configure WLSSPI</b> を起動する前に選択していたノードのリストが表示されます。選択された管理対象ノードの設定は、ユーザーが変更すると更新されます。選択されていない ( <b>[Confirm Operation]</b> ウィンドウに表示されない) ノードに行われた変更は、 <b>HPOM</b> 管理サーバーの設定に保存されます。それらの管理対象ノードへの変更を保存するには、管理対象ノードを選択して、 <b>Discover</b> または <b>Configure WLSSPI</b> を再起動してから終了する必要があります。
Finish	設定エディタを終了します。 ノードを選択せずに <b>Discover or Configure WLSSPI</b> を起動すると、 <b>[Next]</b> ボタンの代わりにこのボタンが表示されます。
Save	<b>HPOM</b> 管理サーバーの設定に対して行われた変更を保存し、設定の編集を続行します。 <b>[File]</b> → <b>[Save]</b> をクリックし、変更を保存することもできます。

## Configuration Editor: アクション

実行できるアクションは、ツリーで選択した項目とアクションにアクセスする場所によって異なります。以下のアクションは、**[File]** メニューの **[Actions]** メニューから、またはツリーの項目を右クリックして、アクセスできます。

アクション	説明	選択されたツリー項目
Add Application Server	アプリケーション サーバーを追加します。詳細については、 <a href="#">Add Application Server (132ページ)</a> を参照してください。	 Application Servers  Defaults  <Group_Name>  <Node_Name>
Add Group	共通プロパティを持つノードを割り当てることができるグループを作成します。詳細については、 <a href="#">Add Group (133ページ)</a> を参照してください。	 ツリーのあらゆる項目  ツリーのあらゆる項目
Add Node	管理対象ノードを <b>[Nodes]</b> フォルダに追加します。詳細については、 <a href="#">Add Node (133ページ)</a> を参照してください。	 ツリーのあらゆる項目  ツリーのあらゆる項目

アクション	説明	選択されたツリー項目
Exit	設定エディタを終了します。このアクションは、[File] メニューから利用可能です。変更を保存していない場合、[Confirm Cancel] ウィンドウが表示されます。	ツリーのあらゆる項目 ツリーのあらゆる項目
Remove Application Server/Remove ALL App Servers	一覧表示されたアプリケーション サーバーの 1 つまたはすべてを削除します。詳細については、 <a href="#">Remove Application Server/Remove ALL App Servers (134 ページ)</a> を参照してください。	Application Servers <Application_Server_Name>
Remove Group/Remove ALL Groups	一覧表示された WebLogic SPI グループの 1 つまたはすべてを削除します。詳細については、 <a href="#">Remove Group/Remove ALL Groups (134 ページ)</a> を参照してください。	Groups <Group_Name>
Remove Node/Remove ALL Nodes	一覧表示された管理対象ノードの 1 つまたはすべてを削除します。詳細については、 <a href="#">Remove Node/Remove ALL Nodes (135 ページ)</a> を参照してください。	Nodes <Node_Name>
Save	変更を設定に保存します。このアクションは設定に変更を加えた場合のみ、[File] メニューから利用可能です。	ツリーのあらゆる項目 ツリーのあらゆる項目
Set Configuration Properties	[Set Configuration Properties] タブをクリックして、WebLogic SPI 設定プロパティを設定できます。詳細については、 <a href="#">[Set Configuration Properties] タブ (135 ページ)</a> を参照してください。	<Application_Server_Name> Default Properties
View Current Configuration	[View Configuration Settings] タブをクリックして、WebLogic SPI 設定プロパティを表示できます。詳細については、 <a href="#">[Set Configuration Properties] タブ (135 ページ)</a> を参照してください。	ツリーのあらゆる項目 ツリーのあらゆる項目

## Add Application Server

WebLogic SPI 設定のグローバル プロパティ、GROUP、または NODE レベルで、WebLogic Server のインスタンスを追加できます。

ノードでサーバー名が重複している (NAME プロパティが同じ値に設定されている) 場合は、(各サーバーを一意に識別するための) ALIAS プロパティ設定のプロンプトが表示されます。ALIAS プロパティについての詳細は、[プロパティの定義 \(139 ページ\)](#) を参照してください。

アプリケーション サーバーを追加するには、以下のステップを実行します。

- 1 [WLSSPI Configure Tool: Configuration Editor] ウィンドウで、ツリーに含まれる Defaults (グローバル プロパティ レベル)、Application Servers (グローバル プロパティ レベル)、<Group\_Name> (GROUP レベル)、または <Node\_Name> (NODE レベル) のいずれかを右クリックします。次に、[Add Application Server] を選択します。

[WLSSPI Configure Tool: Configuration Editor: Add App Server] ウィンドウが表示されます。

- 2 [Application Server Name] ボックスにサーバー名を入力します。これは、WebLogic Server で定義されたアプリケーション サーバーの名前で、大文字と小文字とを区別します。WebLogic Administration Console には、ドメインにあるすべての設定されたアプリケーション サーバーのサーバー名が表示されます。これらの名前を [Application Server Name] に使用します。

- 3 [Application Server Port] ボックスにポート名を入力します。これは、WebLogic Server がリッスンするポートです。WebLogic Administration Console には、ドメインにあるすべての設定されたアプリケーション サーバーのポート番号が表示されます。これらを [Application Server Port] に使用します。

- 4 [OK] をクリックします。

NAME および PORT プロパティが設定されます。

アプリケーション サーバーが追加され、そのプロパティを表示できます。このサーバーに追加の設定プロパティを設定することもできます。詳細については、[\[Set Configuration Properties\] タブ \(135 ページ\)](#) を参照してください。

- 5 [Save] を選択し、変更を保存します。

このアプリケーション サーバーを追加したくない場合は、アプリケーション サーバー名を右クリックし、**[Remove Application Server]** を選択した後、**[Save]** をクリックします。

## Add Group

WebLogic SPI 設定で、共通プロパティを持つノードをグループに割り当てることができます。

グループを追加するには、以下のステップを実行します。

- 1 [WLSSPI Configure Tool: Configuration Editor] ウィンドウで、ツリーに含まれる項目を右クリックし、**[Add Group]** を選択します。

[WLSSPI Configure Tool: Configuration Editor: Add Group] ウィンドウが表示されます。

- 2 [Enter the name of the Group] ボックスにグループ名を入力します。このグループ名は共通プロパティを持つノード グループを識別し、大文字と小文字とを区別しません。

- 3 [OK] をクリックします。

グループが追加され、そのグループの **[Set Configuration Properties]** タブが有効になります。

- 4 **[Add Node to Group]** をクリックし、リストからノードを 1 つ選択してグループに追加し、**[OK]** を選択します。すべてのノードをグループに追加し終えるまでこのステップを繰り返します。

- 5 **[Select a Property to Set]** ドロップダウン リストを使用して、このグループの設定プロパティを設定します。詳細については、[\[Set Configuration Properties\] タブ \(135 ページ\)](#) を参照してください。

- 6 **[Save]** を選択し、変更を保存します。

このグループを追加したくない場合は、グループ名を右クリックし、**[Remove Group]** を選択した後、**[Save]** を選択します。

## Add Node

管理対象ノードを WebLogic SPI 設定に追加するには、以下のステップを実行します。

- 1 [WLSSPI Configure Tool: Configuration Editor] ウィンドウで、ツリーに含まれる項目を右クリックし、**[Add Node]** を選択します。[WLSSPI Configure Tool: Configuration Editor: Add Node] ウィンドウが表示されます。

-  設定に追加できる管理対象ノードがない場合、次のメッセージが表示されます。  
All available managed nodes have been added to the configuration.  
[OK] をクリックして、このアクションを終了します。

- 2 ドロップダウン リストから、追加するノードを選択します。
- 3 [OK] をクリックします。  
ノードが追加され、そのノードの [Set Configuration Properties] タブが有効になります。
- 4 [Select a Property to Set] ドロップダウン リストを使用して、このノードの設定プロパティを設定します。詳細については、[Set Configuration Properties] タブ (135ページ) を参照してください。
- 5 [Save] を選択し、変更を保存します。  
このノードを追加したくない場合は、ノード名を右クリックし、[Remove Node] を選択した後、[Save] を選択します。

## Remove Application Server/Remove ALL App Servers

WebLogic SPI 設定に一覧表示されている WebLogic Server を削除するには、以下のステップを実行します。

- 1 アプリケーション サーバー名を右クリックし、[Remove Application Server] を選択します。  
選択されたアプリケーション サーバー名はリストから削除され、その設定プロパティは設定から削除されます。
- 2 [Save] をクリックすると、そのアプリケーション サーバーが設定から完全に削除されます。  
[Cancel] をクリックすると、アプリケーション サーバーの削除をキャンセルします (このアプリケーション サーバー名は、Discover or Configure WLSSPI を次回起動するときに表示されます)。[Confirm Cancel] ウィンドウで、[Exit without Save] をクリックします。

すべてのアプリケーション サーバーを削除するには、以下のステップを実行します。

- 1 [Application Servers] フォルダを右クリックし、[Remove ALL App Servers] を選択します。  
選択された [Application Servers] フォルダと選択されたフォルダに一覧表示されたすべてのアプリケーション サーバーが削除されます (一覧表示されたアプリケーション サーバーのすべての設定プロパティが設定から削除されます)。
- 2 [Save] をクリックすると、それらのアプリケーション サーバーが完全に削除されます。  
[Cancel] をクリックすると、すべてのアプリケーション サーバーの削除をキャンセルします ([Application Servers] フォルダとフォルダに一覧表示されているすべてのアプリケーション サーバー名は、Discover or Configure WLSSPI を次回起動するときに表示されます)。[Confirm Cancel] ウィンドウで、[Exit without Save] をクリックします。

## Remove Group/Remove ALL Groups

WebLogic SPI 設定に一覧表示されている 1 つまたはすべての WebLogic SPI グループを削除するには、以下のステップを実行します。

- 1 グループ サーバー名を右クリックし、[Remove Group] を選択します。  
選択されたグループはリストから削除され、その設定プロパティは設定から削除されます。
- 2 [Save] をクリックすると、そのグループが完全に削除されます。

**[Cancel]** をクリックすると、グループの削除をキャンセルします (このグループ名は、**Discover or Configure WLSSPI** を次回起動するときに表示されます)。 **[Confirm Cancel]** ウィンドウで、 **[Exit without Save]** をクリックします。

## Remove Node/Remove ALL Nodes

WebLogic SPI 設定に一覧表示されている管理ノードのいずれか 1 つを削除するには、以下のステップを実行します。

- 1 ノード名を右クリックし、 **[Remove Node]** を選択します。  
選択されたノードはリストから削除され、その設定プロパティは設定から削除されます。
- 2 **[Save]** をクリックすると、そのノードが完全に削除されます。  
**[Cancel]** をクリックすると、ノードの削除をキャンセルします (このノード名は、**Discover or Configure WLSSPI** を次回起動するときに表示されます)。 **[Confirm Cancel]** ウィンドウで、 **[Exit without Save]** をクリックします。

すべてのノードを削除するには、以下のステップを実行します。

- 1 **[Nodes]** フォルダを右クリックし、 **[Remove ALL Nodes]** を選択します。  
選択された **[Nodes]** フォルダと選択されたフォルダに一覧表示されたすべてのノードが削除されます (一覧表示されたノードのすべての設定プロパティが設定から削除されます)。
- 2 **[Save]** をクリックすると、そのノードが完全に削除されます。  
**[Cancel]** をクリックすると、すべてのノードの削除をキャンセルします (**[Nodes]** フォルダとこのフォルダに一覧表示されているすべてのノード名は、 **Discover or Configure WLSSPI** を次回起動するときに表示されます)。 **[Confirm Cancel]** ウィンドウで、 **[Exit without Save]** をクリックします。

## [Set Configuration Properties] タブ

このタブでは、グローバル プロパティ レベルで、または選択したアプリケーション サーバー、グループ (GROUP レベル)、またはノード (NODE レベル) について、WebLogic SPI 設定プロパティを設定できます。

 アイコンのついている項目に対してのみ、設定プロパティを設定できます (Default Properties と <Application\_Server\_Name>)。

項目の設定プロパティを設定するには、設定エディタで項目を選択し、右側のペインにある **[Set Configuration Properties]** タブをクリックします。

### プロパティの設定

設定のプロパティを設定するには、以下のステップを実行します。

- 1 設定エディタの **[Select a Property to Set]** ドロップダウン リストから、プロパティを選択します。
- 2 **[Set Property]** をクリックします。表にプロパティと空白値フィールドが表示されます。
- 3 空白値フィールドをクリックして、値を入力します。
- 4 設定する各プロパティについて、ステップ 1 ~ 3 を繰り返します。
- 5 **[Save]** をクリックします。



LOGIN および PASSWORD プロパティについては、 **[Set Property]** をクリックすると、別のウィンドウが表示されます。このウィンドウにログインとパスワードの値を入力します。

個々のプロパティについての詳細は、 [設定プロパティ \(138ページ\)](#) を参照してください。

## プロパティの変更

設定でプロパティ (LOGIN 以外) を変更するには、以下のステップを実行します。

- 1 設定エディタで、変更するプロパティを選択します。
- 2 値フィールドをダブルクリックします。
- 3 値を編集します。  
ノードでサーバー名が重複している (NAME プロパティが同じ値に設定されている) 場合は、(各サーバーを一意に識別するための) ALIAS プロパティ設定のプロンプトが表示されます。ALIAS プロパティについての詳細は、[プロパティの定義 \(139ページ\)](#) を参照してください。
- 4 変更する各プロパティについて、ステップ 1 ~ 3 を繰り返します。
- 5 **[Save]** をクリックします。

設定で LOGIN プロパティを変更するには、以下のステップを実行します。

- 1 **[Select a Property to add]** ドロップダウン リストで、**[Login]** または **[Password]** を選択します。
- 2 **[Set Property]** をクリックします。**[Set Access Info for Default Properties]** ウィンドウが表示されます。
- 3 新しいパスワードを入力し、パスワードを確認します。**[OK]** をクリックします。
- 4 **[Save]** をクリックします。

個々のプロパティについての詳細は、[設定プロパティ \(138ページ\)](#) を参照してください。

## プロパティの削除

設定のプロパティを削除するには、以下のステップを実行します。

- 1 設定エディタで、削除するプロパティを選択します。
- 2 **[Remove Property]** をクリックします。
- 3 削除する各プロパティについて、ステップ 1 と 2 を繰り返します。
- 4 **[Save]** をクリックします。

## [View Current Configuration] タブ

このタブを使用すると、HPOM 管理サーバーの設定で設定されたすべての WebLogic SPI 設定プロパティや、選択されたアプリケーション サーバー、グループ、またはノードの WebLogic SPI 設定プロパティを表示できます。

項目の設定プロパティを表示するには、設定エディタで項目を選択し、右側のペインにある **[View Configuration Settings]** タブをクリックします。

以下の表は、特定の項目が選択された場合の表示について説明しています。

項目名	表示の説明
Application Servers	一覧表示されたすべてのアプリケーション サーバーに設定されている設定プロパティをすべて表示します。
<Application_Server_Name>	アプリケーション サーバーに設定されたすべての設定プロパティを表示します (これらのプロパティは、 <b>[Set Configuration Properties]</b> タブを選択して変更できます)。
Configurations	HPOM 管理サーバーの設定に保存されたすべての設定プロパティを表示します。

項目名	表示の説明
Default Properties	設定されたすべての設定プロパティを表示します (これらのプロパティは、 <b>[Set Configuration Properties]</b> タブを選択して変更できます)。
Defaults	グローバル プロパティ レベルで設定されたすべての設定プロパティを表示します。
Groups	すべての一覧表示されたグループに設定されたすべての設定プロパティを表示します。
<Group_Name>	特定のグループに設定されたすべての設定プロパティを表示します。
Nodes	一覧表示されたノードに設定されたすべての設定プロパティを表示します。
<Node_Name>	特定のノードに設定されたすべての設定プロパティを表示します。

### View Inherited Properties

ウィンドウの一番下近くに、**[View Inherited Properties]** チェック ボックスが表示されます。このチェックボックスを選択すると、設定プロパティの表示が変わり、選択した項目に影響を与えるすべての継承されたプロパティ (これらのプロパティは、グローバル プロパティ レベルまたは **GROUP** レベルで定義されています) が表示されます。継承されたプロパティは、プロパティの後に表示される “<\*>” によって表記されます。

**[View Inherited Properties]** チェック ボックスを選択解除すると、選択された項目のレベルで設定された設定プロパティのみが表示されます。

継承されたプロパティは、そのプロパティが設定されたレベルで変更可能です。“<\*>” がプロパティの後に表示される場合、プロパティをそのレベルで変更することができません。たとえば、プロパティ **HOME** がグローバル プロパティ レベル (**[Defaults]** フォルダの下) で設定されている場合は、**[Defaults]** フォルダの下で一覧表示される **[Default Properties]** でしか変更できません。**[<Group\_Name>'s Default Properties]** ビューに **HOME** とその後ろの “<\*>” が表示されますが、**HOME** をこのレベルで変更することはできません。

ツリーで下位に設定されているプロパティは、ツリーで上位に設定されているプロパティよりも優先されます。たとえば、プロパティ **HOME** がグローバル プロパティ レベル (**[Defaults]** フォルダの下) と **GROUP** レベルで設定されている場合、**GROUP** レベル プロパティの値が優先されます。

設定プロパティの優先順位は、以下のようになります (高い順に一覧表示)。

- 1 サーバー固有
- 2 **NODE** レベル
- 3 **GROUP** レベル
- 4 グローバル プロパティ レベル

# 設定プロパティ

WebLogic SPI は、検出プロセスにより検出されたプロパティ値やユーザー定義のプロパティ値を含む設定を保持します。

表7 は、WebLogic SPI 要件による以下のプロパティを一覧表示します。

プロパティ	プロパティ名
要件	特定のコンポーネントのプロパティ要件を一覧表示します。以下の表記法を使用します。 <b>R</b> - 必須: プロパティを設定する必要があります。 <b>C</b> - 条件付: 一定の条件に合えば、プロパティを設定する必要があります。 <b>O</b> - オプション: コンポーネントが動作するためにプロパティは必要ありません。 ブランク - 適用不可: プロパティはこのコンポーネントに影響を与えません。
WebLogic SPI	WebLogic SPI が動作するための設定要件
検出プロセス	検出プロセスが動作するための要件
自動検出	検出プロセスで自動的に設定されるプロパティ
設定のレベル	設定構造でこのプロパティが設定できるレベル
Default Properties	設定構造のグローバル、グループ、またはノード レベル
アプリケーション サーバー	設定構造のサーバー固有のレベル

これらのプロパティについての詳細は、表8を参照してください。

## プロパティの定義

表 7 WebLogic SPI 要件に一覧表示されるプロパティ

プロパティ	要件		自動検出	設定のレベル	
	WebLogic SPI	検出プロセス		Default Properties	アプリケーションサーバー
HOME	<b>R</b>	<b>R</b>	✓	✓	✓
JAVA_HOME	<b>R</b>	<b>R</b>	✓	✓	✓
LOGIN	<b>R</b>	<b>R</b>		✓	✓
NAME	<b>R</b>		✓		✓
PASSWORD	<b>R</b>	<b>R</b>		✓	✓
PORT	<b>R</b>		✓		✓
ADDRESS	C	O	✓ <sup>a</sup>		✓
ADMIN_HOST	C		✓		✓
ADMIN_PORTS	C		✓		✓
ADMIN_PORTS	C	C		✓	
ALIAS	C				✓
BEA_HOME_LIST	<b>R</b>	<b>R</b>	✓	✓	
COLLECT_METADATA	C	O		✓	✓
GRAPH_URL	C			✓	
JMB_JAVA_HOME	C			✓	✓
JMX_CLASSPATH	C			✓	✓
KEYSTORE	C			✓	✓
LOGFILE	C				✓
NODE_NAMES	C	C			✓
PASSPHRASE	C			✓	✓
PROTOCOL	C			✓	✓
RMID_PORT	C			✓	
RMID_START_TIME	C			✓	
START_CMD	C				✓
STOP_CMD	C				✓
USER	C			✓	✓
URL_PATH	C				✓
VERSION	C		✓		✓
EXCLUDE_SAMPLES	O			✓	✓
MAX_ERROR_LOG_SIZE	O			✓	
TIMEOUT	O			✓	✓

表 7 WebLogic SPI 要件に一覧表示されるプロパティ (続き)

プロパティ	要件		自動検出	設定のレベル	
	WebLogic SPI	検出プロセス		Default Properties	アプリケーションサーバー
TYPE	O			✓	✓
UDM_DEFINITIONS_SOURCE	O			✓	✓

- a. WebLogic Admin サーバーが、仮想 IP アドレスをリスンしているリモート WebLogic Server を管理している場合、リモート WebLogic Server が動作している管理対象ノードを HPOM のエイリアスで設定し、ADDRESS が自動的に検出されるようにする必要があります。HPOM で仮想 IP アドレスを設定するには、ADDRESS プロパティの説明のセクションを参照してください。

▶ 表8 では、アプリケーション サーバー A に何度か言及しています。アプリケーション サーバー A は、プロパティを設定している WebLogic Application Server を指します。

表 8 設定プロパティ

プロパティ	適用可能な WebLogic バージョン	必須/条件付/オプション	説明
ADDRESS	9.x、10.x	条件付 サーバーが仮想 IP アドレスで動作している場合、リモート ノードにある場合、またはそのノードのプライマリ IP アドレスを使用していない場合に必要です。	サーバーがリスンしているドメイン名または IP アドレス。ADDRESS が未設定の場合、WebLogic SPI はノードのプライマリ アドレスを使用してサーバーに接続します。 例: SERVER1_ADDRESS = product.hp.com
ADMIN_HOST	9.x、10.x	条件付 Start WLS Console ツールを使用して、WebLogic コンソールの起動と停止を行う場合に必要です。	実行中のアプリケーション サーバー A を管理している WebLogic 管理サーバーが動作しているノード名。このプロパティは、WebLogic Server Console ツールを起動するために設定する必要があります。 例: SERVER1_ADMIN_HOST=localhost
ADMIN_PORTS	9.x、10.x	条件付 Start WLS Console ツールを使用して、WebLogic コンソールの起動と停止を行う場合に必要です。	アプリケーション サーバー A を管理している WebLogic 管理サーバーのポート。WebLogic Server Console ツールを起動するために設定する必要があります。 例: SERVER1_ADMIN_PORT=7005

表 8 設定プロパティ (続き)

プロパティ	適用可能な WebLogic バージョン	必須/ 条件付/ オプション	説明
ADMIN_PORTS	9.x、10.x	条件付 WebLogic Admin サーバーのドメイン設定ファイルがデフォルト ディレクトリにない場合に必要です。	以下に示すデフォルト ディレクトリにドメイン設定ファイル (config.xml) がない WebLogic Admin サーバーのポート番号。 <ul style="list-style-type: none"> <li>WebLogic 9.x、10.x の場合               <pre>&lt;BEA_Home_Dir&gt;/user_projects/ domains/&lt;domain_name&gt;</pre> </li> </ul> ここで、<WebLogic_Install_Dir> は WebLogic Server がインストールされているディレクトリであり、<BEA_Home_Dir> は registry.xml ファイルを格納しているディレクトリです。また、<WebLogic_Domain> は WebLogic のドメイン名です。           WebLogic Admin サーバーが仮想 IP アドレスをリスンしている場合、ポート番号の前にコロンで区切って、この仮想 IP アドレスを含めます。たとえば、 <pre>&lt;virtual_ip_address&gt;:&lt;port_number&gt;</pre> のようにします。           WebLogic Admin サーバーで使用する LOGIN と PASSWORD を NODE ブロックレベルで設定する必要があります。同一ノード上で実行されているすべての WebLogic Admin サーバーには、同じ LOGIN と PASSWORD を設定してください。このプロパティで設定するポート番号は、WebLogic Admin サーバーが使用するポートです。

表 8 設定プロパティ (続き)

プロパティ	適用可能な WebLogic バージョン	必須/ 条件付/ オプション	説明
ALIAS	9.x、10.x	<p>条件付</p> <p>システム上で複数のアプリケーション サーバーが同じサーバー名を共有している場合に必要です。</p>	<p>管理対象ノード上の複数のアプリケーションサーバーが同じサーバー名を共有する場合に、ノード上の各アプリケーションサーバーに割り当てられる一意の名前。エイリアスが設定されている場合、メッセージ、レポート、グラフの名前としてエイリアスが使用されます (設定されていない場合は <b>NAME</b> を使用します)。</p> <p><b>ALIAS</b> を変更する場合、古いエイリアスのデータは保存されますが、新しいエイリアスへのマップは行われません。</p> <p><b>例:</b></p> <pre> NODE petstore.hp.com {   SERVER1_NAME=dog   SERVER1_ALIAS=beagle   SERVER2_NAME=dog   SERVER2_ALIAS=dachshund }  NODE flying_ace.hp.com {   SERVER1_NAME=snoopy   SERVER1_ALIAS=beagle   SERVER2_NAME=snoopy   SERVER2_ALIAS=red_baron } </pre>
BEA_HOME_LIST	9.x、10.x	必須	<p>すべての <b>WebLogic</b> 製品が使用するソフトウェアレジストリ。これには、システムにインストールされているすべての <b>WebLogic</b> 製品についての情報が含まれています。</p> <p><b>BEA</b> のインストール スクリプトを使用せずに <b>WebLogic Server</b> をインストールすると、ソフトウェアレジストリは作成されません。</p> <p><b>UNIX</b> 管理対象ノード上では、ソフトウェアレジストリはファイル <code>\$HOME/boa/beahomelist</code> で作成されます。ここで、<code>\$HOME</code> は、<b>WebLogic Server</b> をインストールしたユーザーのホーム ディレクトリです。<b>Windows</b> 管理対象ノード上では、ソフトウェアレジストリはファイル <code>beahomelist</code> に作成されるか、または <b>BEAHOMELIST</b> レジストリで定義されます。</p> <p><b>UNIX</b> 管理対象ノード上では、スペースを含むディレクトリ名はサポートされていません。ソフトウェアレジストリが存在せず、このプロパティが設定されていない場合、<b>Discovery</b> ポリシー エラー メッセージを生成します。</p>

表 8 設定プロパティ (続き)

プロパティ	適用可能な WebLogic バージョン	必須/ 条件付/ オプション	説明
COLLECT_METADATA	9.x、10.x	条件付 JMX Metric Builder ツール MBean Explorer を使用する 場合に必要です。	COLLECT_METADATA の値を <b>on</b> に設定すると、JMX Metric Builder ツールで表示されるメタデータ (MBean 情報) が収集されます。このメタデータを使用して UDM (ユーザー定義メトリック) が作成されます。  各 MBean サーバー用のメタデータは、以下のファイルに保存されます。/var/opt/OV/wasspi/wls/metadata/ <managed_node>/<NAME  ALIAS>.xml, /var/opt/OV/metadata/wls/ <managed_node>/<NAME  ALIAS>.xml, or <Agent_Dir>\wasspi\wls\ metadata\<managed_node>\ <NAME  ALIAS>.xml ここで NAME および ALIAS は管理対象ノードに対して設定されるプロパティで、ALIAS が設定されている場合、常にその名前が使用されます。  デフォルト: OFF
EXCLUDE_SAMPLES	9.x、10.x	オプション	この値を <b>true</b> に設定すると、WebLogic Server サンプルプログラムを検出しません。これにより、検出プロセスにかかる時間が短縮されます。サンプルプログラムは、以下のディレクトリにあります。  WebLogic 9.x、10.x の場合 <WL_Install_Dir>/samples/domains/ medrec  デフォルト: false  例: EXCLUDE_SAMPLES = true
GRAPH_URL	9.x、10.x	条件付 View Graphs ツールを使用 する場合に必要です (HP Open View Performance Manager のインストールが 必要)。	HP Performance Manager の起動に使用する URL。GRAPH_URL プロパティはグローバルレベルでのみ設定します。  例: GRAPH_URL = http:// <server_name>:<port_no>/OVPM (UNIX および Windows の場合は PM 8.10) で、デフォルト番号は 8081 です。
HOME	9.x、10.x	必須	WebLogic Server がインストールされているディレクトリ。  例: HOME = /opt/boa/wlserver6.0sp1

表 8 設定プロパティ (続き)

プロパティ	適用可能な WebLogic バージョン	必須/ 条件付/ オプション	説明
HOME_LIST	9.x、10.x	必須	<p>WebLogic Server がインストールされているディレクトリのリスト。各ディレクトリはセミコロンで区切られます。このリストは検出で使用されます。</p> <p>UNIX 管理対象ノード上では、スペースを含むディレクトリ名はサポートされていません。</p>
JAVA_HOME	9.x、10.x	必須	<p>コレクタで使用される Java がインストールされているディレクトリ。Java エンジンは、\$JAVA_HOME/bin/java にあります。</p> <p>例: JAVA_HOME = /opt/bea/jdk130</p>
JMB_JAVA_HOME	なし	条件付 JMX Metric Builder を使用している場合に必要です。	<p>Java (JDK 1.5 以上) がインストールされているディレクトリ。これは、HPOM 管理サーバー上で JMX Metric Builder が使用する Java です。JDK のバージョンは 1.5 以上でなければなりません。</p>
KEYSTORE	9.x、10.x	条件付 SSL を使用する場合に必要です。	<p>SSL トラスト キーストア ファイルへの完全修飾パス。</p> <p>デフォルト: WebLogic のデモ キーストア</p>
LOGFILE	9.x、10.x	条件付 WebLogic Server が返すログ ファイル名が、監視したいログ ファイル名ではない場合にのみ必要です。	<p>WebLogic Server ログ ファイルの完全修飾パスで指定されたファイル名をコンマ区切りで記述したリスト。</p> <p>指定したサーバー上のログファイルに対する監視に関して、このプロパティでの設定が優先されます。これにより、このプロパティが設定されていない場合に監視されるログファイルが監視対象外となることがあります。</p> <p>デフォルト: &lt;home&gt;/&lt;NAME&gt;/weblogic.log</p>
LOGIN	9.x、10.x	必須	<p>インストールで設定された WebLogic Server admin ユーザー。</p> <p>例: SERVER1_LOGIN = johndoe</p>
NAME <sup>a</sup>	9.x、10.x	必須	<p>WebLogic Server で定義されるサーバー名。WebLogic Administration Console を使用して、この情報を入手します。システムが同じサーバー名を共有する (NAME の値が NODE ブロック内で同じ) 場合、ALIAS を使用して各サーバーを一意に識別します。ALIAS が設定されていない場合、この同じサーバー名がメッセージ、レポート、およびグラフで使用されます。</p> <p>例: SERVER1_NAME = exampleServer</p>

表 8 設定プロパティ (続き)

プロパティ	適用可能な WebLogic バージョン	必須/ 条件付/ オプション	説明
NODE_NAMES	9.x、10.x	条件付 リモート WebLogic Server が仮想 IP アドレスで動作している場合に必要です。	サーバーがリスンしている仮想 IP アドレス。NODE_NAME がリモート WebLogic Server に設定されていない場合は、自動的に検出されません。 例: SERVER1_NODE_NAMES = 15.19.20.21
NUM_SERVERS	9.x、10.x	オプション	管理対象ノード上の WebLogic Server の数。 例: NUM_SERVERS = 3
PASSPHRASE	9.x、10.x	条件付 設定されているキーストアが読み取り操作にパスワードを要する場合に必要です。	WebLogic Server 上にキーストアが作成されたときに定義されたパスフレーズ。キーストアをパスワード付きで定義しなかった場合は、このプロパティは設定しません。 PASSPHRASE に入力すると、GUI では平文 (タイプした通りのテキスト) で表示されます。プロパティの保存や GUI の表示変更を行うと、PASSPHRASE は暗号化されます。 PASSPHRASE には最低 2 文字を含める必要があります。
PASSWORD	9.x、10.x	必須	LOGIN のためのパスワード。LOGIN が設定されている場合、パスワードを定義する必要があります。 例: SERVER1_PASSWORD = johndoe123
PORT	9.x、10.x	必須	WebLogic Server がリスンするポート。WebLogic Administration Console を使用して、ポート番号を入手します。 例: SERVER1_PORT = 7001
PROTOCOL	9.x、10.x	条件付 アプリケーション サーバー ポートで SSL を使用している場合に必要です。	アプリケーション サーバー ポートが SSL または非 SSL を使用している場合に指定します。有効な値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>t3 (非 SSL)</li> <li>t3s (SSL)</li> </ul> PROTOCOL を設定しない場合、デフォルトの t3 が使用されます。PROTOCOL を設定して [Set Property] をクリックすると、デフォルト値は t3s に設定されます。 無効な PROTOCOL を設定した場合や、PROTOCOL がアプリケーション ポートと一致しない場合、HPOM はアプリケーション サーバーが停止中であるとレポートします。

表 8 設定プロパティ (続き)

プロパティ	適用可能な WebLogic バージョン	必須/ 条件付/ オプション	説明
RMID_START_TIME	9.x、10.x	条件付 rmid の起動に 30 秒以上かかる場合に必要です。	rmid の起動のタイムアウト時間 (秒)。 デフォルト: 30 (秒) 例: RMID_START_TIME = 60
START_CMD	9.x、10.x	条件付 HPOM コンソールから WebLogic Server を起動する場合に必要です。	このシステム コマンドは、 <b>Start WebLogic</b> ツール用時に実行します。また、このコマンドは <b>USER</b> により実行されます。 <b>Start WebLogic</b> ツールを動作させるには、 <b>USER</b> を設定しておく必要があります。 <b>注意:</b> このコマンドは終了する必要がありません。したがって、 <b>WebLogic Server</b> プロセスはバックグラウンドで、またはサービスとして実行してください。親プロセスが強制終了されないように保護する必要があります。 例: SERVER1_START_CMD = /sbin/init.d/weblogic start
STOP_CMD	9.x、10.x	条件付 HPOM コンソールから WebLogic Server を停止する場合に必要です。	このシステム コマンドは、 <b>Stop WebLogic</b> ツール用時に実行します。また、このコマンドは <b>USER</b> により実行されます。 <b>Start WebLogic</b> ツールを動作させるには、 <b>USER</b> を設定しておく必要があります。 例: SERVER1_STOP_CMD = /sbin/init.d/weblogic stop
TIMEOUT	9.x、10.x	オプション	WebLogic SPI が WebLogic Server に接続を試行することが可能な時間の最大値 (秒単位)。指定された時間を超えた場合、WebLogic SPI はメッセージブラウザに WebLogic Server が利用できないことを示す警告通知を送信します。メトリック <b>B002_ServerStatusRep</b> が収集されると、サーバーの利用不能状況がログ記録されます。 時間制限が不要である場合は、このプロパティを <b>-1</b> に設定します。 デフォルト: 120 (秒)

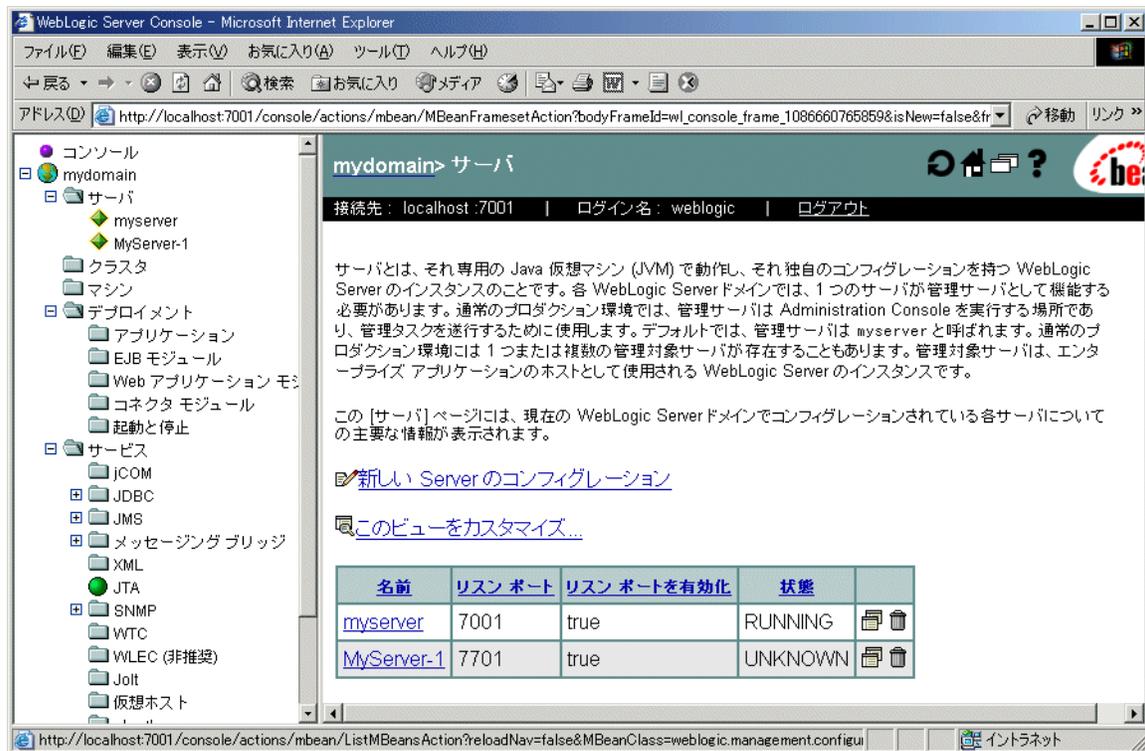
表 8 設定プロパティ (続き)

プロパティ	適用可能な WebLogic バージョン	必須/ 条件付/ オプション	説明
UDM_DEFINITIONS_SOURCE	9.x、10.x	オプション	<p>HPOM 管理サーバー上のメトリック定義 XML ファイルへのパス名、またはこのファイルのファイル名。パス名が設定されていると、wasspi_wls_udmDefinitions.xml ファイルは UDM ファイルのファイル名と見なされます。</p> <p><b>デフォルト:</b> /opt/OV/conf/wlsspi/wasspi_wls_udmDefinitions.xml.</p> <p><b>例:</b> SERVER1_UDM_DEFINITIONS_SOURCE = /opt/OV/conf/wlsspi/udm.xml</p>
URL_PATH	9.x、10.x	条件付	<p>JSR-160 コネクタ サーバーの URL のパス部分。</p> <p><b>例:</b> SERVER1_URL_PATH=jndi/weblogic.management.mbeanservers.domainruntime</p>
USER	9.x、10.x	条件付 HPOM コンソールから WebLogic Server を起動または停止する場合に必要です。	<p>HPOM コンソールから WebLogic Server の起動と停止を行うためのシステム ユーザー名。</p> <p><b>デフォルト:</b> HP Operations エージェントが実行するユーザー名です。</p> <p><b>例:</b> USER = weblogic</p>

表 8 設定プロパティ (続き)

プロパティ	適用可能な WebLogic バージョン	必須/条件付/オプション	説明
VERSION	9.x、10.x	条件付	<p><i>Major#</i> [<i>Minor#</i>] 形式の WebLogic Server のバージョン番号。</p> <p><i>Major#</i>: プライマリ バージョン番号 (例: 10.0)</p> <p><i>Minor#</i>: インストールされたサービス パック (例: SP1 の場合 1)。<i>Minor#</i> が指定されていない場合は、デフォルトの 0 に設定されます (サービス パックはインストールされません)。</p>

- a. WebLogic Administration Console には、ドメインにあるすべての設定されたアプリケーションのサーバー名とポート番号が表示されます。NAME と PORT を定義する場合に、これらの名前と番号を使用します。



# サンプル設定

以下の例では、さまざまな機能と使用方法が示されています。

## 例 1: 単一のノード / 2 つのサーバー

以下の例は、単一のノードで管理サーバーと管理対象サーバーの 2 つのサーバーを実行するためのものです。プロパティ **HOME** と **JAVA\_HOME** は、すべてのサーバーとノードに適用するグローバル デフォルトです。設定が保存されると、パスワードは暗号化されます。

```
HOME = /opt/bea/wlserver_10
JAVA_HOME=/opt/bea/jdk131
NODE main.rose.hp.com
{
  SERVER1_NAME= adminserver
  SERVER1_PORT= 7001
  SERVER1_LOGIN= system
  SERVER1_PASSWORD = password
  SERVER2_NAME= managedserver
  SERVER2_PORT= 7005
  SERVER2_LOGIN= system
  SERVER2_PASSWORD= password
}
```

## 例 2: 複数のノード/繰り返されるプロパティ

以下の例は、多くのプロパティが共通している関連システムのグループを設定する方法を示しています。ただし、異なる設定が必要なプロパティを 1 つか 2 つ含むノードもあります。このような状況には、以下の 2 つの手順で対応できます。

- 1 設定エディタの **[Add Group]** アクションを使用してグループに名前を付け、その中のノードを指定して、設定プロパティを設定します。詳細については、[Add Group \(133ページ\)](#) を参照してください。
- 2 設定エディタの **[Add Node]** アクションを使用して、個々のノードのプロパティを定義します(グループにないノード、または一意のプロパティあるいは別のプロパティを持つグループにあるノード、のいずれか)。詳細については、[Add Node \(133ページ\)](#) を参照してください。

 ノードに設定されたプロパティは、グループに設定された同じプロパティよりも優先されます。プロパティの優先順位の完全な順序については、[プロパティ優先順位 \(128ページ\)](#) を参照してください。

例では、グローバル デフォルト プロパティ **HOME** および **JAVA\_HOME** がノード **europa.rose.hp.com** の場合を上書きされます。起動コマンドでシステム初期化コマンド `-/sbin/init.d/weblogic start` (システムが起動してすべての **WebLogic Server** を開始するときに行われるコマンド) を使用するの、**USER** を **root** に設定する必要があります。この環境で、このコマンドは **weblogic** などの適正なユーザーによるサーバーの起動を扱います。

```
HOME = /opt/bea/wlserver_10
JAVA_HOME = /opt/bea/jdk131
USER    = root
GROUP production
{
    mercury.hp.com
    venus.hp.com
    mars.hp.com
    jupiter.hp.com
}
NODE production
{
    SERVER1_NAME= partsserver
    SERVER1_PORT= 7001
    SERVER1_LOGIN= system
    SERVER1_PASSWORD= password
    SERVER1_ADMIN_HOST= earth.rose.hp.com
    SERVER1_ADMIN_PORT= 7001
    SERVER1_START_CMD /sbin/init.d/weblogic start
    SERVER2_NAME= orderserver
    SERVER2_PORT= 7010
    SERVER2_LOGIN= system
    SERVER2_PASSWORD= moresecret
    SERVER2_START_CMD /sbin/init.d/weblogic start
}
NODE jupiter.rose.hp.com
{
    SERVER1_PASSWORD= different1password
    SERVER2_PASSWORD= different2password
}
NODE europa.hp.com
{
    SERVER1_HOME = /opt/bea/wls
```

```

SERVER1_JAVA_HOME = /opt/bea/jdk132
SERVER1_NAME= testserver
SERVER1_PORT= 7100
SERVER1_LOGIN= system
SERVER1_PASSWORD= mypassword
}

```

### 例 3: 複数の WebLogic Server バージョン

この例では、単一の管理対象ノード上で 2 つの異なるバージョンの **WebLogic Server** を実行する環境を設定する方法を示しています。**SERVER1\_HOME** と **SERVER2\_HOME** は、**WebLogic Server** の異なるバージョンでは異なるディレクトリに設定されることに注意します。

```

NODE callisto.hp.com
{
  SERVER1_HOME = /opt/bea/weblogic90
  SERVER1_JAVA_HOME = /opt/bea/jdk131
  SERVER1_NAME= prodserver
  SERVER1_PORT= 7001
  SERVER1_LOGIN= system
  SERVER1_PASSWORD= mypassword
  SERVER1_HOME = /opt/bea/wlserver_10
  SERVER1_JAVA_HOME = /opt/bea/jdk131
  SERVER1_NAME= testserver
  SERVER1_PORT= 7100
  SERVER1_LOGIN= system
  SERVER1_PASSWORD= mypassword
}

```

### 例 4: 仮想 IP アドレスを持つ WebLogic Server

この例では、仮想 IP アドレスを持つ複数の **WebLogic Server** の設定方法を示します。**ADDRESS** は、サーバーがリスンしている名前または IP アドレスに設定されます。

```

NODE saturn.hp.com
{
  SERVER1_HOME = /opt/bea/weblogic90
  SERVER1_JAVA_HOME = /opt/bea/jdk131
  SERVER1_NAME= partserver
  SERVER1_PORT= 7001
  SERVER1_ADDRESS= juno.rose.hp.com
  SERVER1_LOGIN= system
  SERVER1_PASSWORD= mypassword
  SERVER2_HOME = /opt/bea/wlserver_10
  SERVER2_JAVA_HOME = /opt/bea/jdk131
  SERVER2_NAME= orderserver
  SERVER2_PORT= 7001
  SERVER2_ADDRESS= 15.15.1.1
  SERVER2_LOGIN= system
  SERVER2_PASSWORD= mypassword
}

```

## 例 5: デフォルト以外の WebLogic Server の起動場所

この例は、**WebLogic Server** を起動するコマンドが起動する前に **HOME** ディレクトリにディレクトリを変更しない場合を扱っています。**WebLogic SPI** は、監視するために **WebLogic Server** のログ ファイルの場所を検索することはできません。**WebLogic SPI** がログ ファイルを監視できることを確認するには、例に示されているように、サーバーを実行するディレクトリが **neptune** 上にあるとして **LAUNCH\_DIR** を設定するか、または **pluto** 上にあるとして **LOGFILES** を設定します。

```
NODE neptune.hp.com
{
  SERVER1_HOME = /opt/bea/wlserver_10
  SERVER1_JAVA_HOME = /opt/bea/jdk131
  SERVER1_NAME= exampleServer
  SERVER1_PORT= 7001
  SERVER1_LOGIN= system
  SERVER1_PASSWORD= mypassword
  SERVER1_LAUNCH_DIR = /home/weblogic
}
NODE pluto.hp.com
{
  SERVER1_HOME = /opt/bea/wlserver_10
  SERVER1_JAVA_HOME = /opt/bea/jdk131
  SERVER1_NAME= exampleServer
  SERVER1_PORT= 7001
  SERVER1_LOGIN= system
  SERVER1_PASSWORD= mypassword
  SERVER1_LOGFILES =
/opt/bea/wlserver_10/config/mydomain/logs/weblogic.log,
/opt/bea/wlserver_10/config/mydomain/logs/wl-domain.log
}
```



**SERVER1\_LOGFILES** は、コマンドで区切られた長い 1 行で設定されています。

## C エラー メッセージ

WebLogic SPI エラー メッセージには、次の情報が含まれます。

- エラー メッセージ番号
- 説明
- 重要度
- ヘルプ テキスト (原因と処置)

エラー メッセージは、**HPOM** メッセージ ブラウザから表示できます。エラー メッセージをダブルクリックして、メッセージを開きます。[メッセージのプロパティ] ウィンドウが表示されます。[メッセージ テキスト] タブをクリックして、エラー メッセージを表示します。

## WASSPI-1

説明	ロック ファイル <filename> を作成できません。ファイルはすでに存在します。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>一時ロック ファイルは、複数の WebLogic SPI データ コレクタ プロセスが同じデータ ファイルにアクセスしようとして起こる衝突を避けるために使用されます。このエラーは、ファイルがすでに存在するために、アクセスを数回試行してもロック ファイルを作成できない場合に発生します。</p> <p><b>処置</b></p> <p>同じ名前のファイルがすでに存在する場合、このファイルは WebLogic SPI データ コレクタを前回実行したときに削除されていません。手動で削除する必要があります。</p>

## WASSPI-2

説明	SPI 設定にアクセスできません。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>WebLogic SPI 設定ファイルが見つからなかったか、またはアクセスできませんでした。ファイルが存在しないか、またはファイルの読み取りに問題があります。</p> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 <b>[SPI Admin] → [Verify]</b> ツールを実行することによって、WebLogic SPI が正しく設定されていることを確認します。設定が正しくない場合は、<b>[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。</li><li>2 WLSSPI エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、問題の根本的な原因 (I/O 例外など) を特定します。<b>[SPI Admin] → [View Error File]</b> ツールを使用することによって、管理対象ノードの SPI エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付やタイムスタンプで識別できます。</li></ol>

## WASSPI-3

説明	コマンド行を解析しているときにエラーが発生しました。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>WebLogic SPI データ コレクタ コマンド行がモニタ ポリシーで誤って指定されています。</p> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 WLSSPI エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、問題の根本的な原因 (I/O 例外など) を特定します。[SPI Admin] → [View Error File] ツールを使用することによって、管理対象ノードの SPI エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付やタイムスタンプで識別できます。</li><li>2 誤ったコマンド行を含むポリシーを修正して、再配布します。WebLogic SPI データ コレクタ コマンド行の詳細は、『HP Operations Smart Plug-in for BEA WebLogic Server 設定ガイド』を参照してください。</li></ol>

## WASSPI-4

説明	メトリック定義でエラーが発生しました。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>WebLogic SPI データ コレクタは、メトリック定義 XML ドキュメントを読み取れませんでした。このエラーは、設定プロパティの欠落、I/O エラー、XML 解析エラー、ファイルの欠落、または直列化データファイルの破損によって発生します。</p> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 WLSSPI エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、問題の根本的な原因 (I/O 例外など) を特定します。[SPI Admin] → [View Error File] ツールを使用することによって、管理対象ノードの SPI エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付やタイムスタンプで識別できます。</li><li>2 UDM_DEFINITIONS_FILE プロパティが WLSSPI 設定ファイルからなくなっている場合は、[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI] ツールを実行して、このプロパティの値を設定します。</li><li>3 SPI for WebLogic に出荷時から含まれているメトリック定義ファイル (MetricDefinitions.xml) に問題がある場合は、SPI for WebLogic を再インストールします。[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI] ツールを実行します。</li><li>4 SPI for WebLogic に出荷時は含まれていなかったユーザー定義メトリック定義ファイルに問題がある場合は、この XML ファイルが MetricDefinitions.dtd の仕様に従っていることを確認します。ユーザー定義メトリックを記述する詳細は、『HP Operations Smart Plug-in for BEA WebLogic Server 設定ガイド』を参照してください。独自に作成したユーザー定義メトリック定義ファイルを再インストールします。[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI] ツールを実行して、SPI 設定内の UDM_DEFINITIONS_FILE プロパティが正しく指定されていることを確認します。</li><li>5 根本的なエラーが ClassNotFoundException である場合は、内部エラーです。HP のサポート担当者へ報告してください。</li></ol>

## WASSPI-5

説明	メトリック <metric_number> を処理しているときにエラーが発生しました。
重要度	重要警戒域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>データの収集または指定されたメトリックの計算をしようとしてエラーが発生しました。</p> <p><b>処置</b></p> <p>WLSSPI エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、問題の根本的な原因を特定します。このエラー メッセージの前のエラー メッセージにも、問題の詳細が表示されている場合があります。</p> <p><b>[SPI Admin] → [View Error File]</b> ツールを使用することによって、管理対象ノードの SPI エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付やタイムスタンプで識別できます。</p>

## WASSPI-6

説明	必要なプロパティ <property_name> が WebLogic SPI の設定から欠落しています。
重要度	重要警戒域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>指定した必要なプロパティが WebLogic SPI 設定ファイルから欠落しています。</p> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 <b>[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。この管理対象ノード上の WebLogic Server に正しいサーバー情報を指定されていることを確認します。</li><li>2 問題になっている管理対象ノード上の WebLogic SPI 設定ファイルで、対象のプロパティが正しく指定されていることを確認します (この設定ファイルは、UNIX プラットフォーム上では /var/opt/OV/wasspi/wls/conf/SiteConfig、Windows プラットフォーム上では %OvAgentDir%\wasspi\wls\conf\SiteConfig にあります)。</li></ol>

## WASSPI-7

説明	サーバー <server_name> (url=<URL>、port=<ポート>) に接続できません。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>指定されたサーバーは、指定されたポートで動作していません。</p> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 <b>[SPI Admin]</b> → <b>[Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。この管理対象ノード上の <b>WebLogic Server</b> に正しいサーバー情報を指定されていることを確認します。</li><li>2 問題になっている管理対象ノード上の <b>WebLogic SPI</b> 設定ファイルで、対象のプロパティ <b>SERVERx_NAME</b> および <b>SERVERx_PORT</b> が正しく指定されていることを確認します (この設定ファイルは、<b>UNIX</b> プラットフォーム上では /var/opt/OV/wasspi/wls/conf/SiteConfig、<b>Windows</b> プラットフォーム上では %OvAgentDir%\wasspi/wls/conf/SiteConfig にあります)。</li><li>3 <b>WebLogic Server</b> がその管理対象ノード上で動作していることを確認します。</li></ol>

## WASSPI-8

説明	ファイル <file_name> にグラフ作成データまたはレポート作成データを保存しているときにエラーが発生しました。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>指定されたグラフ作成データ ファイルまたはレポート作成データ ファイルが見つからなかったか、またはファイルへアクセスしようとして <b>I/O</b> エラーが発生しました。</p> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 <b>WLSSPI</b> エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、問題の根本的な原因を特定します。<b>[SPI Admin]</b> → <b>[View Error File]</b> ツールを使用することによって、管理対象ノードの <b>WLSSPI</b> エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付やタイムスタンプで識別できます。</li><li>2 ステップを特定して、問題を再現します。</li><li>3 <b>[SPI Admin]</b> → <b>[Start Tracing]</b> ツールを実行して、トレース機能をオンにします。問題を再現させます。</li><li>4 <b>[SPI Admin]</b> → <b>[Self-Healing Info]</b> ツールを実行します。このツールによって収集される情報を <b>HP</b> のサポート担当者に連絡してください。</li></ol>

## WASSPI-9

説明	プロパティ <property_name> を検索できません。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>必要なプロパティが WebLogic SPI 設定ファイルのいずれかから欠落しています。</p> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 WLSSPI エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、問題の根本的な原因を特定します。<b>[SPI Admin] → [View Error File]</b> ツールを使用することによって、管理対象ノードの WLSSPI エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付やタイムスタンプで識別できます。</li><li>2 <b>[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。問題になっている管理対象ノード上の WebLogic Server について正しい情報が指定されていることを確認します。</li><li>3 問題になっている管理対象ノード上の WebLogic SPI 設定ファイルで、欠落していたプロパティが指定されていることを確認します (この設定ファイルは、UNIX プラットフォーム上では /var/opt/OV/wasspi/wls/conf/SiteConfig、Windows プラットフォーム上では %OvAgentDir%\wasspi\wls\conf\SiteConfig にあります)。</li></ol>

## WASSPI-10

説明	ファイル <filename> へのアクセスで問題が発生しました。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>指定されたファイルは見つからないか、作成できないか、またはアクセスできません。このファイルは一時ファイルである可能性があります。</p> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 WLSSPI エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、問題の根本的な原因を特定します。<b>[SPI Admin] → [View Error File]</b> ツールを使用することによって、管理対象ノードの WLSSPI エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付やタイムスタンプで識別できます。</li><li>2 一時ファイルを作成するために十分なディスク領域があることを確認します。</li></ol>

## WASSPI-11

説明	WebLogic SPI の設定ファイルで、サーバーが指定されていません。
重要度	重要警戒域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>問題になっている管理対象ノードの WebLogic SPI の設定で指定されている WebLogic Server の数が 0 です。</p> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 <b>[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。この管理対象ノード上の WebLogic Server について正しいサーバー名とポート 情報が指定されていることを確認します。</li><li>2 WebLogic SPI 設定ファイル内の NUM_SERVERS プロパティで、対象の管理対象ノード上の WebLogic Server の数が正しく指定されていることを確認します (この設定ファイルは、UNIX プラットフォーム上では /var/opt/OV/wasspi/wls/conf/SiteConfig、Windows プラットフォーム上では %OvAgentDir%\wasspi\wls\conf\SiteConfig にあります)。</li></ol>

## WASSPI-12

説明	コマンド <command> がエラー終了コード <exit code> を返しました。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>WebLogic SPI コレクタが開始したコマンドが、エラー (0 以外) 終了コードを返しました。</p> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 ステップを特定して、問題を再現します。</li><li>2 <b>[SPI Admin] → [Start Tracing]</b> ツールを実行して、トレース機能をオンにします。</li><li>3 問題を再現します。</li><li>4 <b>[SPI Admin] → [Stop Tracing]</b> ツールを実行して、トレース機能をオフにします。</li><li>5 <b>[SPI Admin] → [Self-Healing Info]</b> ツールを実行します。このツールによって収集される情報を HP のサポート担当者に連絡してください。</li></ol>

## WASSPI-13

説明	opcmon プロセスを実行中に例外が発生しました。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>WebLogic SPI データ コレクタはプロセスを実行して、opcmon を呼び出そうとしました。しかし、プロセスを作成できなかったか、またはプロセスが中断されました。</p> <p><b>処置</b></p> <p>UNIX システムで、カーネル設定パラメータ NPROC と MAXUPRC が十分大きな値に設定されていて、プロセスの作成が可能であることを確認します。</p>

## WASSPI-14

説明	ファイル <filename> が見つかりません。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>WebLogic SPI データ コレクタが要求したファイルは見つかりませんでした。</p> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 WLSSPI エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、問題の根本的な原因を特定します。<b>[SPI Admin] → [View Error File]</b> ツールを使用することによって、管理対象ノードの WLSSPI エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付やタイムスタンプで識別できます。</li><li>2 この管理対象ノード上で <b>[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。</li></ol>

## WASSPI-15

説明	XML ドキュメント <filename> を解析しているときにエラーが発生しました。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>指定された XML ドキュメントを解析しているときにエラーが発生しました。</p> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 WLSSPI エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、問題の根本的な原因を特定します。<b>[SPI Admin] → [View Error File]</b> ツールを使用することによって、管理対象ノードの WLSSPI エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付やタイムスタンプで識別できます。</li><li>2 ユーザーが XML ドキュメントを作成した場合は、その文書を修正します。ユーザー定義のメトリック定義ドキュメントの正しい形式については、『<i>HP Operations Smart Plug-in for BEA WebLogic Server 設定ガイド</i>』を参照してください。</li><li>3 XML ドキュメントが WLSSPI で出荷されたドキュメントである場合、<b>[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行して、WLSSPI 設定ファイルを再インストールします。</li></ol>

## WASSPI-16

説明	メトリック <metric_number> に誤ったフィルタが指定されました。
重要度	重要警戒域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>メトリック フィルタがメトリック定義 XML ドキュメントで誤って指定されています。</p> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 ユーザーが作成した XML ドキュメントでメトリックが指定されている場合は、そのドキュメントを修正します。ユーザー定義のメトリック定義ドキュメントの正しい形式については、『<i>HP Operations Smart Plug-in for BEA WebLogic Server 設定ガイド</i>』を参照してください。</li><li>2 メトリックが WebLogic SPI で出荷された定義済みのメトリックである場合、<b>[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行して、WLSSPI 設定ファイルを再インストールします。</li></ol>

## WASSPI-17

説明	サーバー <server_name> (url=<URL>、port=<port_number>) の MBean サーバーにアクセスできませんでした。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>WebLogic SPI データ コレクタが WebLogic Server 上の JMX MBean サーバーへのアクセスを要求している間に問題が発生しました。この問題の原因を以下に示します。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 アプリケーション サーバー上の JMX MBean サーバーを探す JNDI ルックアップに失敗しました。</li><li>2 WebLogi SPI の設定で指定されているログイン名には、アプリケーション サーバーでの適切な権限がありません。</li><li>3 WebLogic SPI 設定ファイルで指定されているパスワードが誤っています。</li></ol> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 WLSSPI エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、問題の根本的な原因を特定します。<b>[SPI Admin] → [View Error File]</b> ツールを使用することによって、管理対象ノードの WLSSPI エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付やタイムスタンプで識別できます。</li><li>2 <b>[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。問題になっているサーバーのログイン名とパスワードが正しいことを確認します。</li><li>3 WebLogic Administration Console で、ユーザーは有効な WebLogic ユーザーで、正しい権限を持っていることを確認します。正しい権限を設定するには、『<i>HP Operations Smart Plug-in for BEA WebLogic Server 設定ガイド</i>』を参照してください。</li><li>4 WebLogic Administration Console で、MBean サーバー (weblogic.management.home.&lt;server_name&gt;) が問題となっているサーバーの JNDI ツリーにあることを確認します。左側のペインにあるサーバーを右クリックすると、JNDI ツリーが表示されます。ここに JNDI ツリーがない場合は、WebLogic Server を再起動します。</li></ol>

## WASSPI-18

説明	データソース <datasource_class_name> へのログ記録時にエラーが発生しました。ログ記録プロセスが終了コード <exit_code> を返しました。
重要度	注意域
指示文	<p>原因</p> <p>WebLogic SPI データ コレクタが開始した ddflag プロセスが、0 以外のエラー コードを返しました。</p> <p>処置</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 ステップを特定して、問題を再現します。</li><li>2 <b>[SPI Admin] → [Start Tracing]</b> ツールを実行して、トレース機能をオンにします。問題を再現させます。</li><li>3 <b>[SPI Admin] → [Self-Healing Info]</b> ツールを実行します。このツールによって収集される情報を HP のサポート担当者に連絡してください。</li></ol>

## WASSPI-19

説明	<filename> の XSLT トランスフォーマのインスタンス作成で問題が発生しました。
重要度	重要警戒域
指示文	<p>原因</p> <p>自動アクション レポート出力を指定している XSL ドキュメントにエラーが含まれています。</p> <p>処置</p> <p>管理対象ノード上で <b>[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。</p>

## WASSPI-20

説明	メトリック <metric_number> のレポート作成で問題が発生しました。
重要度	重要警戒域
指示文	<p>原因</p> <p>指定されたメトリックのテキスト レポート作成中にエラーが発生しました。</p> <p>処置</p> <p>管理対象ノード上で <b>[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。</p>

## WASSPI-21

説明	ファクトリ実装<class name>をインスタンス化するときに問題が発生しました。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>クラス名を指定する java プロパティに誤りがあるか、このクラスが <b>AppServerFactory</b> インタフェースを実装していません。</p> <p><b>処置</b></p> <p>java プロパティ appserver.implementation に、<b>AppServerFactory</b> インタフェースを実装するクラスの完全修飾名が設定されていることを確認します。</p> <p>java コマンド行で設定する場合の例を示します。</p> <pre>-Dappserver.implementation=com.hp.openview.wasspi.WLSAppServerFactory</pre>

## WASSPI-23

説明	サーバー <server_name> のコレクタ/アナライザの初期化時にエラーが発生しました。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>サーバー &lt;server_name&gt; の監視の準備中に例外が発生しました。</p> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 WLSSPI エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、問題の根本的な原因を特定します。<b>[SPI Admin] → [View Error File]</b> ツールを使用することによって、管理対象ノードの WLSSPI エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付やタイムスタンプで識別できます。</li><li>2 ステップを特定して、問題を再現します。</li><li>3 <b>[SPI Admin] → [Start Tracing]</b> ツールを実行して、トレース機能をオンにします。問題を再現させます。</li><li>4 <b>[SPI Admin] → [Self-Healing Info]</b> ツールを実行します。このツールによって収集される情報を HP のサポート担当者に連絡してください。</li></ol>

## WASSPI-24

説明	サーバー <server_name> (ログイン <login>) へのログインでエラーが発生しました。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>サーバー &lt;server_name&gt; へのログイン中にセキュリティの例外が発生しました。</p> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 エラーが発生した管理対象ノードで <b>[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行して、正しいログインおよびパスワードのプロパティを指定していることを確認します。</li><li>2 ログインに必要な権限が与えられていることを確認します。</li></ol>

## WASSPI-26

説明	<server_name> のデータ ログ記録プロセスがタイムアウトになりました。
重要度	重要警戒域
指示文	<p>原因</p> <p>HP Performance Agent または CODA のいずれか (サーバーの設定による) が異常終了し、タイムアウトになりました。</p> <p>処置</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 コマンド <code>opcagt -start</code> を使用して CODA を再起動します。</li><li>2 コマンド <code>mwa restart</code> を使用して HP Performance Agent を再起動します。</li></ol>

## WASSPI-27

説明	RMI コレクタが <command> を処理できません。
重要度	注意域
指示文	<p>原因</p> <p>rmid 関連の処理を実行するときに例外が発生しました。</p> <p>処置</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 WLSSPI エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、問題の根本的な原因を特定します。[SPI Admin] → [View Error File] ツールを使用することによって、管理対象ノードの WLSSPI エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付やタイムスタンプで識別できます。</li><li>2 ステップを特定して、問題を再現します。</li><li>3 [SPI Admin] → [Start Tracing] ツールを実行して、トレース機能をオンにします。問題を再現させます。</li><li>4 [SPI Admin] → [Self-Healing Info] ツールを実行します。このツールによって収集される情報を HP のサポート担当者に連絡してください。</li></ol>

## WASSPI-28

説明	ポート <port> 上の RMID が <status> になっています。
重要度	正常

## WASSPI-29

説明	Java ホーム <path> のコレクタ サーバー <server id> が起動しました。
重要度	正常

## WASSPI-30

説明	ポート <port> で <rmid_path> の起動に失敗しました。
重要度	危険域
指示文	<p>原因</p> <p>指定されたパスはすでに使用されています。</p> <p>処置</p> <p>[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI] ツールを実行します。RMID_PORT プロパティに現在使用していないポート番号を設定します。</p>

## WASSPI-31

説明	<command> の処理中に RMI コレクタとの接続が切断されました。
重要度	注意域

## WASSPI-32

説明	MBean <JMX-ObjectName> のメタデータを取得できません。
重要度	注意域

## WASSPI-33

説明	サーバー <server name>、バージョン <version> が一致するアクションが存在しません。
重要度	注意域
指示文	<p>原因</p> <p>JMXAction 要素で定義された FromVersion タグと ToVersion タグの値が、サーバー バージョンと一致していません。</p> <p>処置</p> <p>そのアクションがサーバーで有効な場合、JMXAction 定義の FromVersion/ToVersion 要素を調整するか、サーバーの VERSION プロパティを調整します。</p>

## WASSPI-34

説明	メトリック <i>&lt;metric id&gt;</i> にアクションが定義されていません。
重要度	注意域
指示文	<b>原因</b> アクション <i>-m</i> オプションで指定されたメトリック ID に <b>JMXActions</b> 要素が定義されていません。 <b>処置</b> 指定したメトリック ID に誤りがある場合は、アクション <i>-m</i> オプションを修正します。誤りでない場合は、メトリック定義に <b>JMXActions</b> 定義を追加します。

## WASSPI-35

説明	アクション <i>&lt;action command-line&gt;</i> の実行中にエラーが発生しました。
重要度	重要警戒域
指示文	<b>原因</b> アクションの実行中に予期しないエラーが発生しました。 <b>処置</b> 管理対象ノードのエラー ログで、エラー メッセージの後に記録された障害原因を確認します。

## WASSPI-36

説明	サーバー <i>&lt;server name&gt;</i> の MBean <i>&lt;JMX objectname&gt;</i> が、オペレーション <i>&lt;operation name&gt;</i> を公開しません。
重要度	注意域
指示文	<b>原因</b> アクションの <b>JMXCalls</b> 要素が、この MBean で公開されないオペレーションを定義しています。 <b>処置</b> <b>JMXCalls</b> 要素を修正するか、要素からオペレーションを削除します。

## WASSPI-37

説明	サーバー <server name> の MBean <JMX objectname> が、属性 <attribute name> を書き込み可能属性として公開しません。
重要度	注意域
指示文	<b>原因</b> アクションの JMXCalls 要素が、この MBean で公開された書き込み可能属性を読み取り専用属性として定義しています。 <b>処置</b> カスタム MBean の場合は、MBean の管理インタフェースを更新して属性を書き込み可能属性にします。 カスタム MBean でない場合は、JMXCalls 要素から属性定義を削除します。

## WASSPI-38

説明	サーバー <server name> の MBean <JMX objectname> が、属性 <attribute name> を公開しません。
重要度	注意域
指示文	<b>原因</b> アクションの JMXCalls 要素が、この MBean オブジェクトで公開されない属性を定義しています。 <b>処置</b> JMXCalls 要素を修正するか、要素から属性を削除します。

## WASSPI-39

説明	MBean <JMX objectname> でオペレーション <operation name> を呼び出すときにエラーが発生しました。
重要度	重要警戒域
指示文	<b>原因</b> この MBean のオペレーションを呼び出すときに予期しないエラーが発生しました。管理対象リソースが例外をスローした可能性があります。 <b>処置</b> 管理対象ノードのエラー ログで、エラー メッセージの後に記録された障害原因を確認します。

## WASSPI-40

説明	MBean <JMX objectname> の属性 <attribute name> を設定するときにエラーが発生しました。
重要度	重要警戒域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>この MBean の属性を設定するときに予期しないエラーが発生しました。管理対象リソースが例外をスローした可能性があります。</p> <p><b>処置</b></p> <p>管理対象ノードのエラー ログで、エラー メッセージの後に記録された障害原因を確認します。</p>

## WASSPI-41

説明	MBean <JMX objectname> から属性 <attribute name> を取得するときにエラーが発生しました。
重要度	重要警戒域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>この MBean から属性を取得するときに予期しないエラーが発生しました。管理対象リソースが例外をスローした可能性があります。</p> <p><b>処置</b></p> <p>管理対象ノードのエラー ログで、エラー メッセージの後に記録された障害原因を確認します。</p>

## WASSPI-42

説明	コマンド <command> の実行中にエラーが発生しました。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>WebLogic SPI コレクタにより起動されたコマンドでエラーが検出されました。</p> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 ステップを特定して、問題を再現します。</li><li>2 <b>[SPI Admin] → [Start Tracing]</b> ツールを実行して、トレース機能をオンにします。</li><li>3 問題を再現します。</li><li>4 <b>[SPI Admin] → [Stop Tracing]</b> ツールを実行して、トレース機能をオフにします。</li><li>5 <b>[SPI Admin] → [Self-Healing Info]</b> ツールを実行します。このツールによって収集される情報を HP のサポート担当者に連絡してください。</li></ol>

## WASSPI-43

説明	イベント <event-type> の公開中にエラーが発生しました。
重要度	重要警戒域
指示文	<b>原因</b> パブリッシャがメトリックまたは収集イベントを処理するときに予期しないエラーが発生しました。 <b>処置</b> 管理対象ノードのエラー ログで、エラー メッセージの後に記録された障害原因を確認します。

## WASSPI-201

説明	ファイル <filename> が見つかりません。
重要度	危険域
指示文	<b>原因</b> 設定ファイルが見つかりません。 <b>処置</b> <b>[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。エラーが発生した管理対象ノード上の WebLogic Server に、正しい情報が指定されていることを確認します。

## WASSPI-202

説明	ファイル <filename> を読み込めません。
重要度	危険域
指示文	<b>原因</b> <ol style="list-style-type: none"><li>1 ファイルを開くことができないか、またはファイルが見つかりません。</li><li>2 権限が正しくないか、またはディレクトリが破損しています。</li></ol> <b>処置</b> <ol style="list-style-type: none"><li>1 <b>[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。エラーが発生した管理対象ノード上の WebLogic Server に、正しい情報が指定されていることを確認します。</li><li>2 このファイルを読み込むための適切な権限が <b>HP Operations</b> エージェント ユーザーに付与されていることを確認します。</li></ol>

## WASSPI-203

説明	ファイル <filename> に書き込めません。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>権限が正しくないか、ファイルまたはディレクトリが破損しています。</p> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 <b>[SPI Admin]</b> → <b>[Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。エラーが発生した管理対象ノード上の <b>WebLogic Server</b> に、正しい情報が指定されていることを確認します。</li><li>2 このファイルを書き込むための適切な権限が <b>HP Operations</b> エージェント ユーザーに付与されていることを確認します。</li></ol>

## WASSPI-204

説明	opcmsg <message> を送信しようとしてエラーが発生しました。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>opcmsg の実行に問題がありました。opcmsg が欠落しているか、正しい実行権限がありません。</p> <p><b>処置</b></p> <p>WLSSPI-Messages ポリシーが管理対象ノードに配布されていることを確認します。</p>

## WASSPI-205

説明	opcmon <command> を送信しようとしてエラーが発生しました。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>opcmon の実行中に問題が発生しました。opcmon が欠落しているか、実行の権限がない (<b>HPOM</b> インストール エラー) か、またはシステム プロセス テーブルがいっぱいになっている可能性があります。</p> <p><b>処置</b></p> <p><b>HPOM</b> が正しくインストールされ、管理対象ノードに配布されていることを確認します。</p> <p>プロセス テーブルに空きがあることを確認します。プロセス テーブルに空きがない場合は、システム管理者にプロセス テーブルを増やすよう要請します。</p>

## WASSPI-206

説明	ディレクトリ <directory> を読み込めません。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>このディレクトリを読み込む権限が <b>HP Operations</b> エージェント ユーザーに付与されていないか、またはディレクトリが破損しています。</p> <p><b>処置</b></p> <p>このディレクトリについて、<b>HP Operations</b> エージェント ユーザーに適切な権限が付与されていることを確認します。</p>

## WASSPI-207

説明	<filename> を <filename> に移動できません。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 権限が不十分です。</li><li>2 ディスクの空き領域が不十分です。</li><li>3 ファイル テーブルに問題があります。</li></ol> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 <b>HP Operations</b> エージェント ユーザーの権限が正しいことを確認します。</li><li>2 ファイルを作成するために十分なディスクの空き領域があることを確認します。</li><li>3 <b>[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。</li></ol>

## WASSPI-208

説明	使用前に、WebLogic SPI を設定する必要があります。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>このノードでは、WebLogic SPI は設定されていません。</p> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 <b>[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。エラーが発生した管理対象ノード上の WebLogic Server に、正しい情報が指定されていることを確認します。</li><li>2 管理対象ノードで <b>[SPI Admin] → [Verify]</b> ツールを実行して、SPI が正しく設定されていることを確認します。</li></ol>

## WASSPI-209

説明	WebLogic Server にアクセスできません。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 サーバーが停止中か、または応答しません。</li><li>2 WebLogic SPI の設定が誤っています。</li></ol> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 WebLogic Server が正常に動作していることを確認します。</li><li>2 <b>[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。</li><li>3 管理対象ノードで <b>[SPI Admin] → [Verify]</b> ツールを実行して、SPI が正しく設定されていることを確認します。</li></ol>

## WASSPI-210

説明	SPI を設定できません。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>SPI 設定プロセスが失敗しました。</p> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 WLSSPI エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、問題の根本的な原因を特定します。<b>[SPI Admin] → [View Error File]</b> ツールを使用することによって、管理対象ノードの WLSSPI エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付やタイムスタンプで識別できます。</li><li>2 <b>[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。</li></ol>

## WASSPI-211

説明	ディレクトリ <directory> を作成できません。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>HP Operations エージェント ユーザーがディレクトリを作成する権限を持っていないか、またはディスクの空き領域が不足しています。</p> <p><b>処置</b></p> <p>このディレクトリについて、HP Operations エージェント ユーザーに適切な権限が付与されていることを確認します。十分なディスクの空き領域があることを確認します。</p>

## WASSPI-212

説明	WLS-5 モニタがこのノードで実行されていますが、WLS-5 サーバーが設定されていません。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>WebLogic 5 用のエージェント ポリシーがノードに割り当てられていますが、このノード上にあるどの WebLogic 5 サーバーも SPI 設定に指定されていません。</p> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 このノード上に WebLogic 5 が存在しない場合、このノードへの WebLogic 5 テンプレートの割り当てを解除し、エージェントを管理対象ノードに再配布します。</li><li>2 このノードに WebLogic 5 サーバーがある場合は、<b>[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。</li></ol>

## WASSPI-213

説明	プログラム <name> へのパラメータが不正です。用法: <usage>。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>プログラムのパラメータが不正です。</p> <p><b>処置</b></p> <p>パラメータを修正します。</p>

## WASSPI-214

説明	プログラム <program_name> を実行できません。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>プログラムの実行に失敗しました。プログラムが欠落しているか、権限が正しくないか、またはプロセステーブルがいっぱいになっている可能性があります。</p> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 ファイルが存在することを確認します。これが SPI プログラムであり、ファイルがない場合は、選択した管理対象ノードで <b>[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。</li><li>2 HP Operations エージェント ユーザーの権限が正しいことを確認します。</li></ol>

## WASSPI-215

説明	<directory> で WebLogic Server が見つかりません。
重要度	危険域
指示文	<p>原因</p> <p>WebLogic SPI の設定で HOME として指定されているディレクトリは、管理対象ノードに存在しません。</p> <p>処置</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 WebLogic Server が管理対象ノードにインストールされていることを確認します。</li><li>2 <b>[SPI Admin]</b> → <b>[Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。エラーが発生した管理対象ノード上の HOME で、正しい情報が指定されていることを確認します。</li></ol>

## WASSPI-216

説明	サーバー <server_name> 用の設定変数 <name> がありません。
重要度	危険域
指示文	<p>原因</p> <p>要求された SPI の設定プロパティが見つかりません。</p> <p>処置</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 <b>[SPI Admin]</b> → <b>[Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。</li><li>2 エラーが発生した管理対象ノードの設定に、正しい情報が指定されていることを確認します。</li></ol>

## WASSPI-218

説明	<server_name> の WebLogic 監視は Off になっています。
重要度	注意域
指示文	<p>原因</p> <p>指定したサーバーの収集がオフになっています。</p> <p>処置</p> <p>必要に応じて、<b>[SPI Admin]</b> → <b>[Start Monitoring]</b> ツールを実行することによって、収集をオンにすることができます。</p>

## WASSPI-219

説明	<server_name> の WebLogic 監視は ON になっています。
重要度	注意域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>指定したサーバーの収集がオンになっています。</p> <p><b>処置</b></p> <p>必要に応じて、<b>[SPI Admin] → [Stop Monitoring]</b> ツールを実行することによって、収集をオフにすることができます。</p>

## WASSPI-221

説明	<filename> は存在しません。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>指定されたファイルは存在しません。これがログ ファイルである場合は、ログ ファイルに記録されているエントリはありません。これがプロパティファイルである場合は、設定が行われていません。</p> <p><b>処置</b></p> <p>ログ ファイル: ファイルに書き込むエントリがなかった場合は、処置は必要ありません。それ以外の場合、<b>[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。</p> <p>プロパティ ファイル: <b>[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。</p>

## WASSPI-222

説明	<filename> が空白です。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>指定されたファイルは空白です。これがログ ファイルである場合は、ログ記録されたエントリがないか、またはエントリが消えています。これがプロパティファイルである場合は、正しく設定されていません。</p> <p><b>処置</b></p> <p>ファイルが設定ファイルである場合は、<b>[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。</p>

## WASSPI-223

説明	ファイル <filename> を読み込めません。
重要度	危険域
指示文	<p>原因</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 ファイルを開くことができないか、またはファイルが見つかりません。</li><li>2 権限が正しくないか、またはディレクトリが破損しています。</li></ol> <p>処置</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 <b>[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。エラーが発生した管理対象ノード上の <b>WebLogic Server</b> に、正しい情報が指定されていることを確認します。</li><li>2 このファイルを読み込むための適切な権限が <b>HP Operations</b> エージェント ユーザーに付与されていることを確認します。</li></ol>

## WASSPI-224

説明	ddfcomp は、<name> の設定エラーを返しました。
重要度	注意域
指示文	<p>原因</p> <p>ddfcomp はエラーを返しました。これは、<b>HP Performance Agent</b> と <b>CODA</b> がシステムにインストールされていないか、または <b>Performance Agent</b> の設定時にエラーが発生したことによります。</p> <p>処置</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 <b>Performance Agent</b> がインストールされていない場合、このエラーは無視できます。</li><li>2 インストールされている場合は、ステップを特定して問題を再現します。</li><li>3 <b>[SPI Admin] → [Start Tracing]</b> ツールを実行して、トレース機能をオンにします。問題を再現させます。</li><li>4 <b>[SPI Admin] → [Self-Healing Info]</b> ツールを実行します。このツールによって収集される情報を <b>HP</b> のサポート担当者に連絡してください。</li></ol>

## WASSPI-225

説明	ログファイルが見つかりません。Discover or Configure WLSSPI を実行したことを確認してください。
重要度	危険域
指示文	<p>原因</p> <p>ログファイル リストが空白です。</p> <p>処置</p> <p>管理対象ノード上で <b>[SPI Admin] → [Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。</p>

## WASSPI-226

説明	ファイル <filename> を読み込めません。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 ファイルを開くことができないか、またはファイルが見つかりません。</li><li>2 権限が正しくないか、またはディレクトリが破損しています。</li></ol> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 <b>[SPI Admin]</b> → <b>[Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。</li><li>2 エラーが発生した管理対象ノード上の <b>WebLogic Server</b> で、正しい情報が指定されていることを確認します。</li><li>3 このファイルを読み込むための適切な権限が <b>HP Operations</b> エージェント ユーザーに付与されていることを確認します。</li></ol>

## WASSPI-227

説明	Operations パフォーマンス エージェントがインストールされていません。データ ソースが設定されません。
重要度	注意域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>Performance 製品が利用できる場合、SPI は Performance 製品と統合されます。この警告は、利用可能なツールがないことを示します。</p> <p><b>処置</b></p> <p>Performance Agent をインストールしている場合、正しくインストールされ、正常に動作していることを確認します。必要に応じて再インストールしてください。インストールしていない場合は、このメッセージは無視できます。</p>

## WASSPI-228

説明	ddflog は、<logfile-name> のログ記録エラーを返しました。<system-error-msg>
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>ddflog はエラーを返しました。これは、SPI がパフォーマンス データのログ記録をサポートするよう、適切に設定されていないことによります。</p> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 問題があるノードで、<b>SPI for WebLogic Server</b> および <b>SPI Data Collector</b> インストールメンテーションを再配布します。</li><li>2 または、システム エラー メッセージがある場合、これを手がかりに問題を調査します。</li><li>3 <b>[SPI Admin]</b> → <b>[Start Tracing]</b> ツールを実行して、トレース機能をオンにします。問題を再現させます。</li><li>4 <b>[SPI Admin]</b> → <b>[Self-Healing Info]</b> ツールを実行します。このツールによって収集される情報を HP のサポート担当者に連絡してください。</li></ol>

## WASSPI-229

説明	ディレクトリ <code>&lt;directory_name&gt;</code> にアクセスできません。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>ディレクトリが存在しないか、またはエージェントを実行しているユーザーがディレクトリへの適切な権限を持っていません。</p> <p><b>処置</b></p> <p>管理対象ノード上で <b>[SPI Admin]</b> → <b>[Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。</p>

## WASSPI-230

説明	<code>&lt;time-interval&gt;</code> 経過後の <code>&lt;filename&gt;</code> をロックできません。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>ロックファイル <code>&lt;file&gt;</code> は、指定された <code>&lt;time&gt;</code> 内に削除されませんでした。これは、SPI プロセスの実行に時間がかかり過ぎたか、またはプロセスがハングしたことによります。また、オープンしたロックが削除される前にこのロックを含む SPI プロセスが強制終了されたために、この状態が生じる場合もあります。</p> <p><b>処置</b></p> <p>実行中の SPI プロセスがないことを確認します。手動でロック ファイルを削除します。</p>

## WASSPI-231

説明	JRE <code>&lt;JVM_file&gt;</code> の開始時にエラーが発生しました:<メッセージ>
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>Java の起動時にエラーが発生しました。このエラーは、指定した JVM が存在しない、または権限が適切でないことにより発生するほか、プロセス テーブル エントリやメモリなどのシステム リソースに関する制限や、SPI SiteConfig ファイルで JAVA_HOME 変数が正しく設定されていないことが原因で発生します。</p> <p><b>処置</b></p> <p>同時に発生している他のエラーも確認してください。これらが真の原因を示している場合があります。指定のファイルが存在しない場合、<b>[SPI Admin]</b> → <b>[Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行して、JAVA_HOME または HOME 変数を確認します。</p>

## WASSPI-232

説明	コマンド行ではサーバー <name> が指定されていますが、設定では指定されていません。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>コレクタ コマンド行で指定された <code>-i</code> または <code>-e</code> により、<b>SPI</b> 設定ファイルに一覧表示されていないサーバー名が指定されています。コレクタは、設定ファイルに一覧表示されているサーバーのみを認識します。</p> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 コマンド行で正しいサーバー名を指定します。</li><li>2 <b>[SPI Admin]</b> → <b>[Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。</li><li>3 <b>SPI</b> 設定ファイルで <b>WebLogic Server</b> 名がもれなく正確に記述されていることを確認します。</li></ol>

## WASSPI-233

説明	WLS 5.x サーバー <name> の高度な監視はできません。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p><b>WebLogic Server</b> バージョン 5 インスタンスからのメトリックを取得しようとした。メトリックと高度な監視は、<b>WebLogic Server</b> バージョン 5 ではサポートされていません。</p> <p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 <code>wasspi_ca</code> のコマンド行では、<b>WebLogic Server</b> バージョン 5 を指定しないようにします。</li><li>2 <b>[SPI Admin]</b> → <b>[Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを実行します。正しいサーバー バージョンを指定したことを確認します。</li><li>3 <b>WebLogic Server</b> をバージョン 6.0 以上にアップグレードします。</li></ol>

## WASSPI-234

説明	プログラム <file> の実行中にエラーが発生しました。戻り値: <n>
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p><b>SPI</b> がツールまたは補助プログラムを実行しようとしたが、そのときにエラーが発生しました。メッセージの &lt;file&gt; はツールまたはプログラムを示し、&lt;n&gt; は実行しようとしたときに返された戻り値を示します。</p> <p><b>処置</b></p> <p>ツールが <b>SPI</b> ツールの場合、<b>SPI</b> のインストールと設定が正しく行われていることを確認します。正しく行われていない場合は、<b>SPI</b> のインストールまたは設定を再度行います。システム ツールの場合は、システムにツールの実行を妨げる問題がないことを確認します。</p>

## WASSPI-235

説明	HP Performance Agent の再起動が失敗しました。
重要度	注意域
指示文	<p>原因</p> <p>SPI が HP Performance Agent を自動的に再起動しようとしたましたが、失敗しました。</p> <p>処置</p> <p><code>mwa restart server</code> コマンドを使用して HP Performance Agent を手動で再起動します。</p>

## WASSPI-236

説明	スタイルシート <code>&lt;xsl&gt;</code> を持つ <code>&lt;xml&gt;</code> で XSLT を実行するときに、エラーが発生しました:<メッセージ>
重要度	危険域
指示文	<p>原因</p> <p>ユーザー定義メトリックのグラフ作成準備の一環として、UDM XML の変換が行われます。このメッセージは、変換が失敗した理由について示します。</p> <p>処置</p> <p>message を確認します。最も可能性が高いのは、XML の誤りです。</p>

## WASSPI-237

説明	データ ソース <code>&lt;datasource&gt;</code> を設定しています。
重要度	正常
指示文	これは情報メッセージであり、HP Performance Manager または HP Performance Agent データソースが設定されたことを示します。

## WASSPI-238

説明	ユーザー定義メトリックが見つかりません。
重要度	注意域
指示文	<p>原因</p> <p>[JMX Metric Builder] → [WLSSPI] → [UDM Graph Enable] ツールが実行されましたが、UDM メトリックは定義されませんでした。</p> <p>処置</p> <p>UDM XML ファイルの名前が正しく設定されていることを確認します。</p>

## WASSPI-241

説明	ファイル <file> を削除できません。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>SPI がファイルを削除しようとしたますが、削除できませんでした。ファイル保護機能が HP Operations エージェント ユーザーによるファイル削除を許可しないように設定されているか、ファイルの削除を妨げる問題がシステムで発生している可能性があります。</p> <p><b>処置</b></p> <p>ファイル保護の設定が正しいことを確認します。</p>

## WASSPI-244

説明	ノード <node> に対する設定が無効です。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>対象のノードが所定の形式で設定されていません。</p> <p><b>処置</b></p> <p>HP Operations Manager コンソールから <b>[SPI Admin]</b> → <b>[Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを起動して、リストからノードを選択します。このノードに対して設定されているプロパティが有効であることを確認します。<b>[Confirm Operation]</b> ウィンドウの <b>[OK]</b> ボタンをクリックし、検出プロセスを再度開始します。</p>

## WASSPI-245

説明	認識できない変数 <var> がノード <node> に設定されています。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>予期しない変数がノードに設定されています。</p> <p><b>処置</b></p> <p>HP Operations Manager コンソールから <b>[SPI Admin]</b> → <b>[Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを起動して、リストからノードを選択します。メッセージ内の変数 &lt;var&gt; が有効であることを確認します。<b>[Confirm Operation]</b> ウィンドウの <b>[OK]</b> ボタンをクリックし、検出プロセスを再度開始します。</p>

## WASSPI-247

説明	HPOM サーバーで、ノード <node> に対する <product> 設定の更新に失敗しました。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>対象のノードが所定の形式で設定されていません。</p> <p><b>処置</b></p> <p>HP Operations Manager コンソールから <b>[SPI Admin]</b> → <b>[Discover or Configure WLSSPI]</b> ツールを起動して、リストからノードを選択します。このノードに対して設定されているプロパティが有効であることを確認します。<b>[Confirm Operation]</b> ウィンドウの <b>[OK]</b> ボタンをクリックし、検出プロセスを再度開始します。</p> <p>問題が引き続き発生する場合は、HP サポートに連絡し、サポート担当者に以下の情報を提供します。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 問題再現に関する手順やその他の情報</li><li>2 %OvInstallDir%\install\WASSPI\WLSSPI\English\Discovery\log ディレクトリにあるトレース ファイル</li></ol>

## WASSPI-248

説明	<policy> ポリシー グループを <node> に配布できません。
重要度	注意域
指示文	<p><b>処置</b></p> <p>『HP Operations Manager for Windows のオンライン ヘルプ』で、配布に関するトラブルシューティングのセクションを参照してください。問題が引き続き発生する場合は、HP サポートに連絡してください。</p>

## WASSPI-249

説明	<node> でのエージェント インストール ディレクトリを取得できません。
重要度	危険域
指示文	<p><b>処置</b></p> <p>管理対象ノードに WLSSPI 検出ポリシーを再配布します。<b>[Deploy policy only if version is newer checkbox]</b> チェックボックスが選択されている場合は、選択を解除します。</p> <p>問題が引き続き発生する場合は、HP サポートに連絡し、サポート担当者に以下の情報を提供します。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 問題再現に関する手順やその他の情報</li><li>2 次のディレクトリにあるトレース ファイル。 %OvInstallDir%\install\WASSPI\WLSSPI\English\Discovery\log</li></ol>

## WASSPI-254

説明	Java はエラーを発生して終了しました。
重要度	危険域
指示文	<p><b>原因</b></p> <p>コレクタまたはその他の <b>Java</b> アプリケーションの実行中に、<b>Java</b> で何らかのエラーが発生したか、または <b>Java</b> アプリケーションがエラー終了しました。</p> <p><b>処置</b></p> <p>同時に発生している他のエラーも確認してください。これらが真の原因を示している場合があります。また、<b>SPI</b> のエラー ログを確認すると、他の手がかりが得られる場合もあります。</p>

## その他のすべてのエラー

説明	WebLogic SPI エラー ログに不明なエラーが表示されています。
重要度	注意域
指示文	<p><b>処置</b></p> <ol style="list-style-type: none"><li>1 <b>WLSSPI</b> エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、問題の根本的な原因を特定します。このエラー メッセージの前のエラー メッセージにも、問題の詳細が表示されている場合があります。<b>[SPI Admin]</b> → <b>[View Error File]</b> ツールを使用することによって、管理対象ノードの <b>WLSSPI</b> エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付やタイムスタンプで識別できます。</li><li>2 ステップを特定して、問題を再現します。</li><li>3 <b>[SPI Admin]</b> → <b>[Start Tracing]</b> ツールを実行して、トレース機能をオンにします。問題を再現させます。</li><li>4 <b>[SPI Admin]</b> → <b>[Self-Healing Info]</b> ツールを実行します。このツールによって収集される情報を <b>HP</b> のサポート担当者に連絡してください。</li></ol>



# 用語集

## ASCII

American Standard Code for Information Interchange の略。

## HP Operations Manager

ネットワークおよびシステム管理製品のファミリ、およびそれらの製品のためのアーキテクチャ。HP Operations Manager には、開発環境と幅広い管理アプリケーションが含まれています。

## HTTP (Hypertext Transfer Protocol)

WWW (World Wide Web) のクライアントとサーバーが通信で使用するプロトコル。

## HTTPS

Hypertext Transfer Protocol Secure の略。

## Microsoft 管理コンソール (MMC)

IT 環境管理のためのソフトウェアの枠組みを提供するマイクロソフト製品。管理製品は、管理コンソールに追加、または「組み込まれて」、Microsoft 管理コンソールの管理機能を拡張します。

## SPI (Smart Plug-In)

管理コンソールにインストールされ、特定の種類のビジネス アプリケーション、データベース、オペレーティング システム、またはサービスに固有の管理機能を提供する、事前にパッケージ化されたソフトウェア。

## アイコン

ユーザーに監視され操作されるオブジェクト、またはユーザーに実行されるアクションに対応する画面上のイメージ。

## アプリケーション

一連の関連タスクを実行するための機能を備えたパッケージ ソフトウェア。アプリケーションは、一般的に、ツールよりも複雑です。

## イベント

管理対象オブジェクト内のエージェントまたはプロセス、あるいはユーザー アクションによって生成される、SNMP トラップや WMI 通知のような、任意型の通知。イベントは、通常、管理対象オブジェクトの状態変化を示し、特定のアクションが行われる要因となります。

## エラー ログ

エラー メッセージを含む出力ファイル。

## エージェント

リモートのデバイスまたはコンピュータ システムで動作するプログラムまたはプロセス。管理要求に応答し、管理オペレーションを実行し、パフォーマンスおよびイベント 通知を送信します。エージェントには、

管理対象オブジェクトおよび MIB 変数へのアクセス、リソース ポリシーの解釈、リソースの設定などの機能があります。

### **カスタマイズ**

特定のカスタマまたはユーザーの必要性和好みに合わせて、ソフトウェアの設計、構築、または変更を行うプロセス。

### **カスタマイズ**

特定のカスタマまたはユーザーの必要性和好みに合わせて、ソフトウェアの設計、構築、または変更を行う。

### **管理コンソール**

ユーザーが管理アプリケーションまたは管理アプリケーション セットを制御する、ユーザー インタフェースのインスタンス。コンソールは、管理ソフトウェアを含むシステム、または管理ドメイン内の別のシステムに付属しています。

### **管理サーバー**

クライアントに対して、管理サービス、管理プロセス、または管理用ユーザー インタフェースを提供するサーバー。管理サーバーは、管理ステーションの一種です。

### **管理対象オブジェクト**

パフォーマンス、ステータス、およびメッセージが監視され、管理ソフトウェアのアクションにより操作される、ネットワーク、システム、ソフトウェア、またはサービスのオブジェクト。

### **クライアント**

コンテキストがネットワーク システムである場合には、別のコンピュータ (サーバー) のサービスにアクセスする、ネットワーク上のコンピュータ システム。コンテキストがソフトウェアである場合には、サーバーへサービスを要求するプログラムまたは実行プロセス。

### **クライアント コンソール**

アプリケーションがサーバーで動作しているときに、クライアント システムで動作するユーザー インタフェースのインスタンス。

### **構成 (設定)**

ネットワークのコンテキストでは、ネットワークを形成する、相互に関連するシステム、デバイス、およびプログラムの全集合。たとえば、ネットワークのコンポーネントには、コンピュータ システム、ルーター、スイッチ、ハブ、オペレーティング システム、ネットワーク ソフトウェアなどがあります。ネットワークの設定によって、ネットワークの機能と使用方法が決まります。ソフトウェアのコンテキストでは、ソフトウェアのパラメータと属性の設定の組み合わせであり、ソフトウェアの動作、使用方法、および表示方法を決定します。

### **コマンド**

コンピュータ プログラムに対する指示。この指示に基づいて、指定したオペレーションが実行されます。コマンドは、通常、コマンド行でユーザーにより入力されます。

### **コンソール**

ユーザーがアプリケーションまたはアプリケーション セットを制御する、ユーザー インタフェースのインスタンス。

### **サーバー**

コンテキストがハードウェアとソフトウェアを合せたものである場合は、ネットワーク上の他のコンピュータ システム (クライアント) にサービス (たとえば、管理機能やファイル保管機能) を提供するコンピュータ

システム。コンテキストがソフトウェア コンポーネントである場合は、クライアントが発行したサービス要求に応答するプログラムまたは実行プロセス。

### **自動アクション**

定義済みのプログラムまたはスクリプト。オペレータの介入なしで、イベント、メッセージ、または管理データベース内で変化のあった情報に反応して実行されます。

### **重要度**

オブジェクトのステータスを示す、オブジェクトのプロパティ。重要度は、オブジェクトに関連付けられたイベントまたはメッセージの影響度に基づきます。

### **接続**

オブジェクト間の論理的または物理的な関係の表現。

### **設定ファイル**

ソフトウェア プログラムの見え方と動作を決定する仕様または情報を含むファイル。

### **設定する**

指定した環境、アプリケーション、または使用法の要件を満たすために、指定したソフトウェアの設定を定義、または変更する。

### **データ タイプ**

特定のデータ。たとえば、電子的に格納されているデータのデータベース レポジトリ。データベースは、通常、体系化されているため、データの取得や更新が可能です。

### **トレース ログ**

アプリケーション ソフトウェアの実行記録を含む出力ファイル。

### **ノード**

コンテキストがネットワークの場合は、ネットワーク内のコンピュータ システムまたはデバイス (たとえば、プリンター、ルーター、ブリッジ)。コンテキストがグラフィカルなポイント ツー ポイント レイアウトの場合は、図の中の、他のグラフィカル要素との結合点または接続点としての機能を持つグラフィカル要素です。

### **配布**

ソフトウェア、ハードウェア、機能、またはサービスを、ビジネス環境で機能するようにインストールしてアクティブ化するプロセス。

### **配布する**

ソフトウェア、ハードウェア、機能、またはサービスを、ビジネス環境で機能するようにインストールして起動させる。

### **配布済みアプリケーション**

ビジネス環境で機能するようにインストールして起動された、アプリケーションとそのコンポーネント。

### **配布済みポリシー**

コンピューティング環境内の 1 つ以上のリソースに配布されたポリシー。

### **配布パッケージ**

管理対象ノードに自動的に配布されてインストールされるソフトウェア パッケージ。

## パラメータ

コンピュータ プログラムまたはプログラム内のプロシージャの実行中に、使用する任意の値を指示する変数または属性。

## パラメータ タイプ

パラメータで有効なデータの種類を決定する、パラメータの抽象化または分類。たとえば、パラメータ値が小数点で区切られた 4 つの数値で構成され、それぞれの数値が 0～255 の範囲である IP アドレスは、パラメータ タイプのうちの 1 つです。

## パラメータの値

変数に割り当てられる値。

## ポリシー

ネットワーク、システム、サービス、およびプロセスの管理を自動化するのに役立つ、1 つ以上の仕様ルールまたは他の情報の集合。ポリシーは、各種のターゲット（たとえば、管理対象のシステム、デバイス、ネットワーク インタフェース）に配布可能で、ネットワーク全体を通じて、整合性のある、自動化された管理機能を提供します。

## ポリシー管理

ネットワーク、システム、またはサービスの管理用に、ポリシーを制御するプロセス（作成、編集、追跡、配布、削除など）。

## ポリシー タイプ

ポリシーの機能またはポリシーがサポートするサービスに基づく、ポリシーの抽象化または分類。

## ポート

コンテキストがハードウェアの場合は、ネットワーク デバイスの情報を送受信する場所。コンテキストが ECS の場合は、関連処理ノードの情報を送受信する場所。

## メタデータ

データを定義するデータ。

## メッセージ

イベント、指定した条件に関連するイベントの評価、またはアプリケーション、システム、ネットワークまたはサービスのステータスの変化の結果として生成される通知であり、構造化されていてわかりやすい。

## メッセージ キー

特定のイベントが契機となったメッセージを識別するために使われる、文字列で構成されるメッセージ属性。文字列には、イベントの重要な特製が要約されています。メッセージ キーを使用すると、メッセージで他のメッセージを認識したり、重複したメッセージを識別したりすることができます。

## メッセージの重要度

メッセージの契機となったイベントまたは通知の影響度を示す、メッセージのプロパティ。「重要度」も参照してください。

## メッセージの説明

イベントまたはメッセージに関する詳細情報。

### **メッセージ ブラウザ**

イベント、指定した条件に関連するイベントの評価、またはアプリケーション、システム、ネットワークまたはサービスのステータスの変化の結果として生成される通知を表示する GUI。

### **メトリック**

特定の動作特性またはパフォーマンス特性を定義する尺度。

### **モジュール**

特定のタイプのタスクを実行、または特定のタイプのデータを提示する、自己完結型のソフトウェア コンポーネント。モジュールは、他のモジュールまたは他のソフトウェアと相互に作用します。

### **割り当て済みポリシー**

コンピューティング環境内で 1 つ以上のリソースに割り当てられているが、それらのリソースにまだ配布やインストールが行われていないポリシー。



# 索引

## A

Add Application Server アクション 131, 132  
Add Node アクション 131, 133  
ADDRESS プロパティ 140  
ADMIN\_HOST プロパティ 140  
ADMIN\_PORTS プロパティ 140, 141  
ALIAS プロパティ 142  
Application Servers ツリー項目 130  
ASCII テキスト レポート 17

## B

BEA\_HOME\_LIST プロパティ 142

## C

Cancel ボタン 131  
Check WebLogic ツール 62  
    機能 63  
CODA  
    使用法 55  
COLLECT\_METADATA プロパティ 143  
Configuration Editor  
    ボタン 131  
Configuration ツリー項目 130

## Configure WLSSPI

Add Application Server アクション 131, 132  
Add Group アクション 131, 133  
Add Node アクション 131, 133  
Application Servers ツリー項目 130  
Cancel ボタン 131  
Configuration ツリー項目 130  
Default Properties ツリー項目 130  
Defaults ツリー項目 130  
Exit アクション 132  
Finish ボタン 131  
Groups ツリー項目 130  
Next ボタン 131  
Nodes ツリー項目 130  
Remove ALL App Servers アクション 132, 134  
Remove ALL Groups 132, 134  
Remove ALL Nodes アクション 132, 135  
Remove Application Server アクション 132, 134  
Remove Group アクション 132, 134  
Remove Node アクション 132, 135  
Save アクション 132  
Save ボタン 131  
[Set Configuration Properties] タブ 132, 135  
[View Configuration Settings] タブ 132, 136  
アイコン 129  
アクション 131  
使用法 129

Configure WLSSPI ツール 58

## D

Default Properties ツリー項目 130  
Defaults ツリー項目 130  
Deploy UDM ツール 67  
Discover or Configure WLSSPI ツール 59  
    機能 59  
discovery ポリシー 71  
Discover ツール  
    LOGIN と PASSWORD の設定 42

## E

EXCLUDE\_SAMPLES プロパティ 143

Exit アクション 132

## F

Finish ボタン 131

## G

Gather MBean Data ツール 67

GRAPH\_URL プロパティ 143

Groups ツリー項目 130

GROUP ブロック 127

## H

HOME\_LIST プロパティ 144

HOME プロパティ 143

HP Performance Agent 95

HP Performance Manager  
WebLogic SPI に統合 98

## I

Init Non-Root ツール 58, 59  
機能 59

## J

JAVA\_HOME プロパティ 144

JMB\_JAVA\_HOME プロパティ 144

JMX Metric Builder ツール 68

JMX コマンド パラメータの使用方法 78

## K

KEYSTORE プロパティ 144

## L

LOGFILE プロパティ 144

logfile ポリシー 69

LOGIN  
設定 42

LOGIN プロパティ 144

## N

NAME プロパティ 144

Next ボタン 131

NODE\_NAMES プロパティ 145

Nodes ツリー項目 130

NODE ブロック 128

NUM\_SERVERS プロパティ 145

## P

PASSPHRASE プロパティ 145

PASSWORD  
設定 42

PASSWORD プロパティ 145

PORT プロパティ 145

PROTOCOL プロパティ 145

## R

Remove ALL App Servers アクション 132, 134

Remove ALL Groups アクション 132, 134

Remove All Nodes アクション 132, 135

Remove Application Server アクション 132, 134

Remove Group アクション 132, 134

Remove Node アクション 132, 135

Reporter  
WebLogic SPI に統合 95

RMID\_START\_TIME プロパティ 146

## S

Save アクション 132

Save ボタン 131

Self-Healing Info ツール 58, 59  
機能 60  
必要な設定 60

[Set Access Info for Default Properties] ウィンドウ 42

Set Configuration Properties 132

[Set Configuration Properties] タブ 135

[Set Configuration Settings] タブ  
プロパティの削除 136  
プロパティの設定 135  
プロパティの変更 136

SPI Admin ツールグループ 57

START\_CMD プロパティ 146

Start Monitoring ツール 58, 60  
機能 60

Start Tracing ツール 58, 60  
機能 60

Start WebLogic ツール 62, 63  
機能 63  
必要な設定 63

Start WLS Console ツール 62, 63  
機能 63  
必要な設定 63

STOP\_CMD プロパティ 146

Stop Monitoring ツール 58, 60  
機能 60

Stop Tracing アプリケーション 58, 60  
機能 60

Stop WebLogic ツール 62, 63  
機能 63  
必要な設定 63

swinstall 26  
ポリシーの再インストール 84

## T

TIMEOUT プロパティ 146

## U

UDM\_DEFINITONS\_SOURCE プロパティ 147

UDM Graph Disable ツール 68

UDM Graph Enable ツール 68

URL\_PATH 147

URL\_PATH プロパティ 147

USER プロパティ 147

## V

Verify ツール 58, 61  
機能 61

VERSION プロパティ 148

View Application Activation Status 65

View Application Activation Status ツール 65  
機能 66  
必要な設定 65

View Application Timeout 66

View Application Timeout ツール 66  
機能 66

[View Configuration Settings] タブ  
View Inherited Properties 137

View Current Configuration 132

[View Current Configuration] タブ 136

View Deployed Apps ツール 62, 64  
機能 64

View Error File ツール 58, 61  
機能 61

View Graphs ツール 58, 61  
機能 61  
必要な設定 61

View Inherited Properties 137

View WebLogic Log ツール 62, 64  
機能 64

View WebLogic Servers ツール 62, 64  
機能 65

## W

WASSPI-35 166, 167, 168, 169

wasspi\_wls\_ca コマンド 76  
パラメータ 76

WebLogic Admin ツールグループ 61

WebLogic SPI  
概要 15  
コンポーネント 14

WebLogic SPI ノード グループ  
ノードの追加 38

WLSSPI Discovery ポリシー グループ 71

WLSSPI-Logfiles ポリシー グループ 69

WLSSPI-Metrics ポリシー グループ 70

WLSSPI-Messages ポリシー 71

## あ

アクション  
オペレータ起動 73  
カスタマイズ 73  
自動 73

アップグレード 27  
WebLogic SPI レポート パッケージ 27, 122

アプリケーション サーバー  
ステータスの確認 36

アプリケーション サーバーのステータス  
確認 36

## い

- インストール 26
  - swinstall 26
- WebLogic SPI レポート パッケージ 96

## え

- エラー メッセージ 154 to 183

## お

- オペレータ
  - 作業範囲の割り当て 33
- オペレータ起動アクション 73
- オペレータ作業範囲の割り当て 33

## か

- 確認
  - アプリケーション サーバーのステータス 36
  - 検出プロセス 44
- カスタマイズ 14
  - アクション 73
  - 継続時間 73
  - しきい値 73
  - 重要度 73
  - メッセージ テキスト 73
- 監視
  - サポートされていないプラットフォーム 88
  - リモート システムのログファイル 91
- 管理サーバー
  - 設定 38
- 管理対象ノード
  - WebLogic SPI ノード グループへの追加 38

## く

- グラフ
  - HP Performance Manager 95
  - オペレータ アクション 100
  - 警告通知条件の表示 99
  - 状態の表示 99
  - 生成 100
  - 日付の範囲 100
- グローバル プロパティ 127

## け

- 警告通知
  - 修正 74

- 継続時間
  - カスタマイズ 73

- 検出プロセス
  - 確認 44

## こ

- 構造
  - 設定 127
- 構文
  - 設定 127
- コレクタ
  - wasspi\_wls\_ca コマンド 76
- コレクタ ポリシー 70
- コンポーネント 14

## さ

- サーバー固有のプロパティ 128
- 再インストール
  - ポリシー 84
- サポートされていないプラットフォーム
  - 監視 88

## し

- しきい値
  - カスタマイズ 73
  - 個々のサーバーについて設定 82
- 指示文
  - 場所 16
- 収集間隔
  - 選択したメトリックの変更 81
  - 変更 80
- 修正
  - 警告通知 74
  - ポリシー 72

- 使用法
  - Configure WLSSPI 129

- 自動アクション レポート 85

- 自動起動アクション 73

- 重要度
  - カスタマイズ 73

- 条件付きプロパティ
  - 設定 48

## せ

### 制限

リモート システム 92

### 設定

管理サーバー 38

構造 127

構文 127

条件付きプロパティ 48

前提条件 33

プロパティ 138

リモート システム 89

### 設定エディタ

「*Configure WLSSPI*」参照

### 設定例

仮想 IP アドレス 151

グループとノード プロパティ 150

単一のノード /2 つのサーバー 149

デフォルト以外の WLS 起動場所 152

複数の WLS バージョン 151

### 前提条件

設定 33

## た

### タグ オプション

カスタム テンプレート グループの作成 83

## つ

### 追加

ノードの WebLogic SPI ノード グループへの追加 38

## ツール 15

Check WebLogic 62

Deploy UDM 67

Discover or Configure WLSSPI 58, 59

Gather MBean Data 67

Init Non-Root 58, 59

JMX Metric Builder 68

Self-Healing Info 58, 59

Start Monitoring 58, 60

Start Tracing 58, 60

Start WebLogic 62, 63

Start WLS Console 62, 63

Stop Monitoring 58, 60

Stop Tracing 58, 60

Stop WebLogic 62, 63

UDM Graph Disable 68

UDM Graph Enable 68

Verify 58, 61

View Application Activation Status 62

View Application Timeout 62

View Deployed Apps 62, 64

View Error File 58, 61

View Graphs 58, 61

View WebLogic Log 62, 64

View WebLogic Servers 62, 64

WLSSPI レポート グループ 67

## て

テキスト ベース レポートの表示 85

## と

### 登録ツール

レポート 67, 86

## は

### 配布

ポリシー 45

## ひ

### 表示

レポート 86

## ふ

ファイル、管理サーバー / 管理対象ノード上の場所 112

プロパティ 138

WebLogic SPI 要件に一覧表示 139

グローバル 127

サーバー固有 128

条件付きの設定 48

定義 139 to 148

優先順位 128

## へ

編集

警告通知 74

ポリシー 72

## ほ

ポリシー 14

discovery 71

WLSSPI-Messages 71

カスタマイズ 72

コレクタ 70

再インストール 84

修正 72

配布 45

メッセージ 71

メトリック 70

モニタ 70

ログ ファイル 69

ポリシー グループ 14

WLSSPI Discovery 71

WLSSPI-Logfiles 69

WLSSPI-Metrics 70

WLSSPI-Monitor 70

カスタマイズ 83

収集間隔の変更 81

## め

メッセージ

指示文 16

メッセージ ブラウザ 16

メッセージ テキスト

カスタマイズ 73

メッセージ ポリシー 71

メトリック

収集データ 13

メトリック ポリシー 70

メトリック レポート ツール グループ 67

## も

モニタ ポリシー 70

## ゆ

ユーザー定義メトリック

グラフ 109

## よ

要件

リモート システム 88

## ら

ライセンス数 93

## り

リモート システム 88

概要 88

制限 92

設定 89

設定の要件 89

動作の仕組み 88

ポリシーの要件 89

要件 88

ログファイルの監視 91

## れ

レポート

HP Performance Insight 95

Reporter 95

警告通知から生成されたレポート 67

手作業で生成するレポート 86

自動アクション 85

登録ツール 86

登録ツール レポート生成 67

表示 86

含まれた 18

レポート パッケージ 18

インストール 96, 122

## We appreciate your feedback!

If an email client is configured on this system, by default an email window opens when you click on the bookmark “Comments”.

In case you do not have the email client configured, copy the information below to a web mail client, and send this email to **docfeedback@hp.com**

**Product name:**

**Document title:**

**Version number:**

**Feedback:**

